
“ Variant ”

犬野ミケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“Variant”

【Nコード】

N6813L

【作者名】

犬野ミケ

【あらすじ】

栄華を誇った人間が、『バリエーション』という怪物に全ての覇権を明け渡さざるをえなくなってしまった世界。

その世界の中で、一人の少年が情勢をかき混ぜていく。

登場人物など（前書き）

- ・ネット上のマナーはきちんと守って下さい。
- ・宣伝目当てのコメントは止めてください。作品に関するコメントのついで、というならOKです。
- ・誤字や脱字、誤変換が多いです。私の知らないところであつたら、バンバン注意してくれると助かります。
- ・感想やアドバイス大歓迎です。
- ・題名にも書いてある通り、グロ表現が多いので、苦手な人はお戻りください。

登場人物など

クリックありがとうございます。

初めまして、犬野ミケです。見た事がある、という人は、気軽にコメント下さい。

皆さんお上手でドキドキワクワクですが、温かく見守ってくださると嬉しいです。

駄文だとは思いますが、どうぞお付き合いください。

【注意】

- ・ネット上のマナーはきちんと守って下さい。
- ・宣伝目当てのコメントは止めてください。作品に関するコメントのついで、というならOKです。
- ・誤字や脱字、誤変換が多いです。私の知らないところであつたら、バンバン注意してくれると助かります。
- ・感想やアドバイス大歓迎です。
- ・題名にも書いてある通り、グロ表現が多いので、苦手な人はお戻りください。

【登場人物】 近々整理したいです。。

ローダ騎士団

ルネ（ルーネ・ギルデン）：主人公。

フィル・カーソン

イオリ・ナガサワ

ストエカス・デュオ

ウインストン・マーシュ

ヴォット・ザク

スピキオ・ザク

リム・レム（リオネル・ギルデン）

行商人ギルド・ヴォーリヤ

セイン・ウスタス

ルーファス・ノジャン

アデラ・カノルザ

ユーグ・バルバロサ

ライリー・エディッサ

ポーレット・ラウラン

ナハト・ブロワ

戦闘用擬人型

グラード

プルー

パゴーダ

グローム

ヴェルト

ネジュ

その他

ロベール・モーリア

テオファーン・ギルデン（旧姓、レム）

シルヴィア・ギルデン

崩壊と共に来た新興は災厄を引き連れて

沃歴二百年程、人類は完全に大地の覇権を明け渡した。手のつけられなくなった世界を、手に負えなくなった世界を。

文明を失い、栄華を手放す。人類に残された道は唯一それしかなかった。

事実、人類は確実に衰退していった。

今や、残されているのはほんの僅か。全盛期と比べれば、芥子粒程と言っても決して過言ではない。町村が大陸に点在する程度となっていた。だが、その命も希望も、確実に潰されていくだろう。

新しい、ありとあらゆる生物の頂点に立つ王に。人類が覇権を明け渡した、怪物に。

彼らは鋭い牙を持ち、硬い爪を持ち、何者をも弾き返す鱗を持っていた。更に獰猛で凶悪、人類にとっては未知の理解しがたい能力さえ持ち得ていた。大きい者から小さい者まで様々、付随する能力も千差万別だった。故に対抗策が定まらない。

数千年間、人類が培ってきた文化、力、その全てが圧倒され、否定するが如く粉微塵に破壊され尽くした。あつと言う間に、呑み込まれた。

恐ろしい、まるで神話や御伽噺の類に出てくるような怪物を、人々は畏怖を込めてこう呼んだ。

“Variant”

それに由来し、今ではその怪物は『バリエント』と呼ばれる。由来となった語、その意味は――

異形

溢れる程の罪を両手に抱えた無邪気な悪

一人の少年が穴を掘っていた。少し緑色を含んだ淡い金髪と、森を連想させる深緑の大きな瞳を有する、十七歳程のまだ年端もいかぬ少年。少年は一時も休むことなく、穴を掘り続ける。

少年の傍らには、山が出来ていた。今まで少年が掘って来た土の山、ではない。大きな物が積み上げられて出来た山だった。

それは、人だった。

人の屍によつて、その山は築かれていた。死んでから相当時間が経っているらしく、死体達の体には蠅が集り子を産みつけ、子である蛆虫が肉を喰い荒らしていた。腐敗も進み、吐き気を催す臭いを撒き散らしている。しかし、少年は気にも留めない。屍達の傍らで、唯、黙々と穴を掘るのみ。

ようやく大人が両手をいっぱいに広げられる大きさの、深さも十分に穴を掘ると、少年は満足気にに息を吐き手の甲で額を擦った。擦った時に土が触れたのか、少年の額に茶色の一文字が浮かぶ。

穴を一つ掘り終えた少年が歩む先は、屍の山。一番上の死体の腕と思しき場所に手を掛け、一息に引きずり落とす。急な刺激に驚いたのか、蠅が一斉に飛び立つ。周りを煩く飛び回る蠅を少年は厭わずに穴まで引きずっていく。虚ろな死者の眼窩から、蛆虫が数匹転がり落ちた。

遠心力を使い穴の中に投げ入れた屍の足の先が、穴の端から出ていた。少年は、それを死者の膝を曲げてそつと中に入れる。そして、上から土を入れていく。

死者の体が完全に埋まれば、スコップの平らな面で土を均す。綺麗に整えば、どこからか拾ってきた粗末な木の枝を目印とばかりに突き刺す。それは、彼なりの墓標だった。そして彼は今、かつての

同郷の者達を埋葬しているのだった。一人で、延々と。
少年は村の中の唯一の生き残りだった。

少年——ルネは、また穴を掘る作業に取り掛かる。

*

*

*

男はその日何度目かの溜息を吐いた。目頭を右手の人差し指と中指で摘み、少しでも疲れを取り除こうと揉む。しかし効果は今一つだったようで、すぐに右手を降ろし肘掛に置いた。苦渋の表情は少しも和らぐことはない。

「まだ着かんのか」

「もうすぐ、もうすぐです!」

男の静かな問いに、彼の部下が上ずった声で叫び返した。男はそれを聞き、僅かに眉間に皺を深くする。

手元にあつたワイングラスを一気に呷り、乾いた喉を潤す。温くなった葡萄酒は安物という事も相俟ってか、吐き気を催す程不味かった。これでは悪酔いしたとしても不思議ではない。男の苛立ちが更に募る。乱雑に手を振ると、怯えて尻込みした給史がグラスを下げていった。

男は頭痛を覚え、こめかみを押さえる。そう、操縦士の言う通りだ。もうすぐだ、と男は誰にともなく呟く。もうすぐ自分の野望が叶う。全てが自分のものとなる。全てが始まり、全てが終わる時が来る。もうすぐ、もうすぐ……

「いそげ」

男はその日何度目かの溜息と共に、部下に命じた。
男の乗った乗り物——飛行艇は進む。

*

*

*

腹の底に響いて振動する、それでいて耳障りな音を聞き、穴掘りの作業に没頭していたルネは頭上を仰いだ。そして深緑の瞳を大きく見開く。瞳には抑えきれない好奇心が渦巻いていた。それはルネにとって夢のような話だった。

「凄い……！」

村の上空に堂々と浮かんでいたのは巨大な飛行艇だった。巨大な船体は日光を遮り、これまた大きな影を落とす。飛行艇、という表現は正しくないのかもしれない。あくまで形がそれに類似している、といったただけだ。また、飛行艇という言葉にも当てはまらない。プロペラなどは一切見受けられず、ガスも噴射されていない。全体的な形としては船形である。しかし帆や帆柱は無く、代わりに大砲が備え付けられている。軍艦、鉄を鎧う巨大な兵器だった。

そんなプロペラもエンジンも持たない重い鉄の塊が浮かぶのには訳がある。それは、船の腹の部分に大きく印されていた。巨大な飛行艇の丸みを帯びた腹には、大きく黒々と複雑な紋様が描かれている。線が交わりあい、絡み合いできた優美かつ繊細なその紋様こそが、飛行艇の動力源であった。紋様が物質に力を与えているのである。その紋様はベルヴェルグと呼ばれるもので、元を辿ればバリアントから発見された技術だ。彼らの体には、必ず同じような痣が見られる。それが個々の扱う能力に影響している。

しかし、ルネはそのような経緯を知らない。辺境の村で育った彼は、最新技術と呼ばれるものに酷く疎かった。火を起こすような些細なものしか実際に起動したものは見たことが無かった。

理由は、村のせいだけではないかもしれないが。

兎に角、ルネは飛行艇というものを知らなかった。その為、感想は凄いとしか言い様がない。彼は夢中で飛行艇を見上げ、瞳にその姿を焼き付けようと目を凝らしていた。

「えッ……？」

そして見つけた。次々と飛行艇から飛び出してくる影を。

ルネが驚いたのはそれだけではなかった。飛行艇かた飛び出してきたいくつかの影は、重力に従って真下にいるルネの下へと急降下を始める。猛スピードで落下してきた影達を地面にぶつかると思った瞬間、ルネは思わず目を強く瞑っていた。

だが、いつまで経っても肉の潰れる音は聞こえてこない。何の音もルネの耳には入ってこなかった。恐る恐る目を開くと、まず目に入ったのは黒い人型、頭から足先までを黒く統一した集団だった。黒づくめの集団はルネの周りを輪を描くようにして囲んでおり、それぞれ黒く細長い円筒状の物を携えていた。皆一様に、円筒の先をルネに向かって突きつけている。

ルネは世間知らずで無知だ。今まで常に周りから隔絶された生活を送ってきた。その為、世情に著しく疎い。故に自分に向けられているものが銃であるという事も、そこから噴出された白い煙が催眠ガスだという事も、知る由が無かった。

*

*

*

或るいは一時間前。

初春のまだ肌寒い風を僅かに感じる、薄暗い森の中。昼間だといふのに足下が曖昧になる程日光を遮る生い茂った木の枝を見上げ、男が呆れて呟く。

「うげえ、参るなこれは。こんだけ暗けりやテンションもガタ落ちだつての……なあ、イオリ聞いているか？」

悪態を吐く男がイオリと呼んだ傍らの男は、無然とした表情を見せて男を無視する。そして、置いていこうと騎乗した動物に拍車をかけて足を速めた。

「だっ！？ 酷ッ酷いぞっ人を無視するな！！」

「煩い黙れ喧しい口を閉じろそこら辺の木の枝にでも突き刺さつて死んでおけ」

人差し指を勢い良く突きつけ、罵声を上げる男——ファイ
ルに激烈な言葉を重ねに重ねるイオリ。

奇妙で珍妙な二人組み、フィルとイオリ。二人の纏う服は揃いの物だった。黒に近い藍色を基調とした、軍服。右上腕部には鳥が大きく翼を広げる図柄の刺繍が施されており、その下には同じく刺繍で文字が刻まれていた。

『ローダ騎士団』

それは小規模ながらも、広く名を轟かせている一団だった。實力は元より、別の意味でも有名なローダ騎士団。羽觴のローダの二つ名を拝し、騎士団の名を冠すローダ騎士団だが、その本質は他の騎士団とは大きく異なると言っても良い。むしろ、賞金稼ぎの集まりに近い。

まず、本部という物が存在しない。彼らには帰る地は何処にもない。その分、施設の維持費が必要なく、あちこちを自由に動き回れる事が利点である。次に、非常に少人数であること。その数――

――八人。かなり少ないが、個々の能力は高い。実力だけなら、どの実在する騎士団にも勝るだろう。少数ゆえに、消耗戦には堪えられないのが弱点ではあるが。

そのローダ騎士団が二人、フィル・カーソンと長沢イオリは迷うことなく森を進む。ある男に止めを刺すこと、その為に。

他愛無い会話をしながら進む二人を、瞬きすらせずに木の上から凝視する瞳があった。二人が視界から消えうせると、瞳の持ち主は大きく鮮やかに目に写る黄色の翼を広げ、上空へと羽ばたいていく。そして煌々と地を照らす太陽い向かって、一声甲高くしゃがれた鳴き声を上げた。

まるで挑戦を叩きつけるかのような鳴き声は、言葉の羅列にも似ていた。

*

*

*

「失礼いたします」

控えめな声とそれに比例した小さな声と共に扉が開かれ、ルネは慌ててベッドから飛び起きた。入ってきたのは濃紺のワンピースの上から白いエプロンを重ねた姿の女中だった。艶やかな髪を肩口で切りそろえ、引き締まった雰囲気のある女である。元氣そうに振舞うルネの様子を見て、驚き目を見開いている。

「ど、どうして起きていらっしゃるのですか……?」

「どうしてって、部屋に誰か来てるのに寝てちゃ失礼だと思ったから」

ルネは女中の反応に困り、頬を人差し指で掻きつつ答えた。女中の言葉の意味が理解できない。然し女中はその言葉にはつきりと首を横に振る。

「違います。そういう意味で言ったではありません」

女中は一瞬溜めるように間を置く。

「先程貴方が吸ったのは、下手をすれば一生目覚めない可能性もある毒でした。なのに何故、そんなにも元気なのですか？」

女中は真剣な表情で問いかけてきたが、ルネは今一つピンと来ないまま、そっか、という返事を返した。そもそも催眠ガスという物を知らないルネにとって、女中の言葉は意味の分からない物としてしか受け止められない。自分に何か危険があったのだろうか、それがどれほど危険なのが分からない。事実として自分は起きているのだから問題ない、という勝手な解釈をする。

しかし相手は部屋に入ってくる時に自分に一声かけた。何故だろう。自分が起きているとは知らなかったはずなのに。寧ろ起きていないと思っていた節さえある。ルネが首を傾げていると女中は見透かしたように薄く笑った。

「癖ですよ、私のようなもののね」

ルネはその言葉にゆっくりと目を瞬いた。

「へえ、いい習慣だね」

少なからず自嘲の籠った言葉の響きを気にせずルネは女中に満面の笑みを返す。気付いていないというより、そう信じて疑わないといった言いようだ。ルネにとつては悪意の全く混ざらない心からの賛辞だった。ルネは笑顔を絶やさない。当然だといった顔で女中に裏表のない笑みを向ける。

「だって挨拶をする相手がいるってことでしょ？羨ましいな」

女中は暫く意味が分からない、といった顔をしていたがやがて優しく顔を綻ばせた。

「そう……かもしれませんね。さあ、お顔が土で汚れていますよ。拭いて差し上げましょう」

* * *

あ？オッサン何の用だ？オレは小汚い中年オヤジと酒飲む趣味は無え。

教えて欲しいこと……ああ、そういう事かよ。つまりオレにとつての仕事だ。そういう事なら早く言えよ。小汚い格好しているからただの酔っ払いかと思っただろ。失礼じゃねえ、事実だ。

で、何が知りたいんだよ。さっきも言っただ様にオレはオヤジと長話する趣味は無え。オレの品位が疑われるからな。

あの辺鄙な村に住んでいた童顔のルネか？それなら知っている。何しろオレの親友なんだからな。

だがこの情報なら売らないぜ。

そう怒るなよ、オレは友達や仲間を売るほど落ちぶれちゃいない……そう、オッサンみたいにな、ハハッ！

知っているさ、オレは何でも知っている。それがオレに課せられた重要な役割だからよ。

ルネな。せめてもの慈悲だ、これだけは教えておいてやる。ただし、教えたところで何の迷惑もかからないような物をだがな。

一言で言えば良い奴だ。人間って言うのは誰しも薄汚い面があるもんだ。もちろんオレもオマエも含めてな。だがアイツはそれを感じせないし、そう感じない。不思議な奴だ、見る奴が見れば不気味に思うかもなあ。あまりにも無邪気すぎるんだよ。まあ、無知故かもしれないがな。だが善悪で言えば……悪だろうな。本人に自覚があるかどうかは別として。

どういう意味だあ？そんなもん自分で考えろ。考えられなかったらもっとはっきりした情報を自分で探せば良い。オレは出された金と必要に応じて情報を提供するだけだ。それが役割さ。

*

*

*

ルネが軟禁されている部屋を退出し、女中は部屋のドアに寄りかかって呆けたように宙を見つめる。彼女の指は知らず知らずのうちに自分の唇をなぞっていた。先程の感覚を思い出そうと女中はそつと目を閉じる。

あんなに笑ったのは、否、心の底から笑えたのは随分と久しぶりだ。最近は偽の笑みを貼り付けることはあっても、本心から笑うことはめつきり無かった。不思議な子だ。自分なんか羨ましいだな。あの男の目を盗んでまでわざわざ足を運んだ甲斐があった。

ただ無知なだけなのか、女を励まそうとしているのか、ルネはしきりに彼女を羨ましがっていた。もし彼女の正体を知っていたなら、常人は羨ましがるところか話そうとも思わないだろうに。やはり何も知らないだけなのかもしれない。

あの様子では自分が軟禁されている事にも気づいていないのではないのだろうか。有り得る。可能性としては十分に有り得る。不思議とそれを愚かだとは思わなかった。寧ろ好ましく感じる。明確な理由は分らないが、懐かしいとさえ思えるようになっていた。

本当に、面白い……

面白い、としか表現できない。女中の目にはルネは奇妙に映っていたが、嫌悪感はなくと言っていいほど無いのだ。そんな自分もまた、第三者から見れば奇妙に見えるのだろうと思う。

再びこみ上げてきた笑いを室内のルネに気付かれないように押さえようとしたその時――

彼女の細い体に巨大な振動が襲い来た。

二話

別の部屋にて、椅子に座った男が恍惚とした笑みを浮かべていた。顔が朱に染まっているのは自分の欲望が半分達成されたという喜びからの興奮もあるのだろうが、先程まで飲んでいた葡萄酒のせいというのが大きいだろう。安い酒は悪酔いしやすい。酔いの回った男が焦点の定まらない目を輝かせ、気が違えたように叫ぶ。

「ふふあはふ……私の物だ。全ては！ 私の物！」

すっかり自分の世界に入っている男から若干操縦士が距離を取る。当たり前的事だろう。第三者から見れば男は精神異常者にしか見えない。たとえ雇用の関係にあったとしても、それは同じことである。しかし男にとってはそんなことはどうでもいい。気にすることはない。もう自分は勝者で、何者にも媚び諂う必要はないのだから。奴らにももう、デカイ顔はさせない。

それは自分を勝者だと勘違いした者の驕りと言えよう。何も悪酔いさせるのは悪質な酒だけではない。虚無の勝利もまた、愚か者達を酔わせる。

完全に油断していた。警戒すらしていなかった。自分は絶対に大丈夫だと、そんな根拠のない自信が頭の中を占拠していた。不意に

鳴り響く警報、回転する赤いランプ。

操縦士が慌てて振り返り飛行艇の前方を確認した時にはもう遅い。操縦士の喉から引き攀った叫びが上がる。どうしようもない程近くに巨大な影が迫り来ていた。

「大変です！ バリ……ッ！」

まるでそれ以上続きを言わせまいとしているかのように艇内を轟音と衝撃が襲う。

*

*

*

それよりも少し前、自分が軟禁されているとは露ほどにも知らないルネは暇つぶしに置かれてあった本に目を通していた。黙々と頁を捲る。別に本の内容が面白くて読んでいるわけではない。寧ろ彼にとつては内容は関係ない。ルネは字が読めない。今迄の生活では必要なかったものもあるが、それを教えてくれる人がいなかったのが一番の理由である。家には祖母と母に残した厚い書物が所狭しと並んでいたが、ルネには勿論内容は全く理解できなかった。その為、彼にとつて本の内容は意味を成さない。ただ、規則的な文字の羅列を眺めているだけだった。しかしその意味不明さがルネにとつてはこの上なく面白い。

次の頁を捲ると、そこには絵が一枚載せられていた。ルネはその絵に魅せられたかのように釘付けになる。どうやら本の内容は人種についての物らしく、様々な人種が絵描きだされている。

中央に居るのは最も数の多い人族。人族の中でも白、黒、黄と呼ばれる三種が描かれている。ルネは白色の人種である。

ルネから見てその右に居るのがエフェル族。先の尖った耳を有し、男女共に華奢な者が多い。美には敏感で煩く、繊細で優雅なものを好む。

人族の左側に居るのはアーバン族。猫科の三角形の耳と、瞳孔が縦に細長い瞳を持っている。狩猟に長けた一族で、バリアントの討

伐には欠かせない。

アーバン族の隣にいるのは、小柄で幼児のような容姿をしたネルス族。成人でもアーバン族の腰ほどまでの身長しかないが、手先が器用で技師になる者が多い。工芸品を扱う事も多いせいか、エフェル族とは仲が良い。

更にその隣にいるのは、ネルス族とは一転して長身のメーディナ族。見た目には長身と赤目という事を除いて人族と違いは無いが、途轍もない怪力の一族である。

最後に、エフェル族の隣にいるのがメーディナ族をも凌駕する巨体を持つカプラ族。但しメーディナ族とは違い無骨な体つきをしている。正に巨漢といった風体ではあるが、その性格は見た目に反して温厚で友好的である。

ルネはしばらくその写真を見つめていた。かつてルネが住んでいた村もかつては様々な人種がいたのだ。今はもうルネを除いて誰一人として残っていない。良い思い出ばかりではないが、心残りもある。哀愁に駆られてルネは写真の縁をゆっくりとなぞる。憂う様に慈しむように。しかし――

その時、部屋と突如として異変が襲う。突然のことに、ルネは本を手放していた。

まずは重み。部屋の中の重力が何倍にも膨れ上がったかの様にルネを押しつぶそうとしてくる。とっさに背中を丸めて膝を抱えるものの、なす術もなく腰掛けていたベッドに体が深く沈みこむ。

続いて来たのは浮遊感だった。ルネの体はベッドでバウンドして宙に浮かび上がる。世界が反転して見えた――と思った瞬間、重みが戻ってきて下へと落ちる。運の悪い事に、ルネが落ちた場所は今迄いたベッドではなくタイルが貼られた硬い床だった。

体を振り背中を押さえようとしたルネに追い討ちをかけるように手放した本が上から降ってきた。しかもよりにもよって本の角が脳天に直撃する。

「いったあ……うつろう」

背中を押さえようか頭を押さえようか迷い、結局両方を押さえようととして間抜けな格好をしているルネの上に影が覆いかぶさる。影は先刻の女中だった。何やら奇妙な荷物を脇に一つ抱え、余裕のない表情でルネに向かって手を差し伸べている。手が上下に動き早く掴めと催促してくる。

「逃げますよ、早く!!」

事態を全く呑み込めないまま、ルネは女中に従って部屋を飛び出す。先を走っていた女中は途中で急に立ち止まり、持っていた荷物をルネに押し付けた。あたふたと受け取り女中の様子を窺うと、彼女の青い目には強い光が宿っている。

「この飛行機は今、バリアントの襲撃に会っています……これを背負って」

ルネは女中に押し付けられた荷物を検分する。箱状をした物に太い紐が通されていてリュックのような形になっている。ルネは紐の輪の中に腕を通しつつ女中に問う。

「これは何？」

「逃げるのです、貴方は」

女中はルネを一瞥してそう答えた。彼女は廊下の壁に何かを探するような所作で手を這わせている。何をしているのかと首を傾げた時、女中の右足が高速で動いた。

「うああッ!？」

女中が放った蹴りは壁をいとも容易く破壊する。元々扉があつたらしく、壁は綺麗な長方形に抜け飛んでいった。とはいえ遙か上空でも耐えられる丈夫で分厚い扉をただの蹴りで破碎したのだから、その威力は計り知れない。

壁に穴があいたことで艇内の空気がそとに流れ出し始める。ルネは足を踏ん張って留まろうとするが、その甲斐虚しく徐々に徐々に外へ押し出されていく。

「箱から赤い紐が出ているはずですよ！それを引けばパラシュートが開きます！」

「えッあ、うん！？」

女中の叫びに曖昧な返事を返すと、彼女が微笑を浮かべた。綺麗で悲しそうな微笑み。ルネは目を離すことが出来なかった。

「さようなら、——」

女中が何と言ったのかはルネには外の雑音が邪魔でよく聞こえなかった。ただ、唇が動いたのが見えたから、何かを言ったのだろうと予想できる。しかしそれを聞き返す前にルネの体は空中へと放り出されていた。女中がルネの背中を押したのだ。慌てて穴の縁に掴まろうとしたがもうすでに遅く、飛行艇との距離は見る見るうちに広がっていく。女中の悲しげでそれゆえに美しく映った笑みが脳裏に焼きついていた。

「——ッ！！」

声を発する事も叶わぬまま、ルネは重力に従って落ちていく。春とはいえ、上空は恐ろしく寒い。すぐに指先や耳朵が悴んでくる。

冷たく感覚の無くなってきた耳元で風を切る音が騒ぐ。

序々に地に近づいているというのに、ルネはパラシュートを開こうとしなかった。女中のいう赤い紐を探そうともしない。彼は無知である。今迄俗世とは無縁に日々を送ってきた。ルネはパラシュートの開き方は愚か、パラシュートという存在さえも知らなかった。だからそれがどういった物で、何のためにあるのか分からない。

彼は速さを増しながら落ちていく。

*

*

*

「ん…う？」

ルネは遠くに咆哮を聞いた気がして瞼を抉じ開ける。同時に強い揺れも感じぼんやりとしながらも内心で首を傾げる。しかしその疑問はすぐに解消された。

「やあっと起きたか」

突然頭上から降ってきた聞き覚えのない声に、ルネは勢い良く斜め上に向かって振り向く。その顔もやはり、ルネにとっては見覚えのない者であった。

刃のような銀色の短髪に独特の鮮紅色の瞳は見る者に鋭い印象を与える。それに加えて、男は長身であった。赤目と長身という特徴から言つて、男はメーディナ族なのだろう。更に藍色の軍服を着ているせいか、男の近寄りがたいイメージは強くなっている。

男とルネは共に一頭の馬に似た動物に跨っていた。似た、というのはその生物が完全な馬の姿をしていないからである。その生物の

顔は山羊に似ているが、指には鉤爪が生えている。体表は毛ではなく、鱗に覆われている。恐らくバリアントの一種だろう。その首にはベルヴェルグがかけられており、それによって人に従うよう制御されている。下位のヴェリエントなら従わせられるものの、生き物の意識を押さえ込む必要がある為術者には大きな負担がかかる事から、使用されるのは珍しい。男はその手綱をルネの背後から握っている。そして丁度その腕と腕の間に、ルネの体を収まる形になっている。

「本当にびっくりしたんだぜ。いきなり上から降ってくるんだからよ。木に引っかけたから良かったけどな、一体何がしたかったんだ？」

「さ……さあ？」

矢継ぎ早に言葉を重ねる男に、誰なのかという疑問も忘れてしまふ。何がしたかったのかと問われても、ルネ自身にも理解できていないので説明の仕様がなない。どう答えようかと悩んでいた時、右方から別の声がかかった。

「フィル、無駄話をしている場合か……見つかったぞ」

銀髪の男をフィルと呼んだ、二人目の男も藍色の軍服を着て騎乗していた。長い漆黒の髪を後ろで纏め上げ、赤い組紐で括っている。東洋人的な端正な顔立ちが特徴的だった。貧弱というわけではないが、フィルと比べ細身である。この男は人族だろう。髪と同色に黒瞳は鋭い眼差しで後ろを見据えている。

その視線を辿っていくと、今正に飛行艇が浮力を失って落ちていくところだった。それは艇の故障などによるものではない。飛行艇は抗いながらもゆっくりと沈んでいく。鉄の塊が悲鳴をあげる。

その背には巨大な体軀をした一体のバリアントが爪を立てていた。

女中に教えられた通り、飛行艇がバリアントの襲撃にあっている。そのバリアントは胴が長くその両脇に節のある足を何十本と生やしている。長いどうを飛行艇を締め付けるように回し、顔の正面にある鋭い顎を音を鳴らして開閉していた。バリアントの特徴の一つでもあるベルヴェルグは赤く光る小さな瞳の間、額に印されている。全体として百足の形をしていた。しかしあまりにも巨大すぎるその体。そして体表を覆うのは殻ではなく鱗だった。その大きな体は此方に向けられている。額のベルヴェルグが点滅し、発動を始めている。バリアントの顎から滴り落ちた強い酸性の唾液が地面に落ちて蒸気を立てた。

百足の節足が高速で動き長大な体が飛行艇から離れる。巨体の利を生かし、森の木々をなぎ倒しながらまっすぐこちらに走ってくる。その巨大な体からは想像も出来ない程の素早い動きだった。

狙いは、その視線の先は——ルネ達。

「やっべえ、急ぐぞイオリ！」

フィルが黒髪の男に叫び、乗り物とするバリアントに強く拍車をかける。腹に蹴りを入れられたバリアントは、馬とも山羊ともつかない嘶きをあげ、足を速める。ルネは速度を上げ始めたバリアントに首にただしがみ付くことしか出来なかった。百足の姿をしたバリアントは、その間にも着々と距離を縮めている。巨大な顎が唾液の糸を引きながら開閉される。大百足の通った後は酸の唾液によって溶かされ、焼け爛れた道が出来ていた。その姿を見たフィルが舌打ちをし、左手を耳元に宛がう。

「リム、リム、何処にいる？」

一拍おいて、

『今そつちに向かつておる。その状態では迎撃は難しいじゃろ?』

気の抜ける年寄り言葉が、フィルの左耳につけられた赤石にピアスから発せられる。イオリも左耳に手をあて、そろいのピアスからそれを傍受しているようだった。

通信の相手は誰なのか、そもそもこの男達は何者なのだろうかと首を傾げた時、後ろで破砕音がする。驚いて振り返ると、大百足がすぐ後ろまで迫っていた。顎が一層早く打ち鳴らされる。紅い目は喜悅に輝いていて、恐ろしい姿を際立たせている。内心の恐怖を具現化したような姿に、思わずルネが声を上げかけた、その時――

“G g k r r R K r G K r G r g r r ア r r G R r R l r r g R
K g k ラ r r r k l ツ ツ ツ ! ! ! ?”

百足の姿をしたバリアントが、叫びにさりきらないおぞましい咆哮をあげる。頭を大きく後ろに仰け反らせ、尾を地面に何度も打ち付ける。飛び散った唾液の飛沫が森の木々に穴を穿つ。予想外の苦しみに、先の尖った節足が痙攣していた。

この世界の王者であるはずのバリアントに苦しみを与えている物、それはたった一本の矢だった。ただしそれは、バリアントの力の根源でもあり象徴でもある額のベルヴェルグに深々と突き刺さっている。バリアントのベルヴェルグは体内の器官と密接に結びついており、いわば内臓が進化して体表に出てきたような物である。それを攻撃されたという事は、彼らにとっては臓腑を抉られているのに等しい。

フィルがそれを横目で確認し、騎馬の手綱を引いて止める。イオリもその隣に並んだ。騎乗しているバリアントは全速力で走ったせいか、胸から腹にかけて激しく上下させ苦しげな呼吸をしている。

その間を、一陣の疾風が駆け抜ける。

ルネがそう認識した瞬間、悲鳴を上げ続けるバリアントの口が縦に裂けた。一拍置き、桃色の肉の断面から赤黒い血が噴出してバリアントの胸元が染め上げられる。

口から滴る酸性の液を、そして悲鳴を上げることすらも強制的に封じられたバリアントの鼻面に、風は降り立つ。それは丁度傷の上で、直に神経に触れる痛みにバリアントの尾がのたうつ。しかし誰かが降り立った顔だけは硬直したように動かない。人類を恐怖に陥れるはずのバリアントが、逆に恐怖で支配されている。

「ねえ、小さい頃に聞かされた物語でさ、こういうのがあったんだよね」

バリアントの顔面に降りたつたのは、フィルやイオリと同じ軍服を纏う男だった。乾いた血を連想させる赤茶色の髪と瞳、そして何よりその男は頭頂部に三角形の獣の耳を有し、細長い滑らかな尾を揺らしていた。アーバン族の男だ。

手首のベルトで強く固定されている手袋の、その指の付け根部分から左右三本ずつ、合わせて六本の鉤爪を模した金属の刃が生えている。それでバリアントの顎に切りつけたのだろ、鉤爪の先には鱗のついた肉片がこびり付いている。身のこなしが速いのは、アーバン族というのに加え、ベルヴェルグによる肉体強化も行っているのだろ。ベルヴェルグを彫った石を肉体に埋め込めば、大幅に肉体を強化することが出来る。

アーバン族の男は無邪気な笑みを浮かべ、言葉を紡ぎ続ける。獲物を狩ることが至福の喜びを也说うようなその笑顔は、狩猟を主な生業とするアーバン族の物だった。

「強くて無敵の百足の話。ただ、ただね、その百足にも一つだけ

弱点があつた。さあ、何処でしょう、フィル？」

「知るか」

「そう！ それはね……」

フィルの返事を無視し、笑顔を絶やさずに崩さずに男はバリアントの紅い目を覗き込む。

「眼、だよ」

男は笑顔でバリアントの瞳に爪を突き入れる。その手つきには全く躊躇という物が感じられなかった。むしろ玩具で遊ぶ子供のような無邪気で嬉しそうな表情をしている。

バリアントは今までの比ではない激しさで尾を地面に叩きつける。しかし捕食者からはどうやっても逃れられない。男は半分潰れたバリアントの瞳を覗き込み、そこに自分がしっかりと映っているのを見て、満足げに笑声を上げた。そして残酷に残忍に――
爪に捻りを加えて引ききった。

血と体液が森の木々に斑模様を作る。薄汚いそれは、あちらこちらにばら撒かれた。百足は悲鳴を上げることも許されぬまま、力尽きて地に伏せる。巨体の上半身が倒れた反動で下半身が跳ね上がる。衝撃で地響きが起き、土煙が舞った。

酷い砂埃に、ルネは顔を背けて咳き込んだ。胸を押さえていると、また新たな声がかかる。

「大丈夫か？……よく見るとまだ子供ではないか」

静かではあるが、良く通る気品を帯びた声。いつの間にか男がもう一人横に立っていた。空のように淡い水色の髪と、同色の瞳。美しい芸術のように整った顔の、その耳は先が鋭く尖っている。耳と

同じくエフェル族の特徴である華奢な体に、不釣り合いな長弓を携えている。先刻ベルヴェルグを射抜いたのは、このエフェル族の男なのだろう。この男も藍色の軍服を着ている。

「うん、大丈夫……です」

「なあんだよ、またフィルはこんなの拾ってきちゃったのかい」

「こんなのって、おい、ストエカス」

アーバン族の男が悪戯めいた笑みを浮かべ、こちらに近づいてくる。腰に手を当てる猫の尾をくねらせながら、子供に言い含めるように言葉を放つ。

「フィルはちつさいものとか可愛いものとか見たら、すぐ拾ってくるんだから。この前の、まだ懲りていないのかい？……噂をすればほら、来た」

ストエカスと呼ばれたアーバン族の男は、森の奥に目を向ける。その視線を追ってルネが振り返ると、馬車の車輪の音と獣の足裏が地を叩く音が聞こえてきた。

やがて森の奥に暗がりから姿を現したのは――

「……」

「どうだい、おちび？なかなか強烈だよね」

強烈どころではなかった。馬車を引く生き物はあまりに歪な形をしていた。

顔だけをみれば、それは兎で愛らしい。しかし、あまりにも大きすぎるのだ。小動物の枠組みを大きく超え、大型の牛ほどの大きさがある。さらに奇怪な事に、四肢は兎のそれでは無かった。明らかに霊長類、それも人間の四肢である。前足は腕に、後ろ足は足に、

四足について四足歩行をしている。強烈を通り越してグロテスクだった。

「な、何あれ……」

「改造したのさ、改造」

事も無げに言うストエカス。一方のルネは驚きのあまり落馬しそうになっていた。馬ではないので落馬という表現は正しくないのかもしれないが。それを下で受け止めたのは、この中で一番華奢なエ费尔族の男だった。

「あ、ありがとう……えっと」

ルネがあぐねていると、男のほうから口を開いた。

「ウインストン・マーシュだ。ウインと呼んで構わない」

最後まで聞かずに兎のほうを横目で窺う忙しないルネを見て、ストエカスが笑っている。ウインストンもそんなルネを見て微笑んでいた。一方、ルネは更に近づいてくる兎から隠れるように身を縮めた。流石のルネも、得体の知れない物は気味が悪い。ルネの疑問に答えたのは、暫く口を閉ざしていたイオリだった。

「言葉の通りだ。元々普通の兎だったのを、あのような姿に変えた」
「へえ、でも誰が？」

この中にそんなことをしそうな人物はいない。なら誰が兎の姿を変えたのかと疑問を口にする、返答は以外なところから返ってきた。

「儂じゃよ、儂がこの兎を生み出した」

聞くタイミングによっては気の抜ける、時代がかった声。先刻のフィルのピラスを通して聞いた声だとすぐに分かる。声は巨大兎の引く馬車の中から少しくぐもって聞こえてきた。物が落ちたり退けられるような音も聞こえてくるので、声の主は馬車を出ようとしているのだろうと想像がつく。

一同は馬車に注目し、声の主の登場を待つ。

離し方といい、随分と博識は好々爺なのだろうとルネは踏んδειたのだが――

「えっ、えッあれ？」

ルネは驚きと感心の入り混じった声を上げざるをえなかった。

「あれ？ とはなんじゃあれとは」

現れたのは好々爺とは大きくかけ離れた人物だった。好々爺どころか、爺でもない。若いのだった。確かに声はよく通り綺麗な物だったが。見た目にはルネ以外も者達と年はそう変わらないように見える。

人族の男だった。青紫色の髪的神秘的な長い髪を1本の三つ編みにして、前に垂らしている。髪留めには鈴が使われ、男が動く度に軽やかな音を奏でていた。男の顔の左半分は、道化のような麗々しい赤色で装飾された仮面に覆われていて見えない。右半分の目と口元には妖しげな笑みが含まれている。

男も藍色の軍服を着ていたが、少々アレンジされていて。他の者達より裾が長く袖口が広がっている。上着は足の臍が中程まで隠れる長い物である。一見すると、御伽噺に出てくる魔法使いのような格好をしている。もっとも、若い風貌をしてはいるが。

見た目こそは若い、口調からも佇まいからも風格を感じさせる不思議な男だった。

「若い、と言いたいのだろうか？」

「……うん」

数秒の間を置き、ルネは素直に肯定する。この男には。嘘もお世辞も通用しないような気がした。しかし、男は気を悪くしたような素振は一切見せず、寧ろ可笑しそうに笑った。

「ふふ、全く臆せぬか。面白い奴が来たものじゃの。儂の名はリム・レム。妖術師じゃ。で、あの兎がイナバ」

「イナバ？」

ルネは聞きなれない、この辺りでは使われそうに無い名前に引っかけた。聞きなれないといえば、妖術師という単語も気にはなかったのだが、そちらの方が興味深い。

「む、イナバというのはな、ある東方の地域の昔話に由来するのぢやよ。因幡の白兎という話を知っ」ところでまだぼうやの名前を聞いてないあるよ」

「話を変えるけど、まだ坊や自身の話を聞いていないある」

リムとの会話に割り込んできた独特の訛りがある、響きも質も似ている二つの声。ルネが驚愕しながらも振り返ると、そこにはいつの間にか二人の人物が立っていた。全く気付かなかった。切れ長の印象深い目も、ルネに笑いかける笑顔も良く似ている。同じ人物が二人いるのではないかと錯覚しても不思議ではない位だ。但し髪の色だけが違う。ルネから見て右側にいる方は栗色の髪、左側にいる方は亜麻色の髪をしていた。

双子は同時に顎をしゃくって早く言えと催促してくる。それに対してルネは言葉を選ぶようにゆっくりと口を開く。

「ルネです。苗字はありませんけど。あ……もしかしたら知らないだけかも」

ルネがやや困惑気味に口を閉ざすと、双子は嬉しそうに拍手をした。

「我はヴォット・ザクである。兄あるよ」

「我はスピキオ・ザクだる。弟ある」

栗色の髪の方がヴォット、亜麻色の髪の方がスピキオらしい。先程とは打って変わった屈託のな笑みを浮かべ、ルネの手を上下に勢い良く振り回す。

「年寄りの話に割り込むのはいかんの」

「フィルがルネの世話係りで決まりだよ。拾ってきたんだし」

「おう、任せろ」

「動物扱いか？可哀想だ」

「フィルが世話なんぞ出来そうに無いな」

「無理あるよ」

「無理あるな」

ルネを除く大人達の会話に、イナバが短く鼻を鳴らした。

檻の中で大空を思う、翼を？がれた小鳥

少年の中に残る一番古い記憶は、おそらく泣いている母親の背中だろう。母は真っ白に塗られた箱の前で咽び泣いていた。その箱が父親の入る棺だとは、その時の少年には知る由も無かったが。

母親が激変したのはそれからだった。以前は明朗だった母親も、その瞳に生気を宿すことは無くなり、口元にはいつも貼り付けたような笑みが浮かべてあった。

そして少年の日々は大きく捻じ曲げられた。

手足は鎖で繋がれて身動きがとれないように、そして目は黒い布で覆われ周りが全く見えない状態にされた。母親はそんな少年と一日中会話をしていた。会話とは言っても、母親が一方的に少年に話しかけるだけの物で、少年はずっと黙って聞いていた。それが少年の全てだった。母親はいつも話の最後はこう締めくくった。

——私の愛する鳥は自由なそらを翔け回り、そして撃ち落された。悲しいことだわ、そんな悲しみはもう二度と味わいたくない。それならばいつその事、残った小鳥は自由に動ける羽をもいで、鎖をつけて、鳥籠の中に閉じ込めて愛でる。それが一番よ。だから貴方のこれも最善の選択なの。

全てを取り上げられ抵抗する術を持たない少年は、母親のされるがままだった。周りも異常な彼女に必要以上に関ろうとせず、少年の現状は黙認された。翼をもぎ取られた小鳥は大空を羽ばたくどころか、夢見ることもすらも出来ない。

延々と、延々と。

だが、又もや少年の日々は大きく捻じ曲げられる。

ある日突然何の前触れもなく、少年の視界を黒く覆っていた布が剥ぎ取られた。それは母の壊れ物を扱うような手つきとは違った。久方ぶりに開いた視界には、滴り落ちんばかりの笑みを湛える男が映っていた。

男はゆっくりと口を開いた。その言葉は脳に直接染みこんでいくようだった。

——翼をもがれた小鳥よ、儂が新しい翼をつけてやろう。
世界を見てみたくなかないか？ 空を自由に飛びまわってみたくはないかの？

いきなり現れた男の問いにも少年は躊躇わなかった。喻え嘘でも良い。空の一片の垣間見るだけでも良いから、自分は檻を抜け出したい。少年は迷わず頷いた。

小鳥は、安全だが狭い檻の中で一生を過ごすよりも、危険はあれど自由な大空を選んだのだ。

二話

六つある馬車のうちの一つからルネは顔を出す。外にいたフィルがそれに気付いて振り返った。

「どうだ？ やっぱそれも駄目か？」

「うん…… やっぱ大きい」

ルネは今、フィル達の軍服の試着をしていたのだが、どれもこれもサイズが大きく、ルネには合わないのだった。一番背の低いイオリの物でさえぶかぶかであり、服を着ているというよりも服に着られているという表現がしっくりと来る。

フィルが困ったように頬をかく。

「それ以上小さいのは置いてないんだよな。暫く自分の服で我慢してくれるか？ 寒かったら外套があるからそれを着ればいい」

「うん、ありがとう」

ルネは満面の笑みで頷く。リムがルネを仲間に迎え入れると言った時は、本当に驚いた。反対する者もいなかった為、ルネは騎士団の仲間入りを果たすこととなったのだ。

序でに、ルネのいた村にもよると言っていた。まだ村人達の埋葬が終わっていない。これ以上ないくらい、ありがたかった。

「あ、そうだ」

ルネは馬車の中に引っ込めかけていた顔を、又戻す。一つ、聞きたい事があった。

「これって、騎士団の紋章だね。なんて読むの？」

サイズの大きな軍服の、右肩の刺繍を指差してフィルに問う。フィルも自分の右肩を見て、それを指先で丁寧になぞった。

「ああ、これはローダ騎士団って書いてあるんだよ」

紋章は、雀に似た鳥が大きく翼を広げる物だった。その姿は優美で、モデルはか弱い小鳥のはずなのに、どこか力強くさえある。生きる必死さが滲んでいるような、そんな強さだった。ルネには読むことが出来ないが、鳥の両翼の間にローダと刺繍されている。

ルネも、フィルの真似として指先で紋章をなぞってみる。その刺繍は触れれば触れるほど、繊細にデザインされているという事が実感できる。

「凄い、格好いい……」

「そうか？」

ルネが素直な感想を口にすると、フィルは照れたように笑った。

「俺とリムで考えたんだよ。小鳥が上空で羽ばたくように」

そう言ったフィルの表情は、照れ以外の感情も含んでいるように見えた。ルネは首を傾げる。上手く表せないが、ルネの目にはフィルが寂しそうに映った。嬉しいのに、悲しい？ そんな複雑な感情はルネには理解できない。

しかし、ルネが口を開く前に、フィルが遮る。

「よし、ちゃっちゃと着替えて移動を始めようぜ、な？」

「う？ うん、分かった」

ルネは流されるままに馬車の中へと戻り、着替えを始めた。

*

*

*

「おいで」

その一言を聞き、一羽の鳥が目染みる程鮮やかな黄色の翼を広げ、ゆつくりと下降する。そして声をかけた主の腕へと舞い降り、とく動く丸い大きな瞳で顔を覗き込む。大きな翼を畳み、主人の次の命令を待っている。

鳥にとつての主人は、この場には二人いた。二人とも、まだ二十歳前後に見える男である。

一人は、もう春だというのに焦げ茶の厚手のコートを着て、マフラーを巻いている。髪と目は蒼氷のような冷たい印象を宿した淡い水色。鳥を見て口の端を吊り上げたが、目からは何の感情の変化も読み取ることができない。押し殺しているのか、それとも何も感じていないのか、鳥の脳では理解できないし考えが及ばない。

鳥が留まっている腕はこの男の物であり、呼んだのもこの男である。

もう一人は染み一つない真っ白なカッターシャツを着て、指の部分が切り取られた手袋を左手だけに填めている。髪と目は混ざり気のない純白で、色素が抜けたというよりも上から白色を被せたという印象がある。その真っ白な出で立ちのために、この男の存在は周りから隔絶されているようにも感じられることだろう。こちらは鳥が来ても表情一つ変えずに一瞥したのむで、無関心さが窺える。

「報告を。できるだけ簡潔にね」

コートと着た男が柔らかい口調で鳥に話しかける。鳥はそれに答えるように、太く短い嘴を開いた。嘴から出てくるのは、しゃがれてはいるがちゃんとした『語』だった。

「飛行艇バリアントからの襲撃、墜落。ブルー、死亡」
「ブルーが死んだ？」

信じられないといったように、コートを着た男が鳥の言葉を反復し、顎に手を添える。カッターシャツを着た青年も、ほんの僅かに顔を顰めた。この青年は普段感情を顔に出すことが少ない為、強い驚きがあったことが窺える。

首を傾げ丸い瞳でそんな主人達を眺めやってから、鳥は喉を空に向かつて垂直に立てる。そして腹から胸にかけて波打たせると、喉の一部が大きく球体状に膨らむ。ふくらみは腹の運動にあわせてゆっくりと鳥の喉を遡り、やがて吐き出された。吐き出された物をコートの男が掌で受ける。鳥が吐き出したのは鮮やかな青い色彩を持つ眼球だった。しかしその眼球は本体から切り離されているというのに半透明の膜が張っておらず、作り物のような印象を見る者に与える。それは鳥の言葉を裏付けるには十分な物だった。

「間違いないね、ブルーの眼だ」

コートを着た青年が目を細める。

ベルヴェルグはその能力を発動していなくても、独特の波長が常に漏れ出している。それは制御できる物ではなく、例外はない。波長は大気中や物体に残留し、やがて少しずつ消え行く。特に発動した場合は、濃く残る。二人の男はそれを敏感に感じ取る事が出来る。といっても、常人には絶対に不可能なことで、それが彼らの異質さを証明している。

そして、ブルーの眼球からは僅かながらベルヴェルグの力を感じる事が出来た。それはブルーが所持していた物ではなく、他の、しかもバリアントの物であった。

「僕達はバリアントが相手なら絶対に負けない自身があつただけだね」

コートを着た男が眼球をい鳥に差し出す。鳥はそれを再び嚙下し、大きな翼をはためかせる。

それを無言で眺めていたカッターシャツの青年が弾かれたように背後を振り返った。コートの男のほうは余裕を感じさせる表情でゆっくりと振り返り、斜め上——寒い中でも葉をつけ続ける針葉樹林の中でも特に枝ぶりの良い木を見据える。膝を撓めそちらに向かつて飛ぼうとするカッターシャツを着た青年、コートの男は目線で制する。コートを着た男の方に決定権があるのか、カッターシャツを着た青年は素直にそれに従った。

「出て来いとは言わないよ。でもそれ以上は近づかないで」

口調こそはやんわりとしていたが、声音には並々ならむ迫力がある。真つ暗な崖の底を覗いてしまったような、寒気の走る雰囲気漂わせている。青年達のいる森の中が、恐れ慄くように静まり返る。暫く続く、沈黙。コートを着た男は先程となんら変わらぬ笑みを口に刻んで、木の上を見つめているのみ。

先に根負けしたのは、木の上にいる相手の方だった。

「お主等には拙者は敵わぬ。用件を話そう」

堅苦しい、低音の声音だった。その声が少々くぐもって聞こえるのは、木々の葉の中にいるからだろう。コートの男が顎を引いてそ

れを許可する。カッターシャツを着た青年も、彼に習いからだから余分な力を抜く。鳥は主人達の頭上を旋回していた。

「飛行艇が墜落したことは、いまその鳥から聞いたのでござろう？
そこでモーリア様がお主等のうちどちらか一方を呼んでいる。ご同行願う」

コートを着た男が口をへの字に曲げる。些かわざとらしいほどに、面倒だという意思が表現されている。そんな雰囲気をあからさまに出したまま、コートの男は横を見る。

「だつてさ、ネジュ」

「嫌だ。グラード兄さんが行けば良い」

ネジュと呼ばれた、カッターシャツを着た青年がぼそりと呟きそつぽを向いた。自分は絶対に行きたくないという意思がその背中からありありを読み取れる。コートを着た男、グラードがそれにたいして大袈裟に溜息を吐く。

「兄を敬うとかさ、そんな気持ちないのかな」

そう言つてグラードは木の上にいるはずの男を見上げる。

「で、場所はどこ？」

「忝い。太陽を向いて五時の方向、この森の端だ」

グラードが言われた方向へと歩き出す。だが、途中でなにかを思い出したように途中で立ち止まった。口だけが笑みを象った表情でもう一度木の上を見上げ、ゆっくりと口を開く。

「そういえば君、さっきの僕達の会話を聞いていたんだよね？」

それを待っていたかのようにネジユが大きく跳躍する。残像の見えぬほどの速さで、春でも十分に葉をつける針葉樹の中へと飛び込んでいく。飛び込んだと分かるのは、今迄ネジユの立っていた地面がそこを中心にクレーターののように凹んでいる事と、針葉樹の枝が大きく揺れた事から推測できるためである。さほどの時間もかからないうちに、怖気の走る鈍い音と共に黒い影が枝の間を割って落ちてくる。爪先から顔面までを全て黒く覆った男だった。男の瞳は極限まで見開かれ、死ぬ直前にいかに恐怖を味わったかという事が分かる。その首は力任せに二回転ほど捻られ、折れた骨が肉と皮膚を突き破って出てきていた。脂肪や血液が付着しているせいか、それは本来の色である乳白色ではなく、黄色た橙に染まっている。すでに絶命した男の心臓は停止している為、血液は噴出せずゆったりと地面を張っていく。その隣にネジユが重力を感じさせない軽やかさで着地する。ネジユの白いシャツは返り血の一滴も浴びてはいなかった。

「別に聞かれちゃいけないほどやましい話もしていないけどね、後々面倒ごとになるから」

*

*

*

「妖術師を知らない？」

ルネと同乗しているフィルが素っ頓狂な声を上げた。ルネは先刻リムの口から聞いた「妖術師」という事場について尋ねてみたのだが、これは一般人にも常識だったらしくロード騎士団の全員が驚い

た表情でこちらを見ている。リムが馬車の中から身を乗り出してくる。

「テオファ―ヌからもシルヴィアからも、何も聞いてはおらんのか？」

「お婆ちゃんとお母さんなら、僕が小さい時に死んだよ」

ルネは目を瞬きつつ答える。実をいうと、二人が死んだ時の事をあまり良く覚えていない。彼が生まれた時にはもう祖母は死んでいたし、母親は病気がちでほとんど寝ていて祖母と同じようにルネが幼いときに亡くなった。覚えていないのは当時の彼が幼すぎたというのもあるが、祖母も母も同様に死体を見ていなかったから、まだあやふやとした記憶に強烈に残りづらかったのだろう。「死んだ」と認識できたのは祖母の場合は母から聞かされていたし、母の時も村人達からそう聞かされたからだった。もっとも、後者は親切からではなく、自分の身を守るためにルネを混乱に突き入れようとする、何かを恐れる感情からくる物で、鋭く突き放すような口調だった。

「ふむ、そういう事が、なるほど」

リムがルネを見つめながら顎に手を当てて呟く。

「諸事情あったという事じゃな。流石の僕も知らなかった。僕はゼインの奴とは違うからのう」

「リムはお婆ちゃんとお母さんの知り合いなの？」

名前を知っているくらいなのだから、顔見知りだったのだろう。それならば、騎士団にすんなりと入れた事にも説明がつく。入ったときはルネが入りたいというよりも、リムが入れたがっているという印象だった。だとしたら、一体どういう関係があったのだろうか。

確かに、よくは覚えていないが祖母や母、リムはどこか似通った雰囲気があるように感じられる気がする。初対面のときも安心できるほどだった。

一方でリムは懐かしむような表情で自分の掌と見つめていた。

「そうなの、同輩、大切なじゃ。それは今でも変わらんの」

リムの浮かべた寂しげな笑みに、騎士団の誰もが彼に対してかける言葉を失っていた。質問を投げた本人であるルネさえも、口に出したことを後悔した。リムは今、旧友を失ったのを知ったばかりなのだ。その悲しみは途轍もなく大きい者だろう。

しかし、その沈黙を破ったのもまた、リムだった。

「話に戻るとするかの。妖術師とは何ぞという話だったか？」

ルネは無言で頷いた。向こうで双子が安心して肩の力を抜いた姿が見えた。ルネも同じような心境だった。考えもなしに質問を発してしまった自分に負い目を抱いていた。だから上辺だけでもリムが立ち直ったのを見て、そつと安堵の溜息をついた。

「妖術師とは、ベルヴェルグに携わるもの全般の事を指す。儂も、そしてテオファーンとシルヴィアもそうだ」

それはルネにとって初耳だった。確かに家には書物が沢山あったが、果たしてその中にベルヴェルグの物があつただろうか。良く思い出せない。

「じゃあ、僕も妖術師になれる？」

「訓練すればの。だが、ルネにはもつと別のものがある」

リムが口端を吊り上げて笑った。それはもう、普段どりのリムだった。

*

*

*

クレタ、という町がある。現存している物の中でも有数の大きさ誇る町であり、大小様々ではあるが多数の騎士団の本拠地ともなっていて、バリエーションによる被害は比較的少ないといえよう。安全ならば人が集まり、必要な物資も集まる。結果、クレタにはギルドと呼ばれる同業者組合が多い。料理人ギルド、奴隷商人ギルド、その他様々なギルドが存在する。その中行商人ギルド、という物がある。各地を巡りながら商品売り買いしている、今の世では珍しいギルドである。旅をするのはヴェリエントによる被害の為、かなり危険なのだ。その危険をあえて冒してまで商品売り歩く、あるいは買い取っていくのはひとえに需要があるからである。

それは置いておき、クレタのとある町の酒場のカウンターに一人の男が座っていた。男、といってもその人物はまだ少年といっても差し支えない年頃であり、当たり前前に飲酒を許される年齢を下回っている。どこにいても目を引くオレンジ色の髪は肩口に届く程まで伸ばされており、同色の瞳にはあからさまに疲れたという意味を湛えている。そんな少年が酒場のカウンターで然も有りなんと顔つきでグラスを傾けている。しかし、

「いつ私がこんな物を飲んでも良いと言いましたか？」
「いやっ、その、別に良いだろ！」

背後から聞こえてきた冷ややかな声に背筋を強張らせる。背後にはギルドの副団長兼少年の保護者である、ルーファス・ノジャンが

立っていた。色素の薄い金髪を長く伸ばしてはいるが、だらしなさは一切なく、清潔感が漂っている。それはルーファスが、尖った耳を持つエフェル族の美的感覚に従っているからであろう。髪とは対照的に深い青色をした瞳の左の方は片眼鏡で隠れていてよく見えない。もう片方の右目は、半眼で少年を見下ろしている。

「だんちよばかりズルイよねえ。あたしも飲みたあい。ねえ、ライリー？」

「僕はもう成人してるよ。でもアデラはまだ十二歳だから駄目」

「えええ！！ライリーのケチ！ねえ、ユーグ良いでしょ？」

「……」

ルーファスの更に後ろでは、団員達のこんな会話が繰り広げられていた。酒を飲みたいと駄々を捏ねているのは、薄緑色の露出度の高いドレスを着た、踊り子のアデラ・カノルザである。強い輝きを放つ黄金色の長い髪はこめかみより少し高い位置でツインテールにされており、アデラが動く度に優雅に揺れる。紫色の大きな瞳はよく動き、愛嬌のある顔立ちに仕上げていた。

アデラが最初に話を振ったのは、ライリー・エディッサという石工と宝石職人を兼ねている男である。子供であるアデラが子供扱いした通り、ライリーは子供のような外見をしたネルス族である。こげ茶色の髪を後頭部で大雑把に纏めてある。幼児のような容姿からは考えつかない静かで落ち着いた雰囲気、苔色の目はアデラを呆れたように見上げている。

そしてアデラのねだりに無言で首を振ったのは、踊り子の為の音楽を奏でる楽士のユーグ・バルバロサである。アデラ程ではないが良く目立つ舞台用の裾の長い服を着て、六弦の楽器を手にしている。漆黒の髪の間からは同色の三角形の獣耳が覗いており、彼がアーバン族だという事が分かる。瞳孔の細い赤みがあった金の瞳は、黒髪とのコントラストが美しい。

「あ、ちよつ待てよっ」

「待ちません。これは没収です」

ルーファスに取り上げられたグラスに少年は手を伸ばそうとするが、座っている人間と立っている人間、ましてや子供と大人では高さが大きく違う。少年の必死の抵抗も虚しく終わってしまう。

しかし、ルーファスから更にグラスを取り上げる手があった。流石にルーファスも取られる事は予想していなかったらしく、あっさりとグラスから手が離れる。

「まあ。そんなケチケチしないのさ。たまには良いんじゃないかい？」

ルーファスからグラスを取り上げて笑ったのは、頭に赤毛の上からバンダナを巻いた女だった。メーディナ族の証である赤目が悪戯っぽく光っている。長身でスタイルも良く美人だというのに、豪快に口を開けて笑う姿や、腹の部分が大胆に切り取られた袖なしの服が女の恵まれた容姿を裏切っている。女の名前はポーレット・ラウランといい、主に青果から保存食まで幅広い食品を扱っている。ポーレットは赤銅色の髪を後ろにはらいながら、白い歯を見せてルーファスに笑む。

「お姉さんもそれくらいの年にはすでに飲んでたけどねえ」

「貴女の様な人と一緒にしないで。ナハトも何か言ってください」

ルーファスが溜息を吐きながら横を見る。カウンターの端には、男が一人寄りかかっていた。

「拙はノーコメントで頼む。見ているだけで楽しいのにな」

ポーレットとは反対に穏やかな笑みを口元に昇らせたのは、占い師のナハト・ブロワである。少年やアデラと同じ人族ではあるが、褐色の肌をしていて神秘的な雰囲気を持っている。長めの髪や言葉遣い、そしてベールでよく見えない顔のせいもあり女性的に見える。瘦身という事も少なからず影響しているのだろう。占い師、そしてアデラとユークのような踊り子や楽士が所属する行商人ギルドは珍しい。少年に言わせれば、なにも売り物になるのは形だけではないだろう、という事で彼らのような『精神的に満足させる』商品も扱っている。ギルドと一座を足して二で割ったというのが表現としては正しい。

ナハトの言葉を聞いたルーファスが、こいつに聞くべきではなかった、とでも言うように顔に不満を滲ませて少年に向き直る。

「とにかく！ 私の目が届く範囲ではセインにもアデラにも一切酒は飲ませません！」

「えええええ、あたしまでえ？」

「ちえっ……ルーファスのケチ」

唇の尖らせ、行商人ギルド・ヴォーリヤの若き団長、セイン・ウスタスはギルドの移動型住居を改造したカウンターに頬杖をつく。その顔は先程までのような『情報屋』としての全てを達観したような表情ではなく、十八歳という年相応の物となっていた。

*

*

*

どうして？ どうして急にそんな皆どうしたの？ 震える震える震える。これは皆に対する恐怖なのかな。訳分からない行動を始め

た皆に対する恐れなのかな。それとも……

皆どうしたの？ 何故誰も答えてくれないの？ 斧鋤鉈包丁危ない危険。どうしてそんな？ 痛い刺さる刺さる刺さった。皆は力が弱いから血は出てないけど痛い怪我しちゃう。首を胸を腹をそこは急所。

ああ解った理解できた察した。皆は僕を殺そうとしてる。

止めて止めて止めて止めて僕は何も悪い事はしていないからそんな事をしたらそんな事をしたらああ止めてよ止めてってば――

――まだるっこい。

*

*

*

今夜は月が美しい。そんな事を取りとめなく考えながら、ルネは手の中のものに視線を落とした。

ルネの両掌に収まっているの一振りのナイフだった。刃渡りは四十センチほどで、ナイフというよりも短剣といった方がしっくりくる大きさだった。しかしこれをルネに渡した本人がこれをナイフというのだから、そうなのだろう。確かに大きさには問題があるが、これは短剣のような両刃ではなく、片刃である。よい物があるといつてリムが馬車から出てきたのが、これだった。さほど使い込まれていない感じではあるが、かといって新しい物でもない。川のまかれた柄は手になじみやすかったが、見た目以上にずしりと重い。何故このような物を妖術師であるリムが持っているのか知りたかったのだが、先刻の反省もあり我慢した。かくして、ルネの得物はナ

イフという事に決まったのだった。

これを眺めていると、夢を見ているような不思議な感慨が沸く。つい最近まで、自分は廃れた村の村人達の埋葬をしていたのだ。にわかには信じがたいという気持ちもまだ残っている。

「まだ起きているのか」

不意に声がかかった。今迄の静けさが急に破られ、ルネは少しだけ肩を跳ね上げる。

声の主はイオリだった。最初は寡黙だと思っていたこの男も、過ぐす時間が長くなるにつれて随分と印象が変わってきた。というのも、イオリがルネの稽古相手、もっと大雑把に言えば師のようなものを引き受けて事が大きいだろう。彼の扱う武器が刀だという事もあり、周りから強く推されたのだ。西洋刀と東洋刀は違う、と文句をいいつつも結局は引き受けてくれた。

イオリが胸の前で腕を組み、目を細めた。

「明日はクレタ入りだぞ。早めに寝ろ」

「うん、そうする」

まったく、と彼は髪をかき混ぜた。

「お前の世話係はフィルじゃなかったのか」

話題の人は、ルネの隣で爆睡していた。

全ての事において意味を失った虚ろな心

その念は憧憬に近い物だった。そして、それ以上の「意味」を孕んでいた。

少年の父は小さな道場を持っていた。そのせいもあり、少年も幼い時分より刀術を父に習っていた。まわりは立派な剣士になるよう声をかけてくれたし、自分もそうなると思っていて疑わなかった。

少年の父は強かった。子供相手という事で十二分に手加減されていたであろう稽古でも、一度として一本もとる事が出来なかった。それは大人が相手でも同じ事で、少年の前で父が負ける事は決してなかった。

だから、少年にとっての父は目標であり、憧れであったのだ。いつか自分もあの高みまで上り詰めたいと。

それが少年の全てだった。延々と、延々と。

その出来事が起こるまでは。

少年の父は、小さくはあるがそこそこに名の知れた道場を持っていた。評判を聞きつけた道場破りも後を絶えなかった。彼の父は変わった人物であった。道場破りには必ず真剣を持たせ、自分もまた同じように真剣を構えるのであった。魂と気合を込めるためなのだと、父は度々少年に語っていた。

その日も、いつものように道場破りが来た。いつものように彼の父は真剣を手渡した。そして、いつものように互いの誇りをかけた試合が始まる。

筈だった。

道場破りは刀を手渡された直後、その刃を鞘から抜き放ち父の胸

に一閃浴びせたのだ。夥しい量の血が道場の床に叩きつけられ血溜りを作った。

今思えば、その道場破りは寄生型のバリアントに憑かれていたのだろう。

少年は恐怖に駆られながらも、ほんの少しだけ身を乗り出して父の動向を見つめた。あの誇り高い、強い父がどのようなようにして敵に反撃するのかが気になったからであった。しかし、それは悪い意味で裏切られた。

父はあるう事が敵に背中を見せ、その場から逃げ出そうとしたのだ。当たり前に背中から着られ、あっさりと少年の父は息絶えた。

しかし少年はそれを見ていなかった。何より、父が敵に背中を見せて逃亡を図った事に動揺していた。少年は父を失った事より、父に裏切られた事に対してショックを受けていた。彼にとって父は全てであり、彼の全ては父で埋め尽くされていた。それが一息に奪い取られたのだ。後には空虚しか残らない。

少年は家を飛び出し、あちこちを彷徨い歩きながら刀の腕を磨いていった。虚ろな心で虚ろな瞳で偽の自分を被りながら。生きる意味はなかったし、生というものに執着する理由はどこを探しても見つからなかった。ただし、死ぬ意味も無かった。死にたいとは思えなかったし、死ぬ意味も無かった。ただ、虚ろに日々を過ごしていた。

ある日、旅の途中で変わった男に会った。青紫色の瞳を持った男は、ゆっくりと瞬きして言った。

——理由が無いなら、儂が何時かしら与えてやろう。自分で気付くまで、の。

男は少年に共に来るかと聞いた。少年は虚ろな心の気まぐれで、その男の手を取った。

二話

朝起きたら、黒く湿った鼻先が目の前にあつた。ルネは寝袋の中で睡眠をとっていたのだが「フガフガ」という音が耳元で聞こえ、頬に細い何かが当たっていてくすぐったかった為、目覚めてしまったのだ。目を開くとそこにあつたのはイナバの巨大な顔だった。いくら可愛い顔立ちをしていてもあまりに巨大すぎると何かの悪夢のように感じる。頬に当たっていたのは、イナバの口の辺りに生えている髭だった。

ルネは寝起きでだるい体をそつと起こす。イナバが少しだけ身を引いたので、安心させるように優しく首をかいてやると、巨大な兎は気持ち良さそうに目を細めた。イナバが機嫌良さそうにしているのに安堵しつつ、ルネは手の甲で目を強く擦って眠気を掃う。そして、まわりが静まり返っているのに気付いた。

イナバもいるし馬車も全てであるため置いて行かれたという事はないだろうが、やはり少々不安になる。ルネの世話係であるはずのフイルさえも見当たらない。時折名も知らぬ鳥の鳴き声が聞こえてくるだけだった。

「みんなは何処へ行ったの？」

なんとなくルネはイナバに問いかけてみるが、兎に理解できるはずもなく、色素が抜けた赤い瞳で見つめてくるのみ。それはそたと溜息を吐き、ルネはイナバの首を支えにして立ち上がる。耳を澄ませながら朝の森を歩くのは清々しい気分だった。イナバも甘えるように、ルネの腕を胴の間に頭を差し入れながらついてくる。

暫く歩くと、数分もしないうちに済んだ水の流れる川に辿り付いた。昨晚、ここから水を汲んできたため、覚えている。深さはそれ程ないが、幅が広い川である。イナバが口をつけて水の飲み始めた

ため、ルネも気分を一新させようと冷たい川の水で顔を洗う。その飛沫がイナバの方に飛んだのか、兎は勢い良く顔を左右に振って鼻先の水を飛ばす。その様子がおかしくて、ルネは声を上げて笑った。のだが、朝にはふさわしくない破碎音が聞こえ、思わず対岸を見る。イナバが鼻を鳴らし、姿勢を低くする。イナバの喉の奥から出る雷のような音は、草食動物、ましてや元は小動物とは思えない唸り声だった。

「何だろ、バリアントじゃないと思うけど」

ルネもイナバに習って姿勢を低くし腰のナイフに手を伸ばして、音源に全神経を集中させる。

が、その緊張したルネの肩に置かれる手があった。

ルネは驚き肩を跳ね上げたが、背後から聞こえてきた声にほっと息を吐く。

「身構える必要は無いあるよ」

「どうせまたアイツらある」

どこかた降ってきたのか、現れたのはヴォットとスピキオだった。ルネの肩に手を置いているのはヴォットの方で、スピキオはイナバの背に跨って首の後ろの肉をつねり遊んでいた。スピキオの満足そうな顔から察するに、その部分は柔らかくて気持ちいいらしい。イナバはされるがままである。

ほったらかしにされていた訳ではないと解って安心したルネは斜め上にあるヴォットの横顔を見上げる。

「フィルとイオリあるよ。要するに、ちょっと手合わせしてるって事ある。その音で起こされる身にもなってる欲しいある」

スピキオが口を挟み、身軽にイナバから飛び降りる。

「少し覗いてみるあるか？」

「なかなか面白いあるよ」

双子の提案にどう答えようか迷い。ルネは隣のイナバを見る。が、イナバも大きいとはいえ所詮は兎、こんな事をしていても埒が明かない。迷っている間にも破碎音は聞こえてくる。そんな音を聞かされていると、どうしても気になってしまう。手合わせとやらが終わってしまう前に、一目でも見ておきたい。

「行きたい、見たい！」

ルネのその言葉に、双子はまってましたとばかりに肩を回したり首を鳴らしたりしている。なぜ準備運動が必要なのかと問いかける前にヴォットの腕がルネの胸に回されていた。そのまま簡単に脇に抱えられてしまう。あまりに突然の事で、ルネはぞうすれが良いか解らず脱力していた。弛緩した四肢が荷物のように揺れる。

「あいやー。お前軽すぎあるよ。ちゃんと食ってるあるか？」

「ちよつと揺れるかもだけど我慢するある」

双子はルネに言葉をかけ、二人同時に強く地を蹴った。河原の石同士が擦れあう音に気付けばルネは空中にいた。こちらを見上げてくるイナバも小さく見える。かなり高い位置への跳躍、彼らもやはり肉体強化をしているのだろう。ここからだ、土煙が待っている様子も見える。どれだけ激しく争っているのだろう。怪我はしていないだろうかとルネは少しだけ心配になる。

だが、突然腰に回されていた体温が消えた。ヴォットの腕が解けたのだ。ルネの体は当然、落下をはじめめる。

「ええええッ!? 何で!？」

急速に近づく地面。双子が手を貸してくれる様子はない。ルネは本能のままに従い、逆さまだった体を立て直す。足を下に向けやや膝を曲げて関節を守るように、状態を少し前に傾けてやはり肘を曲げた手を前に出し、安定した体勢で着地。獣のような四足の姿勢となる。その隣に、軽やかにヴォットをスピキオが降り立った。それだけでなく、拳大の大きさのモノが数多降ってくる。

「危なかったあるよ。ヴェリエントの群れに突っ込んだたある」

「なんとも無いようだけど、ルネも肉体強化しているあるか？」

スピキオの問いにルネが首を横に振る。ベルヴェルグによる肉体強化は、聞いた事はあっても見るのは昨日が初めてだった。そんなルネが肉体強化を行っているはずもない。

そんなとき、上から降ってくる物体がルネの頭にも当たり、転がり落ちてきた物を手を出して慌てて受ける。それはヴェリエントだった。但し目玉は上を向いて下はだらしく垂れ下がりに気絶している様子である。右手に何か硬い物が触れていたのでひっくり返してみると、首の部分に銀色の針が一本刺さっていた。ルネは恐る恐る針を抜いてみる。抜くと針は意外と長く、大人の男の掌をいっばいに広げたほどの長さだった。一方のバリエントは何の変化も見られない。思い切って振っても叩いても気絶したままである。

首を傾げるルネを見て、双子が笑う。

「延髄に撃ち込んであるから、何しても起きねえある」

「振っても叩いても延髄を損傷してるかた起きられないある」

ルネは手の中のバリエントを改めて見下ろす。それは全身を鱗に

包まれ、腹に飛行を目的とするベルヴェルグがある。動物にたとえるならば、鳥のような姿をしたバリアントだった。双子にいう通り、ピクリともしない。周りを見渡せば、同じ姿をしたバリアントが双子を中心として散らばっている。これだけの数を足場の不安定な場所で全て延髄を狙って正確に射抜いたのだから、その腕前はルネを驚かせるのに十分だった。

「やっぱ皆強いんだね」

ルネが思わず零した言葉に、しかしヴォットとスピキオが首を横に振って否定する。

「こんなの全然強くないあるよ」

「そもそも我らは戦闘要員ではないあるからな」

「あんな破壊力は出せないあるよ」

ヴォットが手を振って言った直後に、それに同意するかのように木が一本こちらに向かって傾ぐ。それは三人の横すれを通り、派手な水飛沫を上げて川に倒れこんだ。向こう岸ではイナバが驚き飛び跳ねている。木は途中で乱暴に折られており、散った木っ端がバリアントと共に転がっていた。

「ほらこんな風に」

スピキオが事もなげに言う。倒れた木の無効では、件の人物達フィルとイオリが『手合わせ』をしていた。手合わせだと双子は言ったが、ルネには実戦にしか見えない。それというのも、二人が自分の得物を躊躇せずに使っているからだった。

フィルは関接や甲に金属の入った皮製の手袋を使っている。メーディナ族が元々持っている怪力にベルヴェルグによる肉体強化の効

果もあり、地面に当たれば一発で抉ってしまうほどの威力を持っていた。動きから察するに、ブーツにも同じ仕掛けがなされているのだろう。

一方のイオリは、昨日も見せてくれたように刀を使っている。滑らかな動きや刀の裁きは一切の無駄が排除されていて、フィルと比べて柔らかい印象を受ける。その引ききるような動作は、こちらでは珍しい異国の物だった。

「お？ ルネじゃねえか、早いな」

フィルとイオリが三人に気付き、フィルがひょいと右手を上げた為、その場が中止となった。

イオリが流れるような動作で刀を鞘にしまい、フィルは手袋の中のテーピングがずれていないか確認している。

辺りは燦々たるありさまだった。地面は混ぜ返され、木などは殆ど斬られるか碎かれるかで倒れている。逃げてしまったのか、獣どころかバリアントさえも見当たらない。先程双子が仕留めたバリアント達は、この二人の争いに巻き込まれないように逃げていく途中だったのだろう。ルネはほんの少しだけバリアントに同情した。

「下位のバリアントか」

イオリが哀れなバリアント達を見下ろしている。フィルも筋肉を解すように伸びをしながら辺りを見回していた。

「朝飯とる手間が省けたな」

「食べるの！？」

ルネは思わず叫ぶ。今迄獣や魚などの肉は食べたことはあってもバリアントの肉は口にした事は無かった。というか、食べられると

いう事さえ知らなかった。一步退いたルネに向かって、ヴォットとスピキオが子供に言い含めるように人差し指を振って言った。

「食べないならこんな綺麗な姿のまま捕まえないあるよ」

「皮をはがすのは手伝ってもらうある」

「鳥の肉みたいな感じだから、安心しろ」

ルネは辺りに散らばる未知の食材を見下ろして深く溜息を吐いた。

*

*

*

ネジュはグラードと分かれてから、森の中を進んでいた。進んでいたといってもそこには明確な道があるわけではなく、細い獣道の為、木の根や岩など様々な障害が存在する。しかしネジュはその獣道を普通に歩くよりも早いスピードで進んでいく。

彼は今、ベルヴェルグの残滓を辿って歩いているのだった。その残滓はブルーの眼球に残っていた物と同一の物である。ただ、バリアントとブルーは上空を移動していたようで、地上では薄れていて非常に辿りにくい。ネジュは表情に出さないまま、内心で舌打ちをする。ここから先は更に薄くなっていて、ほとんど無に等しい。もう辿れる証拠は無いも同然だった。ネジュは周りをゆっくりと見渡し、そしてあるものを見つけてそちらの方へと足を向ける。

「ギャシャアツグゲ」

「グツグツシャゲギャアシャアア」

ネジュが見つけたのは、三体の下位のバリアントだった。どれも同じ種族で、似たような姿形をしている。その醜さにネジュは眉を

顰める。人間の子供ほどの大きさと頭が大きく、背の曲がった姿勢は猿を思わせる。その体はやはり他のバリアントを同様に鱗に覆われ、体を不釣り合いな大きな平たい手の指先からは薄汚れた爪が伸びている。顎が小さい逆三角形の顔は白めの黄ばんだ目がその大半を占めていて、鼻は小さく骸骨のように上を向き、小さな口からは無数の尖った歯が覗いていた。薄い耳朶は尖った先端が折れて垂れている。そのバリアント達が身に纏っているのは、人間から奪ったであろう襤褸切れだった。

三体のバリアントは今まさに死肉を貪り食っている最中だった。その死体は腐敗が激しく、腕の肉などは組織が破けて崩れていた。バリアント達はネジュが死体を奪うのを恐れているらしく、小さな歯を懸命に剥き出して威嚇している。ネジュには人の屍を喰らう趣味など無い。だが、彼にとってその死体は重要だった。

ネジュは更に一步を踏み出す。その時、バリアントのうちの一体が躍起になって飛び掛ってきた。汚い爪を振りかざしてネジュに襲い掛かる。しかしネジュはそれを予想していたかのような動作で左手をバリアントの顔面に翳した。バリアントが飛び掛ってきた勢いでネジュの人差し指と中指が両眼に突き刺さる。バリアントは途端にもがいてネジュの左手に縋り、引き剥がそうとする。だがネジュは親指と薬指、小指に力を込めると、上顎骨が砕け、動きが微弱なものとなった。骨が砕けた影響で内出血を起こし、顔がどんどん腫れていく。ネジュは手を横に振り、バリアントを地面に落とす。しかし皮肉にもバリアントは生命力が人間と比べてもかなり強い。潰れた目を押さえてのたうちまわる。その苦しみ悶えるバリアントの胸をネジュは踏み潰す。内臓を潰した為、バリアントの小さな口からは血が吹き出る。赤黒く痣が出来た胸を探ったのを最後に、一体目は息絶えた。

仲間の死を目前にして、残りの二体は後ずさり慎重に間合いを取り始める。

しかしネジュはこれで終わらせるつもりはなかった。全部殺して

おかなければ、今後の活動に支障を来たすかもしれない。

一体ずつでは敵わないと悟ったらしく、今度は二体纏めて飛び掛ってくる。ネジユは片方を上半身を僅かに横にずらしてよけ、左腕を大きく薙ぐ。薙いだ左腕はもう一体の頭部を捉え、近くの木に叩きつける。そのバリアントは即死だった。上顎から上は完全に消失し、残った下顎に血液の脳漿が溜り、破片となった脳味噌の一部が浮き沈みしていた。粘り気のある液体がバリアントの惨死体と木の幹をくっつけているため、死体はゆっくりと幹を伝って滑り落ちていく。地に落ちると、下顎の杯に入っていた薄赤い液体が地にまかれ染み込んでいく。

最後の一体はネジユとの圧倒的な力の差を察し、背中を見せて逃げ始めていた。ネジユは足下の胸が潰れた死体を蹴り上げる。死体は逃走を図るバリアントの首を直撃し、重みで地に引き倒す。ネジユの蹴りの威力で最後の一体の首の骨はくの字に折れていた。口の端から血泡が吹き出ている。

ネジユは自分の作り出した肉塊を尻目に、人の屍に近づく。顔が腐っていて男か女かの判別もつかないが、必要な情報は十分に得られた。ブルーの眼球に残っていた物と同じベルヴェルグの残滓が感じられたのだ。三体のバリアント達がこの死体を手に入れた場所には、何か新しい証拠があるはず。

ネジユは再び残滓を辿って足を進める。

*

*

*

ルネはまだ一人ではリムの制御するバリアントに乗れないため、今日も移動はフィルの鞍に同乗してだった。出発から数時間後、見えてきたとフィルが指差したのは、先端を鋭く尖らせるように削った木を隙間なく並べた、見上げる程高い垣だった。リムの話によれ

ば、バリエントを容易に侵入させないための物だという。

「はあ、それであんな高い所から落ちてきたのか。パラシュートぐらい使えよ」

「だって使い方が解らないから。ところで、パラシュートって何？」
「うお……」

ルネは移動中、これまでの経緯を話していた。ルネの村が潰れた原因も。フィルの話によれば、バリエントの被害によって潰れる村は数え切れないほどあるらしい。

そんなこんなで見えてきたのがその垣だった。

リムが馬車から降りて、関所を守る衛兵と何事かを話している。衛兵は内と外に二人ずつ、計四人ついていた。リムと会話しながらも時々こちらを注意深く窺ってくる。その無作法な視線にイオリが舌打ちをしたが、その視線は離れる事なくルネの方にも纏わり付いてくる。ルネが少しだけ身を縮めた時、丁度リムと衛兵の話が付き、騎乗するバリエントが動き出す。が、関門の辺りですぐに止まった。

「バリエント達はここに預けていくそうじゃ。ほれ、降りるぞい」

「何それ、めんどくさっ」

「以前はここまで厳しくは無かったはずだが」

ストエカスとウィンストンが文句をいいつつも、衛兵とリムに従って鞍を降りる。ルネも先に降りたフィルに支えられながら飛び降りた。

馬車に繋がれているバリエントも全て衛兵達に引かれていく。ただ今場だけは大きいとはいえ元は動物のため、残されていた。双子がわざと衛兵達に聞こえるように大袈裟に溜息と吐く。

「あーあ、どうやって馬車を移動させればいいあるか」

「よし、フィル。お前が引いてくある。お前が一番力持ちある」
「俺かよっ!？」

そんな会話を流しながら、ルネは辺りを見渡していた。

関門そばは雑然として人はあまりいないものの、道を暫く真っ直ぐ行けばそこは商店街で様々な店や露店が立ち並び、活気で溢れている。客を呼ぶ声、値引きを求める声、全てがルネにとって新しい物だった。生まれてこの方、これだけの数の人をルネは見た事が無かった為、圧倒される。

それに見とれていると、馬車が動き出した。結局全員で引いていく事になったらしく、ルネも慌てて一台の馬車の後ろに手を当てて押す。それでも始終、馬車の陰から通りを覗いていた。近づくにつれて、音は耳が痛くなる程に大きくなっていく。

「クレタはギルドも騎士団も多いからな、町はかなり大きい」

隣にイオリの引く馬車が並ぶ。

「僕達は待ち合わせのためにここに來たのさ。ほら、あそこ」

口を挟んできたストエカスが顎をしゃくって示した先は、いくつもの露店が立ち並ぶ道だった。

覗いたルネは少し息を呑む。それはルネにとって見覚えのあるものだった。ごったがえす人ごみの中それと確信させるものを見つけた時、ルネの足は駆け出していた。

「セインツ!」

「ん? おおっ、ルネじゃねえか!」

振り返った人影に、ルネは遠慮せずに思い切り抱きつく。相手の

方もそれを咎めずに、寧ろ痛い程ルネの背中を繰り返し叩き、再会の喜びを表していた。

ヴォットをスピキオが傍に来て、驚いた用に二人を交互に指差す。

「知り合いだったあるか？」

「意外な組み合わせある」

「うん！ セインはよくうちの村に行商に来てたから」

他の騎士団のメンバーも興味深そうにこちらを見ている。

セインは行商人ギルド・ヴォーリヤの団長であり、ルネが住んでいたような辺境の村にも顔を出していた。年が近いという事もあつてか、二人はすぐに打ち解けた。ルネにとっては自分とこれほど親しくしてくれる人はいなかったため、かなり懐いてしまったのも無理はない。

世間とは狭いものだ、と感嘆したウィンストンの言葉に、フィエルが苦笑でもって答えている。ただ、リムだけは合点のいったという顔で頷き、セインも口で言うほどには驚いていないようだった。

しかし、その余裕に満ちた態度が突然反転する。

「ヤバっ、ちょっと隠してくれ」

ルネが是と答える前に、セインがルネの背中に回り込んで身を縮める。しかしセインよりもルネの方が小柄なため、どんなに身を小さくしても彼の目立つ髪色は隠しきれない。その事を本人にちゃんと指摘してやろうとルネが背後に手を伸ばしかけたのと、それはほぼ同時だった。

「セイン！ セイン、どこにいますか！ また私に無断でこのような物を飲んで！ 今日と……いい、う……あ」

「今日は、ルーファス。久しぶり」

人混みをかき分けて、姿も見えない上司に怒鳴りながら出てきたのは。ルーファスだった。

両手に持っている酒瓶とグラスは、おそらく先刻までセインが飲んでいた物だろう。ヴォーリヤではセインが飲酒したことでルーファスに怒られているのは、日常茶飯事であった。

その光景に、ルネは思わず笑みを零す。自分とは違い、こちらは何も変わってはいなかった。

「本当に久しぶりですね、ルネ。ああ、アデラ達はこの奥の酒場にいますが、忙しくて手が離せません。手が空いたら、貴方がこの町に来ている事を伝えるとしましょう」

ルーファスも手のものを全て放り出して、ルネに親しげに歩み寄ってくる。

「ローダに拾われていたのですね、良かった」

「そうじゃ、存分に感謝するがいい。ところで、クレタ出発はいつになるかの？」

自分のけ者にされながら進む会話に辟易してきたのか、リムが遠くから口を挟んできた。その質問にルーファスは顎に手を当てて考え込む。片眼鏡に覆われていない右目が思案気に細められた。

後ろでセインが何か囁いているので意識をそちらに向けてみると

「三週間後、三週間後」と繰り返しているのが聞き取れた。

「三週間後？」

「ええ、そうですね、ルネ。それ位が妥当でしょうか」

ルーファスがルネに完璧に整った笑みを向け、そして後ろに隠れ

た（つもり）のセインを見やる。今はルネ達の手前、怒りを露わにしないだけで、去れば途端にセインに対して特大の雷が落ちる事だろう。それを理解しているセインは更に身を縮め、騎士団の団員もヴォーリヤに属する店員達まで不謹慎な笑いを必死で抑えようとしている。

「ローダとヴォーリヤはな、協定を結んでいるのじゃ。移動中を守る代わりに、物資面ではかなり助かっている」

リムが口元を手で覆って噴出さないように堪えながらルネに説明するが、それが限界だったのか、すぐにイナバの影に隠れてしまう。それには流石のイオリも唇を噛んで笑いを堪えていた。

ルネの後ろでは小声でセインが悪態を吐いている。女に聞かれればその場で平手打ちを喰らいかねない言葉の汚さに、ルネは唯苦笑いを浮かべるしか無かった。ルーファスが仕方ないと溜息を吐いて、説明を引き継ぐ。

「行商中は危険が多いですからね、身を守る術の一つです……さて」

ルーファスがこれ以上の物は無いというほどの壮絶な笑みを唇に浮かべる。ただし、露わになっていている方の右目は全く笑わず、静かすぎる炎を燃やしていた。

あまりの迫力にたじろいで、ルネは一步後ずさる。騎士団のメンバーもこれは冗談じゃないと気付いて慌てふためいていた。フィルが手を垂直に立て、横にスライドさせて「どける」の合図をルネに送ってきている。ルーファスもそれに同意して頷いた。

「ルネ、後ろの悪ガ……いえ、セインをお出しなさい。さもなくば……」

「さ、さもなくば？」

恐ろしさに震えつつも聞き返したルネの腕を、フィルが掴んだ。思わずルネは声を上げたが、それに構わず荷物のように小脇に抱えられる。これは今日二回目だな、とルネは脳の片隅で考えた。

当然、隠れていたセインが、怒りに拳を握り締めて震えるルーファスの前に曝け出される。ギルドの店員達も自分達がとばかりを喰らわないよう、いそいそと仕事に戻り始めていた。ただし、面白い出来事を見逃さないようちらちらと横目で二人を窺いながら。

「んじゃ、俺達は宿に荷物置いてくるからなっ」

「フィルーッ！ この、薄情モンがああああ！！」

「逃がすものですか！！ たっぷりと仕置きしてやりますからね！」

「いぎゃあああああッッッ！！！」

セインの叫び声と周りの笑声とが道を満たし、ルネ達の背中に勢い良くぶつかった。

*

*

*

ルネは宿の表通りに面した部屋を当てられていた。二人部屋なので、ルネは保護者代わりであるフィルと一緒にいる。

しかし、そのフィルは馬車に荷物を取りに行っていて不在のため、部屋にはルネ一人しかない。ルネは部屋の窓を大きく開け放つ。夏が近づいてきている事を主張するような暖かで穏やかな風と共に、通りの喧騒が部屋の中に入り込んでくる。新鮮なその感覚に、ルネは暫く目を瞑って身を委ねていた。これほどの活気を感じるのは初めてで、喜びの中には新しい物に対する不思議な感慨がある。

ルネはそれを振り払うように首を振ると、町の垣の更に奥、森を

見つめる。明日は、不要な荷物はここに置いて、ルネの住んでいた村に行く予定だとリムが言っていた。半日ほどでつくから、セイン達ヴォーリヤに合わせて帰ってこれば良いそうだ。帰郷を楽しみにしながら、そろそろフィルの手伝いに行こうと窓を閉める。

その時、開花で賑やかな声、続いて階段を駆け上ってくる複数の足音が聞こえてきた。聞こえる声は聞き覚えのあるもので、ルネは顔を輝かせる。

「ルネーッ！　ぷわあ、ルネだっ、ホントに来てたあ！」

「久しぶりだね、元気だった？」

蝶番が外れるのではないかと思う程の勢いで扉が開け放たれた。

まず最初に入ってきたのは、露出が多く裾が派手に閃く舞台衣装を纏ったアデラだった。ヒラヒラとした裾を翻して思い切り飛びついてきたため、ルネは支えきれなかった分、半歩後ろに下がる。

続いて入ってきたのは、ネルス族特有の幼い顔に似合わない落着いた笑みを浮かべたライリー。

ルネはアデラの体を支えながら彼に向かって笑顔で頷き、元気だという意思を伝える。すると、まだ階段を昇る足音があった。今度は三つ。

「あらあ、楽しそうじゃない。お姉さんも交ざろうかな」

「お前、ルネを殺す気か」

「……」

「いいじゃないか、少し位。ねえー？」

許可する前にルネとアデラを丸ごと抱えたのは、メーディナ族のポーレット。一族の特徴とはいえ、おおよそ女性とは思えない怪力で二人を床から持ち上げてしまう。その様をユークが無言で見つめ、三角形の耳をパタリを一度動かした。その様子を見たアデラが「ユ

「グも交ざりたいのー？」と聞いている。

更にその後ろにいるのは、大量の荷物を抱え眉間に皺を寄せるフイルだった。腕に下げている袋はおそらくルネ達の荷物だろうが、木箱に入った果物や干し肉なんかはポーレットのお土産だろう。

得意げにポーレットが、思い出したように掌を合わせる。

「そおだ服よ、服。フィルから聞いたよ、アンタ服のサイズ合わないんだって？ ……サラ！」

ポーレットはまた開いている戸口に向かって声を張り上げる。お塩とは三人分しか聞こえなかったが、まだいるのだろう。しかし、サラという名前は、ルネは聞いた事がなかった。ルネがまだ会った事のない新顔だろうかとドアの向こうを注視する。そこから足音も衣擦れも何一つ音を立てない所作で入ってきたのは、ポーレットと同じくらいの妙齡の女だった。

「はい、お呼びでしょうか」

「ああ、呼んだ。コイツの採寸してくれるかい？」

「畏まりました」

少しもずれのない完璧なまでの笑みを顔に浮かべ、サラはルネに一礼する。ルネはそれにつられて自分も少しだけ頭を下げてしまった。二人同時に頭を上げ、そしてもう一度見合わせたサラの顔が再び笑みを形作る。その顔をルネは興味深げにしげしげと見つめた。彼女に顔の左半分には、左目を挟んでベルヴェルグが施されている。ベルヴェルグはゆっくりと点滅し、作動していることを示している。ルネの視線にもサラは動じずに、スカートのポケットから巻尺を取り出す。

「失礼します」

サラが無駄のない機械的な動作でルネの体の寸法を手際よく測っていく。不思議そうな表情をしているルネに、ライリーが説明を加える。

「サラは擬人型なんだよ、つまりはベルヴェルグで動く人形」

「はい、私はいつでも皆様の忠実な僕」

ライリーの言葉を、サラが顎を引いて肯定する。そのサラを、ルネは改めて見つめた。確かにサラの動きや表情は完璧すぎて人工的に見える。便利で有能ではあるが、人と思って接するには少々物足りなさを感じる。もっとも、ルネは擬人型を見るのは初めてだったから、サラとの対面は新鮮なものとして感じられた。

「セインが、人手が足りないって言って導入したの」

アデラがライリーの説明に補足する。

確かにヴォーリヤは人手が少ない。多くの商品を扱っている割には働く人が少なく、一人一人の仕事の量がどうしても多くなってしまう。アデラ、ライリー、ユーク。ポーレット、そしてサラがここに来ることができているのは、昼時がすぎてほんの少しの余裕が出来たからである。夕方になれば、またてんでこまいになるだろう。

そうこうしているうちにもう、サラは採寸を終えていた。メモを取った紙をポーレットに渡す。

「ありがとね、サラ。じゃあ、私たちはこれで失礼するよ」

「他に必要な物があつたら言ってね」

元氣良く手を振って部屋を出て行ったポーレットとライリーの後を、ルネの頭を一なでしたユーグが追う。去り際にポーレットがフィルに意地の悪そうな笑みを向け、それに答えてフィルが右手の中指を立てていた。人の感情の機微に疎いルネは、仲が悪いのかと首を傾げる。

アデラも彼女らの後を追いかけていくが、その途中ではたと止まる。

「そういえばね、ナハトも会いたがってたよ。でも忙しくて来れなかったの」

「そつか。じゃあ、明日の朝会いに行くよ」

「解った！ 伝えとくね！」

アデラも天真爛漫な笑みを浮かべ、部屋を飛び出していった。階下から聞こえる他の三人を呼び止めるアデラの声に、らしくなくフィルが深く溜息を吐き、ルネは唇を綻ばせた。

*

*

*

グラードは雑多とした人混みの中を、辟易しながら歩いていた。

これだけの人が集まる街は、ここを置いて他には無いだろう。安全と思えるところに、人は寄せられていく。所詮は人も群れを成さねば存在する事の出来ない矮小な種族なのだとグラードは心の中で結論付ける。

断つてもなおしつこく詰め寄ってくる『心の穴を埋めてくれる薬』の商人の心臓をどうやって貫こうかと思案しているところ、曇天の中でもよく目立つ黄色の色彩を見つけグラードは人の合間を縫って狭い路地へと身を滑り込ませる。下降してきた鳥と二言ほど言葉を

交わし、再び空に解き放つ。

早くあの男を見つけないければと路地を挟んだ向こう側から視線が送られてくるのを感じた。

否、そこからだけではない、周りからも痛いほどに感じる。グライドは思わず動きを止めた。

路地の向こう側からグライドに視線を送ってきているのは、良く目立つ橙色の髪をした少年。彼はこちらを睨む訳でもなく、ただ淡々を見つめてくる。その視線は『観察』という言葉がぴったりと当てはまるように感じられた。

不思議な事に、周囲からの視線も全く同じ性質だった。まるで一人の人物が幾人にも分かれてグライドを囲っているかのような感覚。その居心地の悪さにグライドの脳内に、この通りの者を全て皆殺しにしてやるうかという考えが浮かぶ。

だが、それは双方にとつてまったく不意に断ち切られた。何の関係もない一組の母子が、少年とグライドの交錯した視線を遮ったのである。

これを好機とばかりにグライドは強く地を蹴って、後方へと高い跳躍をする。あのまま通りに出て行つては駄目だと、彼の経験が警報と共に告げている。

グライドは建物から建物へとさらに跳躍を繰り返し、もう十分すぎるほど離れてから漸く振り返る。追いかけては来ていないようでもう視線はないが、こめかみの部分に時たま僅かな痛みを感じ、その痛みは心臓があるであろうところまで降りて違和感としてそこに鎮座していた。一体何だったのかとグライドは目を眇めて脳内検索をかけてみたが、彼の持ちえる知識の中には該当する、または近い答えは無かった。そのためグライドは考えるだけ無駄と判断して思考を中断し、建物の屋上から軽やかな身のこなしで飛び降りる。

今はそれについて悩んでいる場合ではない。今のうちに早くあの男を見つけないければ、と。

猟奇的な捕食者と、それを肯定する背徳者

少年は震えていた。ただただ広がる草原の中、恐怖に震えていた。彼は村の者達にここまで連れてこられ、そして置いていかれたのだ。少年の住んでいた村は辺境の小さな小さな村だった。騎士団も近くになく身を守る術を持たない、いつバリエントによって滅ぼされるかも解らない村。危険ゆえに外部の者はほとんどが関るうとせず、唯一交流があつたのは隣の同じく小さな村だけであつた。二つの村はお互い、できる限りで助け合つていた。だがそれも所詮悪あがきにすぎない事で、こんな絶好の場所をバリエントが放つておく訳がない。最初は下位のもの、やがては注意のもの、そして村に大きな転機が訪れた。

ある晩、二つの村に同一の一体のバリエントが現れた。巨大な体、長く撓る尾、村人達を一睨みで麻痺させる瞳、そしてずらりと並んだ牙の間からは蒸気が靡いていた。村の誰もが初めて見る、しかし一目でそれと解る。そのバリエントは竜の眷属だった。眷属とはいえ、竜の血筋は上位のバリエントに値する。村の誰もが最悪の事態を想像した。

しかし、バリエントは村人全員を殺しはしなかった。見せしめに二、三人殺し、村を圧倒的な恐怖で支配した後、こう言った。

——月に一度、子供の生贄をそれぞれ一人ずつ差し出せ

竜は人語を解す。しかし、並べられた言葉はにわかには信じがたい事だった。

子供がいなくなれば、次の世代へと繋げなくなる。逃げ出そうと思えば、待機している下位や中位のバリエントに喰い殺される。贄を滞れば、代わりに大人達が数人喰い潰される。村人達は唯、緩やかな滅びへと向かつていく恐怖に耐え続けるより他に無く、中でも

大人達は自分の安全を確保したいがために、子供を抵抗なく差し出すようになっていた。減っていく村人の数に反比例するように増していく悪意。皆殺しより残酷な仕打ちだった。

そうして今回、生贄に選ばれたのが少年だった。自分が次の贄と決まった時に両親に助力を求めたものの、すでに我が身の事しか思っていないかった彼らは聞く耳さえ持たなかった。

そして少年と背中合わせにもう一人、アーバン族の少年が座っていた。彼もまた、隣村から連れて来られた生贄だった。背中から感じる温もり、ただそれだけが今にも発狂しそうな少年をここに繋ぎとめていた。

少年とは対照的にその熱源は僅かも揺らいでいなかった。何かにじっと集中しているように、微動だにしない。

不安ではないのだろうか、それとももう精神が崩れてしまっているのだろうか、その背中に問いかけようとした時、彼にとつての絶対的な『恐怖』は訪れた。

空から降ってきた巨大な質量は、死の予感を巻き起こした風と共に辺りに撒き散らしながら着地する。竜の双眸は品定めをするように少年達に注がれ、並んだ牙が剥かれた。バリアントが更に顔を近づけもつと良く見ようとした瞬間、少年は悲鳴を上げそうになった。バリアントが怖かったからではない、心が折れないように支柱としていた背中合わせに送られてくる体温が途絶えたからだだった。

アーバン族の少年は、恐れるべき対象である竜へ駆け寄っていた。やはり気が狂っていたのかと目を見張ったが、違った。アーバン族の少年は軽やかな足裁きであつという間に詰め寄り、その手にはどこから持ち出したのか歪に曲げ伸ばしされ先の尖った鉄棒が握られていた。子供相手という事あつて油断していた竜は、まったくの不意打ちを喰らった。アーバン族の少年が握る鉄棒が右眼窩に突き刺さり、目玉や下についた瞼、周囲の肉を引きちぎりながら下へと降りていく。当たり前に眼球には鱗が生えている筈もなく、守る物がほとんどない。そこから下へと傷をつけられ、体液と黒血を撒き散

らしていくバリアントの顔。表面では何もかも跳ね返す鱗も、眼窩に開けられた穴を糸口として攻撃されれば意味をなさない。抵抗はあるものの、確実に肉は引き裂かれていく。ついに痛みに堪えかねた竜が咆哮をあげ、逃れようと四肢と翼をばたつかせ空へと飛び立っていった。

—— 覚えている

夜空に消え入る前、竜は確かにそう言った。残った左目を爛々と暗闇に光らせながら。

アーバン族の少年はそれを狂喜とも呼べる笑みを浮かべて見送っていた。血と体液で濡れた顔が月に照らされてよく見えた。その時、少年は思った。それは一族特有の押さえる事の出来ない感情だった。

—— 美しい

そんな自分を異常だと自覚しつつも、少年はそれを享受した。草原にただ黙って立つ少年達を迎えに来たのは村人ではなく、青い髪の男だった。

—— そなた達の望むものはこちらに来ればいくらでも来るかの？

少年達は手を引かれ、竜の体液が染みる草原を後にした。

二話

頬に当たった暖かな日差しがくすぐったくて、ルネは身を振りつつベッドから起き上がる。

今日は室内なので、当たり前前に宿の裏に繋がれたイナバはいない。通行人がああ巨大な姿を見たら、どういった反応をするのだろう。想像してルネはくすりと笑う。フィルはすでにいなかった。また、イオリと朝の手合わせでもやっているのだろう。

自分用の軍服は何時でも着るのだからと期待に胸を膨らませながら、平素の服を身に着ける。今朝はナハトと会う約束をしている。ルネは部屋を出る時に戸締りをしようと立ち止まりかけたが、貴重品は自分は持っていないし、フィルも自分で管理しているだろうと思いなおして階段を駆け下りる。

階段を下りればそこはロビーに繋がる。そのロビーに見覚えのある姿を見つけ、ルネはそちらに足を向けた。

「おはよ、皆早いなだね」

「おはよう、ルネこそ今日は早いな」

ルネの挨拶に顔を上げたのは、ウィンストンだった。早朝だというのに、もうすっかりと身支度を整えているところが彼らしい。ロビーには、ウィンストンの他にもストエカスがいる。設置してある椅子に座っているストエカスの髪を、ウィンストンが結っているところだった。彼の髪は両側頭部の髪の一部を後ろに持ってきて縛るもので、いつも丁寧に整えてあった。戦い以外ではずばらそうな印象のあったストエカスだが、ウィンストンが毎朝結っているというのなら、綺麗で当たり前である。

だが、肝心のストエカスは全てをウィンストンに任せて船を漕いでいた。

ウインストンはそんな彼を見下ろして苦笑を見せる。

「まあ、でも、全員が朝に強いとは限らないな。こんな奴もいる」

「……確かに眠たそうだね。いつつもこうなの？」

「こんな感じだ。苦勞させられている、昔から」

最後の『昔から』という言葉と表情には、気のせいか翳りがあつたような気がする。

昔からというには、幼馴染ということだろう。道理でこの二人は騎士団の中でも特に仲が良いはずだと、ルネは納得する。

しかしながら、先程の含みを持たされた言葉は、やはり自分の勘違いだったのだろうか。ルネは、人の感情の機微に疎い自分を恨めしく思った。

気になつて仕方が無かつたのだが、先日のリムの時のように好奇心で人を傷つけてしまうのはルネも望んでいない。ウインストンの渋い表情からして、あまり良い思い出ではないのだろうか。ルネは口を開くのを逡巡していた。

そんな気まずい雰囲気を一気に捻じ曲げたのは、船を漕いで遙か大海原へ旅立っていると思われたストエカスだった。

「結果的に一大事には至つてないから良いんじゃないかな。そしてお早う、ルネ。ここの枕はなかなか寝心地が良かったと思うんだけど、どうだい？」

正しく猫の仕草で伸びをして、起き抜けの顔を擦るストエカス。丁度ウインストンも彼の髪を結び終わつたところだった。どの角度から見ても完璧な仕上がり、ルネは感心してまじまじとストエカスを見る。

「やだなあ、もう、そんなに見つめないでよ。それよりも、こんな

朝からどこかに行くのかい？」

「ちよつとナハトに会いに行くの」

「そういえば、昨日アデラ達が遊びに来ていたな」

「気をつけていつてらっしゃい。朝帰りの酔っ払いに絡まれないようにね……ふわぁ」

やはりまだ眠いのか、欠伸交じりに言葉を紡ぐストエカスとそれを呆れたように見やるウインストンに手を振って、ルネは宿から飛び出す。

ヴォーリヤが店を開いている路は、まだ早朝だというのに朝食の買出しのために人が集まって酷く混雑していた。ナハトのテントを探し、まだ慣れない人だかりの間をきよろきよろと見渡していると露店の一つからポーレットが手招きしているのを発見した。彼女がいるのは、芳しい匂いにする林檎を崩れないのが不思議な程高く積み上げた露店だった。隣にカプラ族の男がいることから、ポーレット自身が売り子をしているのではなく、食品を扱う露店の見回りをしているのだらうと推測できる。

「おはよさん、随分と早いじゃないか。ほら、これあげる」

ポーレットが赤く熟した林檎の一つを手にとって、ルネに投げたよこす。ルネが右手を上げて受け取ると、パシリ、と小気味良い音がした。貰ってしまったてもいいのだらうかとカプラ族の男の様子を窺うが、彼も嫌味のない全くない朗らかな笑顔で頷いている。彼の笑顔に後押しされて一口齧ってみると、甘さの中に程よい仄かな酸味のある果汁が絶妙で、ルネ自身も笑みが零れた。それほど大ではない林檎を齧っていると、ポーレットが奥から出てくる。

「えっと、ここを真つ直ぐ行った一番奥がナハトのテント。アイツのだけ紫だから、すぐに解るわね？」

「ありがとう。それに林檎も美味しかった」

どういたしまして、と温かな笑みを浮かべたポーレットと気前の良いカブラ族の男を後に、ルネは更に人を掻き分けて進む。道の突き当たりには確かにポーレットのいう通り紫のテントがあつて、色合いと漂ってくる匂いのせいか、その一部だけ次元が違うように感じられる。ルネが入り口まで歩を進めると、中から「入るが良い」と静かに染み渡る声が聞こえてきた。

「失礼しまーす……久しぶり」

「ああ、久しいな、ルネ。会えるのを楽しみにしていた」

天井から垂れ下がる紗幕の間から柔らかな微笑みを向ける男――

――ナハトな緩やかな動きで手を伸ばし、ルネの額を小突く。

「村が消えたというから心配していたのだが、杞憂であつたな。セインが大丈夫とは言っていたが」

ナハトの服の裾からも香の香りが漂ってくる。不思議と気分が落ち着くため、ルネはこの香りが好きだった。

心に染みこむような声にルネは耳を傾ける。ナハトは自分の言葉を聞く姿勢をとったのを確認してから、すこし表情を引き締める。

「いつもお前は一人で行動してしまう。それが自分を追い込んでいくのに気付くがいい」

最後の言葉は、囁き伝えられた。

「罪は何があろうともお主を逃がしはしない。受け入れろ」

強い瞳で見つめられる。未来を見据える、強い瞳だ。ルネはその眼光に押され頷いた。ナハトの言った事が間違っていた例はない。ナハトはこれを生業としているが、決して胡散臭い物ではない真実だとルネは知っている。必ずナハトの占いは当たると評判が高いし、連日多くの客が押し寄せる。

昨夜も忙しかったのだろうか、ナハトが初めて疲労の色を見せて目を閉じる。ルネは気を使って足音を忍ばせて静かにテントを出ようをしたのだが、そこで再びナハトが言葉を発する。

「少し説教めいてしまつて悪かったな。兎に角、お主に再会できて嬉しい」

それだけを一方的に伝えた後、ナハトは腰掛けていた肘掛け椅子に身を持たせ掛けた。そんなところで寝るのかとルネはテントの中を見回したが、椅子以外に寝ることができそうな物が中には無かった。

それに、今から移動させようにもすでに寝息を立て始めているナハトを起こしてしまいかねないので、無理である。

「僕も皆と会えて嬉しいよ……お休み」

世間一般の時間軸と大きくかけ離れた挨拶を残し、ルネは今度こそテントを後にした。

*

*

*

数時間後、ルネは森の中の小道にいた。ルネの生まれ育った村に行く為だ。

しかし、突如として、ストエカスが足を止め、頭を巡らす。

「匂いがする」

「何のだ？」

呆れたような表情を作ったフィルが聞き返す。たとえ聞かずとも、その答えが分かっているからだろう。

「血の、だよ」

案の定、ストエカスは笑顔で言い切った。

アーバン族の優れた嗅覚が風に乗った僅かなそれを嗅ぎ取ったのだろう。イオリやウインストーンも、判然としない表情を作っていた。

「って訳で、僕は行くね」

「ああ、私も行く」

「おい、ちょっと待って」

フィルの制止も虚しく、ストエカスとウインストーンは草木を掻き分け、森の奥の小道へと分け入ってしまった。

フィルが頭を乱暴にがしとかく。

「全く、何でもここは自分勝手なヤツが多いんだ」

その言葉には自分への自嘲も込められているのだろうか、薄く笑う。

そんなフィルを尻目に、イオリが動いた。

「嫌な予感がする。俺も行く」

「へいへい、どーぞ」

止める気もなくしたのか、フィルが投げやりに手をふった。
その態度を無視し、イオリはストエカスをウィンストンの後を追
いかける。

「どうするの？」

「どうするって、俺達だけで進むしかないだろ」

溜息を吐きつつフィルが振り返り――ルネの方を見て固
まった。

「ルネ！！ 後ろだ！！」

「姉さんを殺したのは、お前か？」

――ルネが振り返るとそこには、白で覆ったような青年
が立っていた。

*

*

*

「罨……かな」

「だろうな」

小道を辿った場所にあった、草木が疎^{まば}らな開けた場所。
疎^{まば}ら、と言いつつも、それは自然に出来たというには有り得ない。
その証拠に、刈られた草や掘り返された土が散乱し、切り株もあ
ちこちに見受けられる。

「あ、何か出てきた」

ストエカスの言う通り、拓けたその地へと入ってくる者の影が複数。頭頂から爪先までを真っ黒に覆った男達だった。

「——— 楽しくなりそうだねえ。ウィンストン？」

鉄の爪を舐めながらストエカスが笑う。

「——— ああ、そうだな」

薄く微笑んで、弓を構えたウィンストンも同意した。

*

*

*

「見失った」

イオリはぽつりと呟いた。

「お前等のせいだ」

そして、前方の集団を睨む。

彼らは、茶色を基調とした檻褸けい服をまとっていた。皆、手に手に武器を携えているが慣れないものらしく、構え方がぎこちない。

「イオリ・ナガサワだな」

筆頭らしき存在が手元の資料とイオリの顔とを見比べる。

「お前には、死んでもらう」

その言葉と同時に、固まっていた男達が、イオリを囲むように散らばる。

その彼らに向かってただ一言、イオリは良い放った。

「どうでも良いな」

筆頭が呆けた表情になる。

「お前等は、俺を殺すつもりなのか。じゃあ、俺もお前等を殺すつもりで戦おう。それが普通なんだろう？」

対してイオリは、一切の表情を変えない。

「——心底、どうでも良いが」

*

*

*

「ごめんね、捕まっちゃった」

ポーレットが脂汗をかきながら謝る。

喋る元気があるのはポーレットただ一人で、他に捕まったエディッサ、サラはピクリとも動かない。

サラに関しては、今後も動くことは無いと思われた。彼女の顔のベルヴェルグが大きく破損していて、修理が不可能だからだ。

「情報屋、これを見てもまだルーネ・ギルデンについての情報を渡さないつもりか？」

襪褌服の男の言葉にセインは答えず、ただ静かに瞳を閉じた。

*

*

*

それよりも少し前の話。

ヴォットとスピキオは、本日は休みをとっているナハトと共に、酒場の横に設置されているテントの前に置いてある、商品の詰まった木箱に腰掛けて酒を飲んでいた。今日は何故か何時も以上に酒場内が込んでいて、身内やそれに近い関係である彼らは客を優先させて外で飲むことにしたのだ。酒場内からは歓声が時折聞こえ、中が十分に盛り上がっていることを知らせて疎外感を煽つて来る。

そんな時、たわいない話をしていたナハトが不意に視線をずらして酒場の入り口へと目を向ける。つられて、双子もそれまでの会話を打ち切ってそちらを振り返った。

彼らの視線に気付かずに入ってしまったのは、茶色などの冴えない色の服ばかりを着た、一見浮浪者や酔っ払いにしか見えない男達。何やら早口で言葉を交わしながら、焦ったような素振を見せて次々と酒場に足を踏み入れていった。

「何あるか、アイツ等」

「随分と汚い……」

「きやあ ああああ ああ ああ ああ ああ あつ！
い、いやッ ああああ
あああああ ああ ああ ああ ああ ああ！！」

スピキオが感想を口に出した瞬間、賑やかだった酒場から聞こえてきたのはアデラの悲鳴で、酒場内が別の意味で賑やかになったというのを容易に想像させた。

*

*

*

「そう、僕。村の皆を殺したのは僕だよ」

白服の青年が求める答えを淡々と述べてみせるルネ。それは嘘偽り無い真実だった。

確かに村を滅ぼしたのはルネであり、村人達を皆殺しにしたのをルネだった。別に隠す気もないため、相手が知りたいのなら正直に答えるまでだった。その証拠に、フィル達ロード騎士団のメンバーにはクレタに来る過程で説明しているし、何も言わないがセインはいつものように全てを知っているだろう。

そんなルネに対して、白服の青年が表情を変えずに、しかし声には殺気を上乘せしえ発する。

「それでは姉さんを殺したのはお前だな」

ルネは僅かに首を傾げる。殺した村人の誰かの弟だろうか。しかしルネの記憶ではこんな男に会った事は無かったし、似た顔立ちをした女もいなかった。

思わず何の事、と呟きかけたルネは、自分の吐き出す息が白くなっている事に気づく。

一方の青年は、その僅かな沈黙を肯定と勘違いしたのか、身に纏う殺気を累増させていく。

「同じく、死をお前に与えてやる」

雪のように冷たい表情を浮かべて。

その姿で生を得た故に、奪われ、壊された双子

彼らは幸せだった。ずっと幸せだった。何一つ不自由なく、西洋人を父に持ち東洋人を母とする双子の少年達は幸せを味わっていた。もつとも、幸せだったと気付くのは後々の事で、少年達は恵まれた立場にあるという事を認識していなかった。ある日彼らは、いつも通り二人で遊んでいた。行き交う大人達の優しい笑みをその小さな体でめいいっぱい受け止めながら、少年達は無邪気にはしゃいでいた。だからこそ、だからこそ彼らは否応なしに巻き込まれてしまった。

駆け回る二人に、勢い良くぶつかってきた身体が二つ。それは少年達と同じくらいの年齢の少女達で、二人とも良く似通った顔つきをしていた。

双子だ、僕達と同じ

たったそれだけで、相手と仲良くなりたいたいと願うとても無邪気な少年達。

しかし、その笑顔と反比例するように少女達の顔は強張って行った。

何かを恐れるような顔に、少年達は頭の中に疑問符を浮かべる。そして、彼らは気付く。少女達は少年達を見ていないという事に。少年達の更に背後を見て、齒の根が合わない程に怯えているという事に。

少年達は彼女達の視線を追い、振り向いて――少年達は抱えていた幸せを全て落としてしまった。

――双子を捕まえて来いと言われたが、逃げたのはどちらだ？

—— さあな、両方捕まえれば良い話だ。

—— 違う、儲けも二倍だ。

少年達の背後にいたのは、街では見た事のない大人達だった。そして、その大人達の間で飛び交う会話も、少年達には全く理解できなかった。しかし、いやでも彼らは巻き込まれていった。共生的に、彼らは物事の道理を叩き込まれる。

つまり、彼らは売られた。

二組の双子を連れ去った大人達は奴隷商人ギルドで、彼らは奴隷として『売られた』のだった。しかも売られるまでの間、少年達は畜生にも劣る扱いを受け、あの無邪気さはすっかり成りを顰め、代わりに乾いた表情が瞳に浮かんでいた。

自分達の事しか考えられなくなった彼らを類を見ない高値で買ったのは、妙な語り口の男だった。男は少年達を買った直後に、鎖を解き傷の手当をしてくれた。何故、と口に出す前に、妙な男は楽しそうに言葉を紡いでいった。

—— 大切なものは失ってから気付くとは良く言ったものなのう。正に正論じゃ。しかし、それに気付いてから救われるまでが実に長い。

男は少年達の手を引いていった。それは奴隷として強引に、ではなく、村の人々から与えられていたような、とてもとても温かなものだった。

二話

「なあ、ルネ。あのイかれたシスコン野郎はお前の知り合いか？」

静かに殺意を煮えたぎらせているネジユを前に、フィルは尋ねる。しかし、尋ねてみるのはいいが、殺意を一方的に向けられているルネも首を傾げるばかりである。それでは、単なる相手の勘違いだろうか。だとすれば、これ程迷惑な話もない。どこかに行ってしまったストエカスとウインストン、イオリも戻ってこない。何かが、おかしい。自分の見えないところでも別の何かが蠢いているように感じる。

フィルはそう考え、息を整える。その吐く息も白く、周りの温度が異常な程に下がっているというのが解る。

そして冷気に混ざって、変な者までもフィル達の周りを取り囲んでいる。フィルが気付いたのを察したのである。その集団が出てきた。彼らを表すには『変』という言葉がぴったりだと感じさせた。現れたのは、頭から爪先までを黒く覆った集団。そして彼らは無言で――ナイフを構えて一斉に切りかかってくる。

「ハッ、挨拶もなしか。礼儀ってモンが無いのか、お前等は」

軽やかなステップを踏みながらフィルは紙一重で凶刃をかわし続け、時には相手の刃を捕まえて相手自身の喉を搔つ切らせる。さられた黒服は止めどなく溢れる血を必死で押さえようとするも、無駄に終わって失血で死ぬ。それに怯んだのか、動きが一瞬止まった黒服の一人も背骨を踵で砕き、開いた隙間から自分を囲む包囲網の外を見やった。そして、更に募ってきたその異常に気付いてしまう。

「ルネ？ どこに行った？」

ルネの姿は、フィルの目が届く限りの中にはどこにも無かった。そして、白いカッターシャツを着た、全てを雪で覆い隠したような青年も。

* * *

ルネが白い青年から受けた行動は、実に単純にして明快な物だった。フィルの注意が黒服の集団に向いている間に、白い青年の腕がルネの首へと絡みつき、その勢いで背後へと投げ飛ばしたのだ。尋常ではない速さと力により、ルネの身体は今もなお、空中を移動していた。

しかし、その状況の中でもルネは全くと言っていい程冷静さを欠いていなかった。一瞬とはいえ、潰されかけて窒息しそうになった喉を擦ってから、仰向けに仰け反るような形で自分の進行方向を見る。ここは森の中であり、何時木にぶつかってもおかしくはない状況で、今迄何とも無かったのが奇跡とも言える。

案の定、木の幹が迫っており、ルネは早々に気付けた事に安堵しながら、仰向けの状態から更に足を頭上に掲げ、半回転する。進行方向に向いた足が木の幹に着地し、撓めた足をすぐに伸ばして横へと跳躍する。

その直後、死を連想させる風斬り音と友に青年の白い手がルネのいた幹に突き刺さり、粉々に砕く。しかし、砕かれた木っ端は辺りに飛び散らず、また、中心部分が折れた木も地に倒れる事は無かった。

「凍っちゃった……の……？」

それは、異様な光景だった。木の幹を破壊した青年の右手を中心として、みるみるうちに木っ端や木そのものが凍り付いていく。散った木っ端は本体と氷でつながれ、地に落ちる事も周辺に飛び散る事もない。途中から折られ傾いだ木の幹も氷で根元と接着され、不自然な格好で固まっている。

上手く状況を飲み込めず沈黙するルネの視界の隅に、何か白くて小さな物がちらつく。不思議に思ってそちらを見ると、それは一粒の雪だった。そしてそれを皮切りに次から次へと降り、足場を泥だらけの不安定な物へと変化させていく。

「春なのに……暖かいのに。何で雪？」

疑問を口に出してみるが、その答えは誰かに出してもらうまでもない事だった。

この現象は。間違いなく目の前の白い青年が引き起こしたものだ。人間じゃない、とルネの心の内の何かが伝えてくる。こんな強大な力を操るためのベルヴェルグは人体には重過ぎる。かと言って、ヴェリエントと言った雰囲気もない。そんな臭いは感じられない。

白い青年が答えた内容は、ルネが感じた事に限りなく近かった。ただ違うのは、それがルネの予想を大きく上回っていた事。

「シルヴィア・ギルデンの作りし擬人型が一体、雪のネジユ。周りのこれは僕 능력。解った？」

突然出てきた母の名に、ルネは目を見開いた。

*

*

*

技術も何もなく、ただ単純に力任せに突き出された槍を、イオリは刀で受け流し中途半端に力がかかった槍の穂を踏みつける。それに引かれて体勢が前のめりになった男の無防備な腹を引ききる。切り口から血と共に男の腸が溢れ出てきて、力無く垂れ下がった。男が槍から手を離して何とか腸を元の場所に戻そうとするが、それが致命的な隙となり胴体と切り離された首が空高く舞い上がる。切り口の気管から喘鳴のような呼吸音が漏れて、男の身体が地に倒れ伏して周りに広がる汚物同然の死体の一つと成り果てた。

イオリはそれを興味なさそうに一瞥すると、次にかかってきた男のナイフを握る手首を斬り飛ばし、刀の勢いを緩めずにそのまま胸を貫く。肺を傷つけて心臓を貫通させたその刃を抜くと、男の口から血や小さな肉片が溢れ出してイオリの頬に飛ぶ。

それを汚らわしいと感じて、イオリは即座に手の甲で拭う。その行為は結果的に隙を生む事となり、こっそりとイオリの背後に忍び寄っていた男に槍を突き出させる事を許してしまった。

「——ッ!!」

男の槍の扱いが未熟だった事が幸いして、穂先が脇腹を掠める程度で済んだ。

しかし、相手の男はそれだけでも十分に満足だったらしく、薄汚れた顔を笑みの形に歪めて足を踏み鳴らす。

「ハッハア！ 様あ無えなあ、ローダ騎士団ともあ、ブッ、バア、アガガ……グ」

「……下賤な口を閉じろ豚野郎」

イオリの刃が男の口腔へと捻じ込まれていた。しかし、イオリはやってしまってから、これでは刀を男の唾液で汚れてしまうと後悔していた。しかも、口を閉じろと言っても、口の中に刃がある状態

では物理的に不可能である。

男が悲鳴を上げようとした時に舌が刀の刃で深く切られたらしく、残った舌がシヨックで縮まって喉を圧迫しているようで、窒息しかけている男が苦し紛れにがむしゃらに手にした槍を振り回す。子供のようなその攻撃は、男の味方であるはずの者達をも傷つけていた。それは男の一番近くにいたイオリも例外ではなく、むやみやたらに振り回されて先が読めない軌道を、刀を男の口に差し込んでいる状態では回避できなかった。そうした不都合のせいで――

――槍の刃がイオリの二の腕の部分に勢い良く。そして深く刺さった。

*

*

*

「何で？ 何でそこでその名前が出てくるの？」

ルネは自分と、ネジュと名乗った青年との関係を忘れて思わず問いかける。

シルヴィア。シルヴィア・ギルデン。ルネの母の名前。

ギルデンというのは苗字だろうか。だとすれば、ルネの苗字が今ここで明かされた事となる。

しかしそんな事はルネにとってはほんの些細な事で、今はただ、眼前にいるネジュの答えこそが最も重要だった。

母とネジュの関係は？ 自分とネジュの関係は？ 自分は何？

母は何？ ネジュは何？

そんな疑問が頭を擡げては消えていく。

「さっきも言ったよね。僕達は少し特殊な擬人型。そしてその僕達

を作ったのが、シルヴィア・ギルデン」

目の前の青年が擬人型だというのも、ルネには今一つ解せなかった。

感情の変化が薄い顔面だけを見ていれば確かに人形めいているが、『復讐』という目的を聞くと、非常に人間に近いように感じられる。サラの機械的な動きとは全く違い、ネジユの動きはとても滑らかで、運動能力や身体能力は騎士団のメンバーと比べても遜色ない。擬人型とは到底思えず、寧ろ人間そのものであった。

そんなルネの思考に気付いているのかいないのか、ネジユがカターシャツの釦に手をかけながら、淡白とも思える態度で自分の事を語っていく。

「僕達が擬人型だつていうのは本当だよ。ただ、少し特殊つてだけで……ほら、ね」

カターシャツの釦を二、三個外して、露わになったその下の胸板をルネに見せる。適度に鍛えられ引き締まった腹筋の上、丁度、鳩尾の辺りにあったのは、紛れもなくベルヴェルグだった。全体としては雪の結晶の様な六角形をしているが、もっと細かい視野で見ると、六角形を構成しているS字型を基本としたその紋様は、サラの物に似ていると言えば似ている。その下には小さな数字が幾つか並べられており、製造年月日を表していると思われる。

だが、ルネにはそんな事を考えている余裕は無かった。事実が衝撃となつて、彼の脳を揺さぶっていた。

見た事が、ある。

本で見た、だとか、夢で見た、とか、そういう事ではない。ルネは似た様な物をいつも見ていて、それは日常に違和感無しに溶け込んでいた。ルネは無知である。常に俗世から隔絶されてきた。彼はローダ騎士団に拾われるまで、ベルヴェルグという物をあまり見た

事が無かった。火起こしに使うような簡単な物と――

――重要な、彼にとってはとても重要な、命に関するそれを除いて。

*

*

*

瞳の奥に完全に恐怖を押し込めた男に支配された酒場の中。一見すれば浮浪者が酔っ払いにしか見えない男達の手握られ危険に晒されている命は、大切な大切なギルドのメンバーの物。

そんな状況で、セインは哀れな被害者の一つに目を落とした。サラが起き上がる事も喋る事すらもできないただの物と成り果ててしまっている。焼け焦げた胴体は腹の部分の損傷が一番酷い事から、彼女が侵入者に対して背中を見せて逃げる事をしなかったのだと予想できる。

「もしも『彼奴等』みたいに自我があつたら、お前も助かってたかもな」

絶望的な状況の中、橙色の瞳に悲しみの感情を浮かべた少年は、そんな事を呟いた。

*

*

*

思考の波に囚われて溺れかけているルネを眺めながら、ネジユが

自分のシャツの釦を留めていく。

「僕達が特殊だっていうのは、強い事だけじゃない」

ルネを更なる混乱の渦へ叩き込みまんとして言葉は紡がれていく。
ネジユの言葉は確かにルネの耳に届いていたが、今の彼にはその言葉を聞き入れて処理していくだけの余裕が無かった。

それを理解していてもなお、ネジユの言葉が発せられていく。

「自我があるんだよ」

ルネはその言葉に身体を緊張させる。

声をきっかけとして現実世界に無理矢理引きずり戻されて喘いでいるルネを確認してから、ネジユがもう一度同じ言葉を繰り返す。

「自我がある。ただ命令に従って動く人形は応用力が皆無な上に、命令する奴がいないと使えないから。対バリアント用擬人型として使うなら、自我があつた方が役に立つ」

大粒だった雪はいつの間にかサラサラとした小粒のそれへと変わっており、即ち周囲の温度が先程よりも更に低くなっているという事だった。

ルネは自分の体の感覚が鈍くなっていくのを感じながら、また思考の波に囚われてしまわないよう必死で目の前の白い青年の声に集中する。

それに呼応するようにネジユの声が先程よりも小さくなるが、圧縮されて密度が濃くなったようにルネを翻弄していく。

「ただの擬人型に自我を持たせる方法って知ってる？」

ネジユの顔は相変わらず無表情であつたが、声は囁きぐらいの大ききまで小さくなつていた。

「――創造主の『命』を与えれば、擬人型はその身に自我を宿す」

＊

＊

＊

「ッ！ ナハト！？ どうしたあるか！」

アデラの悲鳴が聞こえた直後すぐに駆け出そうとしたヴォットとスピキオだったが、自分達の背後から聞こえてきた、トサリ、という軽い音を聞いて慌てて振り返る。そこには意識を失つて倒れているナハトの姿があつた。揺さぶつて名前を呼んでも、反応はない。何故、と思う前に答えは双子の身体にも訪れた。

「――ッ、睡眠薬……」

目の前には転がって中身を路のタイルにぶちまけた酒瓶があつた。恐らくは、その酒の中に睡眠薬が盛られていたのだろう。

思考がまつさらになり、自分の意思とは関係なしに瞼の重みが増していく。無理矢理抉じ開けた視界はどうしようもなくぼやけて歪んでいる上に、だんだん狭くなつていく。歯を食い縛つて必死に耐えようとするも、薬の効果には勝てない。一体どれだけの量が盛られていたのだろうか、下手をすれば死ぬかもしれない。

感覚が遠のいていく耳が、複数の足音を拾う。

「どうなつた？」

「ああ、もう動かねえよ」

腹に鈍い痛み。緩慢になった思考では、蹴られたと気付くまで、時間を必要とした。解ってから、双子は理解する。

コイツ等は、自分達を『物』としか思っていないのだ、と。

*

*

*

撃つて、軌つて、貫いて、引き裂く。そんな作業の繰り返しで、少し開けたその場所は先程以上の血で溢れていた。もつとも、作業だと感じているのは数の割りに劣勢にある黒服の集団だけで、バリアント達にとつては食事、二つの勢力に挟まれるストエカスとウィンストンにとつては楽しい遊びの時間であつた。

だがそれはだんだんと崩れていく。

「ハハハッアー、フフ……アーアーアーあーあー……んん、あれ？あれれれ？」

この殺し合いという場所にそぐわない声を上げたのは、黒服の集団と相対するストエカス。所々に切り傷や内出血の痣が見受けられ、中には骨まで達しているだろうと思われる物もあるが、本人は至つて平然としている。

ウィンストンも同じような状態だったが、矢を指に挟み番えて発射するまでのスピードは全く衰えていない。

また、二人に見られるもう一つの共通点は、彼らの足下に幾つもの死体がある事である。

そんな中、ストエカスが考え込むような声を上げたのだった。

「あれ？ 飽きてきたかも。なんて言うか、マンネリ？ 新鮮さが

無くなってきた感じかな」

「ストエカス？」

突然動きを止めたストエカスの右肩に、チャンスとばかりに短剣が突き降ろされる。

そして、それに氣を取られたウィンストンの弓を構える左腕に、
一体の下位の小型のバリアントが噛み付いた。

*

*

*

命を？母さんの命の御陰で自我があるの？

命を分けたから、母さんは早くに死んだの？

——

さい頃に死んじゃったの？

僕が小

擬人型がバリアントと戦う為には自我が必要だから？

だから母さんは目の前のネジユっていう人に、

ネジユの仲間に、

ああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああ

僕に、
くれたの？

*

*

*

黒服の集団に囲まれるフィルは、自分の背筋が粟立つのを感じた。それは目の前にいる黒服の影響ではない。もっと別のところから、気配が大きく膨らんだのを感じ取ったからであった。

しかし、黒服達は攻撃の手を緩めようとしなない。単に気付いていないのか、それとも気付いていて故意に意識の外へと追い出しているのか。どちらにしろ、大きなその気配に反応して動きを止めてしまったのはフィルの方だった。

「——ルネ？」

思わずそう呟いたフィルの腹を、剣が貫通した。

*

*

*

——これは何、これは何！？

ネジユは脳内で同じ言葉を繰り返す。極度の焦りによって頭の回転が鈍くなり、自分がどう行動すべきか思いつかない。唯一、今のネジユに出来る行動といえば、目の前の生き物の動向をひたすら見る事だけだった。頭の中では警報が鳴り響き続け、全身の細胞が逃げろと悲鳴をあげている。

——まさか、ここまでとは……！？

珍しく顔面に激しい感情を走らせたネジユは叫ぶ。

「何故、竜が人間に……ッ！？」

愛しき人に世界を見せたいと願う者

男の恋人は、生まれつき手足が不自由だった。その代わり治療における妖術に非常に長けており、彼女はそんな自分を自嘲気味に藁って「他人を癒せる代償に、自分を癒せる力を失っているのよ」と言っていた。事実、その通りで、彼女は人を治す事はできても、自分を治す事は出来なかった。なかなか外にも出られなかった為、青白い肌をしていた彼女の願いは「自分の体で世界を見る事」ただそれだけだった。身体こそは病気がちであったものの、彼女の精神は芯の一本通った強かさを持ち、容姿もそれに見合う美麗さだった。男と彼女は、小さな村の隣同士に住んでいた。いわゆる幼馴染という存在であったが、知り合った当初は必要以上に構ってくる彼女を疎んでいた。

ある日、男が散歩でもしようと家の外に出た時、それは目に入ってきた。隣の家、嫌ってすらいいた彼女の家。その彼女の寝室の窓を通して見えたのは、不自由な身体を必死に動かして何とかして窓を開けようとする彼女の姿だった。思わず、危ないから止める、と怒声を上げた男に、彼女は気まずさの入り混じった複雑な微笑を浮かべ――窓を開こうと苦闘を続けた。

男は舌打ちをして、彼女の部屋に押し入った。迷わず彼女の寝室の扉を開け、窓枠の前に膝立ちにもなっていない姿勢でいる彼女を乱暴に後ろから抱き止め、代わりに自分の右腕を伸ばして窓を開けた。そして、座り込む彼女の体を抱き上げ、窓を外を見せてやる。何故こんなものが見たかったのかと問おうとして自分の腕の中にいる彼女を見下ろすと、彼女もまた、男の顔を呆けたように見上げていた。

男は疑問を口に出そうとして、そのまま固まってしまふ。

幼馴染である、その女の目からは、大粒の涙が零れ落ちていた。

恐らくその瞬間だったのだろう、男が彼女に惚れたのは。

男は一人前の妖術師になる為の勉強に励み、彼女に精巧な義手と義足を作った。そうして彼は、彼女に世界を見る為の力を与えていく。時には、自分で調合した薬を飲ませたりもした。無論、彼女に飲ませる前に毒見をしたりもした。

やがて彼らは一人の女兒を授かる。男が調合した薬が効いたのか、体の弱かった彼女が命の危険に晒される事は無かった。

子供を授かり、幸せに包まれていた二人。年月を経て、彼らは氣付いた。

——自分達が年を取っていないという事に

それだけではない、命の危機に瀕した事が無かった。出産は困難と言われていた彼女が無事に女兒を産めた事も、明らかな異常である。すぐに体が再生する訳ではない、全く傷つかない訳でもない。ただ、普通の傷と同じスピードで回復していき、決して死に至る事はない。優秀な妖術師である彼らはすぐに悟った。

自分達は不老不死になったのではない、常人よりも魂と体の結びつきが強くなっただけなのだ、と。例えば、人の一生を百までのバロメーターで表したとする。年を重ねる、もしくは怪我をしたり、病気がちになる事でそのバロメーターはだんだんと減っていく。そして、彼らのバロメーターは、何らかの作用によって百を大きく飛び越え、千にも万にも達していたのだ。

しかし、皮肉な事に、彼女の体が治る事は無かった。それが定めだと嘲笑うかのように。それでも、彼らは落胆する事は無かった。娘が大きくなり、子供を孕んだ頃、男はある決断をする。旅に出る、と。正確には、彼女に世界を見せてやる為の特別席を用意しよう、と。

そして男は娘の反対を押し切り、愛する妻だけの為の玉座の準備

を始める。玉座には組織の存在が必要だと、男は考えた。組織をつくるには、ある程度の人数がいる。そこで、男は将来有望そうな十にも満たぬ子供を集める事にした。

例えば、檻の中で大空を思う、翼をもがれた小鳥。

例えば、全ての事において意味を失った、虚ろな心の持ち主。

例えば、猟奇的な捕食者。

例えば、捕食者を肯定する配偶者。

例えば、その姿で生を得た故に奪われ、壊された双子。

男は集団の頂点に妻の名を置き、自身は副団長として収まった。そしてその組織は数十年でその名を大きく轟かせる事となる。

それこそが――

――ロード騎士団である。

二話

「おーおー、随分の躰のなっていない犬どもよのお？」

森の端にひっそりと佇む廃墟。その中に、時代がかった口調の嘲笑が響き渡る。唇を酷薄そうに歪め、大きく長い袖を振りながら、リムは優位に立った者の余裕を持って周りをゆっくりとねめまわした。

彼は円を描くように大量の黒服の男達に囲まれていた。いや、線の細い者も幾人が見受けられるから、女も少し混ざっているのかもしれない。しかし、どちらにしろ、リムにはどうでも良い事だった。

「儂はこの先の奴に用があるのだが。ふうむ、これは困った。儂が扱うのは主に『強化』と『変異』で、戦闘は専門外なのじゃが」

真意の読み取れない科白を次から次へと吐き、青紫色の瞳を閉じたりリム。隙だらけにも見えるその仕草だったが、リムという人物像を今一つ掴みきれていないのであろう黒服達は、誰一人としてかかつてこようとはしなかった。

それも計算のうちであるリムは、目を瞑ったまま首を何回か横に振る。

「お座なりな注意力じゃのう。中身は薬漬けの素人と見える」

再びリムの瞳が晒された時、口元にあった人を嘲るような冷笑は姿を消していた。そして笑みが消えた事で、今迄和らげられていた触れれば忽ち凍るような視線が包み隠されずに露わにされる。普段の飄々として掴みどころのないリムにしては珍しく、年を考えれば不気味にうら若い外見とあった表情を浮かべていた。

「俺もいい加減、いい年だからな。敵のアジトに一人で乗り込むような無鉄砲さは持ち合わせていない」

別人のような口調の言葉がリムの唇から発せられた瞬間、入り口付近にいた黒服の血霧が舞った。

*

*

*

日光を跳ね返す、金緑の鱗。まだ子供という事や不完全な存在という事もあってか、それ程強靱ではないのだろうが、それでも内臓を守る鎧としては十分な強度がありそうだった。

体色と比べるとやや金色が勝っている瞳は、瞳孔が縦に長く、見つめ続けているとともすれば引き込まれてしまいそうになる。

何もかもを一息に切り裂く事が可能であろう爪は、見る者に根強い恐怖を与える。強度と鋭さなら、爪と同様にずらりと並ぶ牙も上げられる。

竜。それがルネのもう一つの姿だった。

爬虫類のような顔と長い首、四足が支える胴体の背からは蝙蝠のような翼を生やし、その後ろには長くしなる尾を持ち合わせた竜。間違いない、とネジュは呟く。プルーの眼球や、人の屍から読み取れたベルヴェルグの波動が、確かにルネが変化した目の前の竜から感じ取れる。

ネジュはその姿を冷静に観察している自分に気付いた。シルヴィアから与えられた思考回路に異変が生じたのかと一瞬だけ逡巡する。確かに、尼まで竜とは何回も対峙してきた。その度に命を奪っている。だが、今回は話が別だ。人間がバリアントに変化した。否、それともバリアントが人間の皮を被っていたのだろうか。しかし、

ネジユはその二つをあつさりと否定したどちらかがもう一方に成りすましているのではない。この少年は、人間を竜の二面を同時に持ち合わせているのだらうと推測する、どちらも彼自身の姿、都合が良いように使い分けているのだらう。

しかし、何故そんな事が可能なのだらうか。何かその答えを示すものはないだらうかとネジユはルネの竜としても体を注視する。そして、彼は見つける事ができた。

「う、そ……何それ……」

今は四足になっている為解りづらいが、今の体勢だと心臓の真下、人間の姿だとネジユのベルヴェルグの上あたり、つまり体の前表面としては最も心臓に近い位置に『それ』はあった。

*

*

*

「さつきからだんまりを決め込みやがって。それとも、あれか？
本当はルーネ・ギルデンについての情報を持っていないのか？」

男が口ではそう言いながらも、そんなはずはないだらう、と確信しきつた目でセインを見上げてくる。一方のセインは、人質という汚く退屈な手段で迫ってくる男達に飽きて出てきた欠伸を、一応彼らを刺激しないように噛み殺す。それに気付いたルーファスが、非難めいた視線を送ってきた。

セインは、この男達にどんなに高く金を積まれても、下らない情報の一つも売らないだらう。それでも、自分が情報屋として舐められているという件については、むかつ腹が立った。一時の事とはいえ、自分の大切な部下が汚らしい手で人質に取られているという

借りもある事だから、意地の悪い仕返しをしてやろうと口端を吊り上げる。

「パーシー・モーリア三十七歳独身奴隷商人ギルド・カニンガルを裏切った首謀者両親は兄が一人名はロベール・モーリア四十歳同じく独身」

息継ぎを一切せずにセインの口からスラスラと出てきた情報に、

男——パーシーは全ての動きを完全に凍結させている。当たり前だ、普段パーシーは『ジャック・スミス』という在り来たりで当たり障りのない偽名を名乗っているし、その他の情報も決して外には漏れない、そして漏れてはいけない物なのだから。無論、セインはそれを知った上で口に出しているのだが。

セインはそれだけの反応では飽き足らず、更に続きを舌に乗せる。

「七年前『死』に怖気づいた兄と共に不死の妙を探し始める三年前リオネル・ギルデンにより組織を壊滅まで追いやられたものの戦闘用擬人型達と手を組みギリギリで建て直し兄がルーネ・ギルデンの捕獲に成功しかしバリアントの襲撃によってあえなく逃がした」
「だ、だ黙れえええうああああ！！」

パーシーが高く掲げたナイフを突き降ろそうとして——
途中で止める。なぜなら、彼の固く握り締めた拳の中には、ナイフそのものが無かったのだから。信じられないというように、パーシーが己の手の平を目の高さまで持ってきて見つめる。だが、その姿も一瞬のうちに消え失せた。

切り飛ぶ右手。それを成し遂げたのは、皮肉な事に先程まで確かに彼が握っていたナイフだった。一拍置いて、断面から勢い良く血が噴出してパーシーの顔面を赤黒く染め上げる。溶けた鉄を押し付けられたように顔を苦悶に歪めている。

体の一部を失う、そんな種類の痛みをセインは知っている。もう失った箇所は神経が繋がっていないというのに、そこに集中すれば普段通りに動くような気がして、その感覚が酷く不気味なのだ。セインは無意識に己の左目を押さえた。

「ぐああああううあああああッッッッ！！！」

痛みに耐え切れず左手で右手の断面の近くを巾着で閉めるように閉じて止血させようとするパーシーの腕の中から、アデラが転がり出る。

その小さな体を受け止めて後方の安全な場所まで後ろ向きのまま跳躍したのは、ユーグだった。流石、狩獵を得意とするアーバン族であるだけあって、左手一本でアデラを抱えたままでも危なげなくテーブルの上に軽やかに着地する。

パーシーが残りの人質であるポーレットとライリーに目を向ける。その慌てた仕草さえも、セインに取っては余興の一つとしか成り得なかった。

パーシーの合図で、ポーレット達の首に刃が侵入しようとする。しかし、それは二本の針によって阻まれた。一本目はナイフを握る男の親指の付け根、貫通してナイフで接着されている。二本目は、少し贈れて男の右目に突き刺さった。二本の針の餌食となった男は、苦しみにのた打ち回る。

「こっちに」

その声を聞いて、ポーレットが意識不明のライリーの腹の下に爪先を捻じ込み、足を跳ね上げる。ネルス族であるライリーの小さな体はメーディナ族の怪力によって宙に投げ飛ばされ、針を投げた人物達の下へと落ちていく。ポーレット自身もまた、男達の注意がライリーへとそれている隙に、現れた味方の足下へと転がり込んでい

た。

「うわー、きつそう、大丈夫あるか？」

「て、ててめえ……！！」

暢気な調子で縄を解いていく二人組みに、男達は目を剥いて叫ぶ。

「あの時、確かに眠って……！？」

「あの時は、ね」

行儀悪く人差し指を突きつけてくる男に、新たに現れた二人組み
——ヴォットとスピキオはカラリと笑う。銃砲やのあの余
裕はここから来ていたのかを、パーシーが痛みに堪えながらも呻く。
その証拠に、今はもうセインは出てくる欠伸を隠そうとしてもしていな
かった。欠伸の影響で滲んだ涙を人差し指の背で拭い、セインは男
に問いかける。

「さて、人質はいなくなっただぜ。どうする？」

「う、ぐ、だ誰か！グレードはネジユを呼んで来い！ いないのか、
いないなら、パゴーダでもグロームでもヴェルトでも呼んで来い！
！」

パーシーが半狂乱で次々と固有名詞を並び立てていく。もう誰も
自分で戦おうとはしない。戦闘由印ではないとはいえ、広く名を轟
かせるローダ騎士団が二人を前にして、素人同然の男達は尻込みし
ている。

それを見たセインは橙色の瞳に憐憫の情を浮かべた。

「一つ、教えておいてやろう。安心しろ、これはサービスだ」

サービスといいつつも、その情報は男達にとっては喜ばしくないものだと言明して、セインは続きを舌に乗せる。

「お前等が言ってるのは、自我がある戦闘用擬人型達の事だろ？
そいつ等はな——」

*

*

*

「え……擬人型……？」

ネジユの呟きは半分当たり、そして半分外れだった。前体表の一番心臓に近い部分にあったのは、奇妙な形をしたベルヴェルグであった。どこが奇妙なのかと言えば、それはそのベルヴェルグが左右非対称な点である。基本的に、ベルヴェルグは左右が線対称になっている。しかし、ルネのそれは右と左で全く違う種類の物だった。全体的に一つのベルヴェルグとしてまとまっていいるものに、中心ですっぱりと切り替わっている紋様は、犬の胴体に馬の首を無理矢理に接合させたような、激しい違和感を抱かせる。

ネジユから見て右にあるのは、竜のベルヴェルグ。竜のベルヴェルグは『支配』の力を持っていて、この力があるが故に竜は異形の王として君臨している。そして左にあるのはネジユも良く見慣れた

「——自我を持つ、戦闘用擬人型……」

*

*

*

イオリは無感動に、自分の左の二の腕に深々と突き刺さる槍を見下ろす。その槍の持ち主は既にイオリの手で始末されている。死体は口の中にあつた刀を横に薙がれて、口が大きく横に開いて笑っているようにも見える。ただし、状況と笑顔を彩る黒くなりかけた血のせいで、喜劇のようにはどう頑張っても見えない図だった。

横から襲い来る男を、右手一本で握った刀で心臓を一突きにしたまま、イオリは辛うじてぶら下がる左腕を見下ろしていた。もう、血や肉片が顔に飛んでも気にしていない。

「……」

イオリの放つ沈黙が圧力となって周りの男達をたちまちのうちに凍らせ、その場に足を縫いとめてしまう。

やがて、イオリは抜いた刀を足下のしたいに突き刺し、自由になった右手を指先が動かなくなった左腕に添える。

そして、顔色一つ変えずに、淡々とやってのけた。

「な、あ……うぶ、えげツ……」

男のうちの一人がその光景に耐え切れず、吐瀉物を撒き散らす。そこまで過敏に反応しなかった者達もイオリの行為に怖気を感じたのか、自身の体を掻き抱く。

——イオリは、皮一枚で辛うじて繋がっていた己の左腕を、何の躊躇いもなく千切りとって見せたのだ。

イオリはもぎ取った左腕を、少し離れた位置にある木の根元に置いてから、再び手に取った刀を完全に固まっている男達に向ける。

「ぶらぶらしたままだと、戦いの最中に邪魔になる。邪魔な物を捨てて何が悪い？ 吐く程の事ではないだろう」

イオリは大きく一步を踏み込む。

*

*

*

「痛え」

フィルは呟く。確かに、剣が貫通している腹はかなりの痛みをフィルの脳に訴えてくる。普通はその一言で済まされるような生半可な傷ではない事も理解している。そんな事は、幼児や畜生でも理解できるだろう。しかし、フィルはその傷にのたうちまわる様子もなく、自分の腹に突き刺さった剣を握る空路服の男の頭を掴んだ。

「痛えよ」

もう一度同じ言葉を繰り返し、フィルは掴んだ男の頭を自分の背後まで振り被る。あまりの勢いと力に、黒服の男の指は剣の柄から離れ、宙を掻く。

フィルは、今もまだ、剣が腹に突き刺さっているという事実を忘れさせる程の大声で叫んだ。

「誤りやがれえっ、コノヤロオオオオオ!!!」

生死をかけた戦いの中、少々理不尽な事を口に出しつつ、男の体を前方、宙高くへと投げ飛ばす。フィルの度が外れた怪力で、男の体は容易く吹き飛び、そして骨の折れる音を立てながら首から着地する。

地面ではない場所に。

「あ、悪い、イナバ」

黒服の男が落ちたのは地面ではなく、黒服集団の更に背後にいたイナバの背だった。首の骨を折って即死した男の体が、ゆっくりと息を吸い威嚇として体を膨らませていくイナバの背からずり落ちる。しかし、怒り心頭に達したイナバはそれを見向きもせず、元はか弱い小動物とは到底思えない雄雄しい咆哮を上げる。

「やつべえ、怒ってるぞ、どうしてくれる」

フィルはそう言いながら、左手で腹の剣を引き抜き、右手で近くにいた男の顔面を裏拳で叩き潰す。一瞬で頭部を吹き飛ばされ司令塔である脳を失った男が脳漿と血液を垂れ流しながら倒れこむ。その体を蹴り上げて、走りよってきた男新たな黒服を押しつぶし、フィルは困ったように首筋に手を置く。

「こりゃ、どっちかっていうと、黒服よりもイナバの方を相手にしなきゃだな」

*

*

*

たわめられた竜の首が、勢いをつけてこちらへと伸ばされる。その赤い口腔を見ながら、ネジュは自分の中で満たされていないかった場所が綺麗に埋まるのを感じていた。

—— 嗚呼、やっと……

三話

＊

＊

＊

「飽きたなら、チエンジするか？」

弓を構えた左腕に下位の小型のバリアントをぶら下げたままウインストンが背中合わせに提案すれば、やはり右肩にナイフを食い込ませたままのストエカスが顔を輝かせて振り返る。

「ウインストン！ それ、ナイスアイディア、流石！！」

「あまり褒められた気がしない」

「褒めてるよ？」

そのやりとりを合図として、二人とも右斜め後ろに歩を進めて、場所を百八十度入れ替える。その際に、ウインストンは限界まで引き絞った弓に番えた矢でストエカスの右肩をナイフで刺している男の眉間を至近距離で打ち抜き、一方のストエカスも鉄爪を閃かせてウインストンの左腕に噛み付くバリアントを両断していた。血液と混ざった薄桃色の脳漿を撒き散らしながら倒れた人間の死体と、分断された上半身と下半身から温かそうな蒸気を上げる内臓を零したバリアントの死体、二つの骸が地に落ちる音がやけに大きく響く。

「それじゃあ、改めて」

ストエカスが、無邪気な笑みを再び浮かべる。

「——楽しもうよ！！　ねえ、アハッ？」

*

*

*

情報はいくらあっても足りる事はない、かなり価値のある物だ。それを好意で与えてやっているのだから、感謝して欲しいものだ。セインは思う。たとえそれが、情報を受け取る側の人間にとって好ましくないものであったとしても。

「戦闘用擬人型の事だろ？ そいつ等はな——　ま、ぶつちやけた話、ルネの兄弟みたいなモンだ」

パーシーが驚きのあまり、阿呆丸出しの顔で口を開ける。つまりセインは、パーシー達は長らく獲物の兄弟達と行動を共にしていたと言っているのだ。

セインはこんな局面で嘘を吐くような事はしない。「限りなく嘘に近い噂話も情報の一つ」と言う者と「真実のみが情報と呼べる」と言う者がいるが、セインは後者にあてはまる。

セインは男の表情から強い驚愕を読み取り、満足して先を進める。

「あの戦闘用擬人型達は全員、ルネの母、シルヴィア・ギルデンの作だ。彼らはルネを守護する役目にある」

セインはだるそうに上げた左手の人差し指をパーシーに向かって突きつけてから、蜻蛉の目を回させようとするかのように、指先で円を描き始める。パーシーには体の左側面を向け、右手はカウンタ

―に頬杖をついている。見下した角度の顔の前で、オレンジ色の前髪がハラリと動く。

「手を組んでいたのは、ルネを探す為だけ。見つけたら、直ぐにお前達とは縁を切っちゃおうって訳だ……お前等は使われたんだよ、しかも使い捨てで」

*

*

*

耳の痛くなるような静寂。全ての動きが完全に止まっていた。

今にもネジユを飲み込もうとしていた、竜、もといルネさえも。

やがて、ルネはそろそろと首を戻す。ネジユには、一切の傷をつけないままに。

竜の体が解けていく。鱗が一枚一枚剥がれ、螺旋を描いて宙へ緑光の粒となって消えていく。牙や爪が縮み始め、小山のようだった体躯が元の大きさへと戻っていく。全ての変化が終わった後、竜が占めていた場所には、一糸纏わぬ姿の人間の姿のルネの小柄な体があった。先刻、人から竜へと変化した時に、膨張したルネの体に耐え切れず服が破けてしまった為、仕方のない事である。

ルネは静かな足取りで進む。

――その先には、ルネに向かって跪く、ネジユの姿があった。

*

*

*

冷たく見下ろすセインの瞳と、何かを懇願するようなパーシーの瞳がかち合う。

「彼奴等はもう、リオネル・ギルデンとは接触したみたいだからな…… お前等は三行半突きつけられたようなモンだ」
「た、助け……」

パーシーは一縷の望みをかけて、セインを見上げる。この男に、無力な人間を見逃してくれるだけの良心がある事を願って。

しかし、その幻想は一瞬の後に粉々に砕け散った。
パーシーは見てしまった、セインの唇が刻む、思いやりというものが欠片も感じ取れない笑みを。

「後の障害になると面倒だから、断る——————ヴオット、スピキオ」

首筋に、僅かな違和感。勘違いかと思ってしまっくらい些細なものであったが、直後、視界が異常に歪む。おそらくは、双子の持っていた針によるものだろう。針そのものにはそれ程の殺傷力はなさそうだったから、原因としては毒が塗ってあったか。

パーシーはそこで冷静に状況を分析している自分に気付いて、自嘲の笑みを浮かべる。自分もいよいよ、命根つきたという事だ。

そして、はたと思う。セインから与えられた自分自身の情報の中に、なぜか自分の知らない事があった。

——何度も話に出てきたリオネル・ギルデンとは、一体誰だ？

*

*

*

目の前には、頭部を半分を胴体にめり込ませもう半分を霧散させて、折れた鎖骨や肋骨を胸部から飛び出させ、辺りに汚らわしい血飛沫を飛ばしたロベールの死体があったが、グラードの意識は今はそのちらには向けられていなかった。

「リム・レムなんて、随分と変な偽名を使っているんだね。それに、喋り方も」

その言葉を聞いて、長い青紫色の髪を三つ編みにした男は、苦笑を浮かべる。

「けじめじゃよ、名も、口調もな」

「名前は最初の一文字しかかすってないし、名字なんて、元の欠片もないよ」

グラードの指摘に、リム・レム——もとい、本名をリオネル・ギルデンとする男が諦めたように首を振って、彼の方に向き直る。

首を軽く竦めて、常に飄々とした態度を崩さないリム・レムとしての顔でグラードに返答する。

「一文字でもかすっていれば、十分ではないか。あと、レムというのは、テオファーンの旧姓ぞ」

「あー、はいはい、お熱いね」

夫としてのノロケが出かかっているリムに対し、この手の話がありよく理解できないグラードは受け流そうと試みる。しかし、その精一杯の努力は悪い方向に働いたようで、リムは腰に手を当てて

完全にお説教モードに入ってしまった。顔に常に笑みを張っているグラードさえも、これには流石にげんなりとした表情を隠せない。

「何じゃ、その投げやりな調子は！ テオファー又はお前等の祖母にあたるというのに！」

「解ったから、早くプルーの体を回収して帰ろうね、お爺ちゃん」

プルーの体は良好のまま保存されているだろうか？ もしパーツが足りなかったら、直せないかもしれない。他の兄弟が荒れるのは少々面倒だから、ちゃんと揃っていればいいのだが。グラードはそんな事を考えながら、未だに何かを言い続けているリムと共に、プルーの体を探していた。

擬人型は、ベルヴェルグに大きな欠陥がない限り、何度でも修理する事ができる。ただし、壊れてから大分日にちが経っているから、完全に前のように直す事は出来ないだろう。調子を取り戻すには、それなりの時間がかかるはずだ。

廃墟の部屋を一つ一つ見て回る。その時に黒服の死体の顔を見て、グラードは僅かに眉をしかめる。

何故これが、と。

*

*

*

イナバの隣にあちこちが痛む自分の体を横たえて、メーディナ族特有の紅い目を僅かに細める。メーディナ族の瞳が紅いのは、色素を持たない為、血管を流れる血液の色が透けて見えるからである。色素を持たないという事は、紫外線から瞳を守る事が出来ないという事で、季節はずれの雪が止んでから顔を出した太陽は、フィルにとっては少々眩しかった。雪が大気中の塵や埃を洗い流してしまっ

た後だから、尚更の事である。雲一つ無くなった綺麗な蒼穹を、フィルは眺める。あの空を、自由に飛びたい。檻を抜け出した自分は、その願いを叶えられているのだろうか。フィルは手袋を脱いだ手を、青空に翳す。光に透かされた指先が紅い、これは血の色、生きている証。大丈夫、ちゃんと生きている。

「何をしている？ 地面と同化したいと言っなら、手伝ってやろうか？」

不意に声が落とされた。フィルと並んで丸くなって目を閉じていたイナバの耳が立って、周りの音を沢山拾う為に外側に向けられる。声の主が日の光を遮って、寝ているフィルの顔を見下ろす。赤い組紐で一つに纏めた長い黒髪を微風に遊ばせているのは、イオリだった。相変わらず辛辣な言葉だと、フィルは苦笑する。

「お前の方も満身創痍だな。つか、何だよ、その左腕。幾ら生きるのに興味がない、つつたって、それはヤバいだろ」

二の腕の半場で千切られたイオリの腕を見て、フィルはぎよつとした。戦闘の最中に失ったのかとも思ったのだが、千切れた部位が右手に握られているのを見て安心する。欠けずになれば、リムがまた再生させてくれる。イオリもそれを理解しているから、持つてきているのだろう。

フィルの視線を辿って、イオリが自身の左腕を見下ろす。その様子はどこまでも無頓着だった。

「止血はしてあるみたいだな」

「火起こしのベルヴェルグがあったから、断面を焼いた……止血が必要なのは、俺よりもお前だろう」

「んー、まあ、な」

齒切れの悪い返事に、イオリの眉がしかめられた。人が折角心配してやっているのに、と言わんばかりの顔だ。

確かに、剣が貫通したフィルの腹からは、僅かではあるが未だに血が滲み出ている。横に斬られていなくて良かった、とフィルは口には出さずに呟く。そんな事をされていれば、腹圧で溢れ落ちる腸だとか、自分ではあまり見たくない物との対面を果たしていただろう。

「イオリ、悪いが、手を貸してくれ。一人じゃ起きられない」
「ん」

イオリの行動に、フィルは暫しの間、沈黙する。

差し出されたのは、左腕だった。本体と切り離された左腕の肘の部分を手で持ち、フィルに突き出している。実に滑稽な形ではあるが、やっている本人は疑問を感じていないらしく、真面目な顔で左手を突きだしている。

「……ま、いつか。確かに手ではある」

フィルはイオリの左手を掴み、それを支えにして立ち上がる。握った指は蠟のような手触りで、死体のように冷たかった。未だ収まらぬ腹部の熱を押さえながら、フィルは思う。

例え今は飛べなくとも、生きていれば飛ぶ事ぐらい簡単だ。自分は今もう、檻の中の小鳥ではないのだから、と。

*

*

*

「お主の命期はどうやら今日のようにゃの」

リムは廃墟の一番奥の部屋の隅でみつともなく震えている男――
――ロベール・モーリアに向かつて声をかけた。ロベールの傍らには、安物の葡萄酒の空瓶が幾つも転がっていた。これでは、悪酔いするだろう。

ロベールの視線がリムに向けられ、その背後に立つ男の姿を捉える。

その男が誰なのか解った途端、ロベールが情けない悲鳴を上げて涙と鼻水と涎を垂らす。

「妹が……ブルーが世話になったみたいだね、ロベール」

リムの背後から現れたのは、感情の全く感じられない表面だけの笑顔を浮かべたグライドだった。

「ブルーを殺したのは、ルネじゃなくてお前だよな？　ヴェリエントと対峙するあの子を、後ろから刺した」

「と、いう事じゃ、ロベール。お前は調子に乗り過ぎた。『竜の心臓からは不死の妙薬が調合できる』だと？　ふざけるな」

「リ、リム・レム……だが、お前は現に……」

青紫色の瞳を冷徹に細める。ロベールの戯言など、全く聞く価値がない。愚かしさに苛立ちが募るばかりである。

グライドもそう感じたのか、右手を掲げ、指揮をするように指を優雅で滑らかな動きで横に薙ぐ。突如。

轟音。土煙と廃墟に溜まった埃が濛々て舞い、煙幕のように視界を奪っていく。リムは思わず、肺を保護する為に長い袖で口元を押さえた。

天井を易々と貫いてロベールの頭上に落下したのは、拳大の氷玉。

意外にも、硬い氷玉は遙か上空、雲から落とされるだけで石の厚い壁を貫き、防御を紙屑同然とかせる威力を持つ。土煙でよく見えな
いが、そんな物をまともに食らったロベールは生身の人間であるの
だから、生きているはずもない。

「流石は、電のグライドじゃな。孫達に手を出した代償は高くつい
たぞ、ロベール」

その光景に、リムは爽快感を覚えて笑った。

* * *

上機嫌に鼻歌を披露するストエカスと、黙ってそれに聞き入るウ
インストンが、血の匂いを身体中にまわりつかせたまま、二人と
一匹の足跡が残る獣道を辿っていく。

「あんなに大漁だったのは久しぶりだね、凄く楽しかったよ」

「良かったな、お前が満足したなら、私はそれを肯定しよう」

血に狂った会話をしながら、二人は歩く。体の傷は、ウインストン
の手によって適切な応急処置がなされていた。ストエカスは最初は
面倒だと渋ったのだが、化膿すれば狩りどころではないとウインス
トンに諭され、仕方なしに右肩を差し出したのだった。
突然ストエカスが鼻歌を止め、考え込むような仕草をする。

「そういえばさ、ルネは半分バリアントなんだよね？ しかも、竜
「そうだな」

「もしさ、僕がルネの事を狩っちゃったら、ウインストンはどう思

う？」

竜、と強調したのは、ストエカスの最初の獲物が竜だったからだろ。片目を抉っただけで、仕留めるには至らなかったが。その竜には、ウィンストンも思う所がある。二人が出会った時の、強烈なものが。

ウィンストンは間髪入れずに返す。

「駄目だな、それは美しくない。ルネは味方だ。味方を殺すのは、汚らしい三下のような」

「だよねえ！ ウィンストンならそう言ってくれると思った！」

ストエカスが、無邪気な微笑みを浮かべる。ウィンストンの答えに、大いに満足したようだった。

*

*

*

客達は、大半がもう逃げ帰った。そうではない者や野次馬も、ルーファスが追い返している。

「あーあ、人の店、好き勝手に荒らしやがって」

「セイン、パーシー某の残党、生きてる奴等は持つていってもいいあるか？」

ヴォットが、場から激しく逸脱した朗らかな笑顔で問ってくる。酒場をぼろぼろにさるたセインの苦悩は、全く気にしていない様子だった。

足の折れた椅子やテーブル、それに割れたグラスと酒瓶が散乱し

ていて、仮設酒場の壁は所々が抜けている。後片付けには、最低でも丸一日はかかりそうだった。

といっても、この状態にしたのは半分程がスピキオの責任である。彼ら双子はローダ騎士団の戦闘要員ではない。兄のヴォットは拷問吏、弟のスピキオは暗殺者の役割をそれぞれ持っている。酒場の惨状は、縦横無尽に跳ね回り後ろを取っては速やかに命を奪っていくスピキオを怖れたパーシーの部下達が、やたらめったらに武器を振り回した結果である。そしてヴォットが、途中で気絶したため標的にもならなかった生き残りを持っていこうとしているのは、これから拷問にかけるつもりだからだろう。

彼らはその役割故に、毒物を扱う事もある。だから、万一の時にまずぐに対応できるように、ちよつとした耐性があるのだろう。大量に混入されたとはいえ、たかが睡眠薬ごとき、短時間で分解できるという訳だった。

スピキオが残党達の脈拍を測る兄を手伝いながら、こめかみに手を当てるセインに顔を向ける。

「こいつ等は奴隷商人ギルド・カニンガルを裏切ったと言っていたあるな。あれは大分前に消えたと思っていたが？」

「ん？ ああ……聞いてたのか」

先程とは打って変わった真面目な顔を見て、そういえばこの双子は奴隷商人ギルドが嫌いなのだったと、今更ながらに思い出す。

「パーシーは裏切る前に、当時団長だったスコット・カニンガルを殺した。その後に、奴の息子のエリック・カニンガルが立て直したんだよ。今は……十七歳だったかな。俺と同じくらいだ。メンバーは団長のエリック、ベス・リチエット、ペネロピ・プロクターの三人だけだ——潰したいか？」

その言葉を聞いたスピキオが黙り込んでしまう。脈を計っていたヴオットの作業の手も、弟と同じように止まってしまっている。同じ造形の二つの顔からは表情と呼べる物が全て消え失せ、作り物めいた無表情だけが後に取り残されていた。

些か踏み込みすぎた事を言ってしまったから、セインは地雷だったかと冷や汗を浮かべる。もしもヴオットとスピキオが怒り等の感情のままに手当たり次第に暴れ散らせば、とてもこちらの手には負えない。ローダ騎士団のメンバーである双子は、戦闘要員ではなくとも能力は果てしなく高い。素人とはいえそれなりに力を持つ大の男達を相手にして、たったの数分で全員を伸ばしてしまったのだ。足止めできるのはせいぜいユーグと、少しだけならポーレット、といった程度である。

しかし良かった事に、頭の中で様々な逃走経路を思い描いて低回していたセインの心配も杞憂に終わった。数分前に聞いた言葉など耳に入っていないとでもいうように、途中で中断された作業を変わらぬ手早さで再開する。

「それは、エリックとかいう奴による。潰したいという願望は無いが、苦しめばいいと思うある」

「エリックが善人だったとしても、一般人を奴隷に下らせるという行為自体が生者に対しての冒瀆ある」

それは決して断罪ではなかった。かといって、反対に免罪でもない。純粹な恨み、たったそれだけがそこにあつた。それだけではあるが、それ故に暗く、重い。かつて死を覚悟させる程の苦痛を与えられた恨み、自分達に似た二人を深く傷付けた恨み。だが、それはエリック達が直接彼らに手を出したのではなく、『奴隷商人ギルド』という括りの中にエリック達が身を置いているだけなのである。だから、彼らの中に恨みという感情しかなくとも、それは薄く、そして揺れ動いている。つまりは、完全にエリック達を恨みきれていな

いのだ。

精神的な傷は、他人にはとても計り知れない。ましてや、それが理性と反発するようなものであれば、尚更である。自分でもよく理解出来ぬ事柄を他人に理解しろというのも酷な話であって、仮に相手が理解したような素振りをしたとしても、それはあくまで振りでしかない。余計な口を知ったようないい加減な態度で挟めば、逆に相手を苛立たせ、最悪の場合、何らかの一線を越えさせてしまう事もある。

だからセインは、そうかと一言呟いて目を閉じた。

*

*

*

イオリは丸くなって規則正しい呼吸を繰り返すイナバの背に寄りかかり温かさや毛の柔らかさ等の心地よさを甘受しながら、隣に座るフィルを一瞥する。フィルは今、上半身裸になってせつせと腹部の傷の止血に勤しんでいた。銀髪を持つ事から推測するに、身体に纏う色素が元々薄いのだろう、引き締まった体は男にしては白い肌をしている。ウィンストンと良い勝負だろうか。その肌に固まった血がこびりつき、白さの上に赤黒さが映えて見えた。

何故だろう、とイオリは疑問に思う。口にこそ出してはいないが、何回も自分の内で反芻した疑問だ。何故、フィルは生きようとしているのだろう。生きようとしているだけではない、生きてその先に彼は望みを持っている。イオリにとっての止血は、この方が今の場合には都合が良いだろう、という判断によるものだ。フィルとは悲しい事に全く違う。大きな理由に、フィルの方は生きたいと願う訳がある、という物がある。それが無いイオリは、生死さえも単なる出来事として片付けてしまう。フィルに限らず、ロード騎士団のメンバー、更にはギルド・ヴォーリヤの団員の殆どが生死のどちら

か一方を選ぶ根拠になる理由を持っている。それがイオリにとって不思議であり同時に妬ましくもあったが、後者の感情はそれを抱く当人も良く理解していない微細なものだった。

「おーい！ やっほー、元気ー？」

底抜けに明るい声がした方に目をやれば、満面の笑みで腕を振り回すストエカスと、その隣で小さく手を振るウィンストンの姿が見えた。

どうやら向こうもそれなりに何かあったようで、満身創痍である。しかし二人とも嫌な顔は一切せず、寧ろ満たされたような表情をしていた。特にストエカスの方は顕著で、決して軽くない怪我をしているというのに足取りは軽く、鼻歌などを披露している。

そんな二人の目がイオリの左腕に釘付けになる。

「イオリ、それは元通りになるのだろうか？」

「さあ？」

自分でも、にべもない返事になってしまったとは思っ。しかし他に言葉を考えるとと言われると、これ以外にも思い付かないのも事実だった。自分は人とのコミュニケーション能力が低いのかもしれない、とイオリは考える。ないよりはある方が便利なのだろうか。自分には必要がない気もする。おそらくあっても持て余すだろう。

ようやく止血を終えたらしいフィルが、Yシャツに腕を通しながら立ち上がる。

「ところで、ルネはどこに行ったんだ？」

「ああ、ルネならここに来る途中で見かけたよ？」

事も無げに笑顔で言うストエカス。隣のウィンストンが否定しな

いところを見ると、どうやら本当にルネを見かけたらしい。見たのなら連れて来ればいいのに、とイオリでさえも思う。

イオリでそうなのだから、フィルはその倍以上の反応を示すに決まっている。現状ではルネの保護者的立場にある彼が、目を剥く。

「何で放っておいた！？ まさか、まだ戦ってたとか言っんじゃないだろうな」

「もしそうだったら、喜んで参加してるよ」

「だが、取り込み中のようなだった。先に村に向かっていての方がいいだろう」

意味が分からない。イオリはそう思ったが、面倒だったため口にはせずに黙っていた。そもそも途中で抜けたので状況がよく把握できていない事があるし、ルネならば自分達が手を出さずとも何とかするだろうと、口を閉ざしてイナバの柔らかな頭に手を置いた。ルネならば、ナイフさえもいらなかもしれない。それでもリムがそれを持たせたのは、何か理由があったのだろうか。イオリはそれを考えようとして――止めた。意味を考えるなど、これほど自分には一番似合わない事はないのだ。

イオリは動き出したイナバに鼻先で急かされ、歩みを始めた。

*

*

*

「よもや、ルーネ・ギルデン様とは知らず、御無礼の程をお許し戴きたい」

「え？ ああ、別にいいよ、そんなの。様とか、止めてよう」

先刻までの殺意が嘘であったかのような態度で頭を下げるネジユ

に対し、ルネはあつけらかんと手を振る。驚きはしたものの、大した怪我もしていないため、誤られる程も気にしてはいない。むしろ、何があつかのかはよく分からないが誤解を生むような行動を取った自分にも非があると思っていた。

ルネは今、ネジユのカッターシャツを貸してもらっている。しかし、高くはないが成人男性の平均近くの身長を持つネジユに対し、ルネの方は頭一つ弱ぐらい小さいため、悲しい事にぶかぶかである。下の方も隠れる、という点では便利ではあるのだが。手を振る度にヒラヒラと揺れる袖を見てリムのようだと軽く失笑してから、ふとネジユの方は寒くないのかと思い、横目で彼を窺う。が、心配には全く及ばないようだった。擬人型である彼にとってこれは特に気になる事でもないらしく、至って平然としていり。それに、例えば彼が擬人型ではなかったとしても、日の出てきた今は風も暖かい為に酷い寒さを感じないだろう。だから、全くの杞憂だったのである。唯一つ、問題があるとすれば、ネジユの鳩尾の辺りにあるベルヴェルグが露になってしまっているという点だろうか。引き締まっているものの、全体としては細く白いネジユの上半身の中心に据えられたベルヴェルグは、よく目立つ。これでは、人混みの中には入られないだろう。周りから変に浮いてしまい、好意的な視線を向けられる事は先ず無いだろうから。そう、かつてのルネのように

ルネの視線に気付いたのか、ネジユが静かな目でこちらを見返してくる。

「僕達は造られてすぐにシルヴィアとはぐれてしまってルーネさ……ルーネと会う機会が無かったから、ベルヴェルグの波形を知らなかった。かなり無謀だった」

「はあ……なるほど」

と言いつつもあまり良く理解できていなかった。最初の一言だけでは相槌として剩りにも味気無さ過ぎると思い、慌てて付け足した

結果が「なるほど」という言葉なのだった。

ネジユ達は母、シルヴィアの造った擬人型なのだと言う。ならば、これは兄弟の感動の再会と読んでも良いのだろうか。ルネが悩んでいると、ネジユが歩み始める。方向からすると、フィル達と落ち合う為だろう。置いていかれては困る、と思いルネもその後を追う。

「僕達は全部で六体、行方不明の個体も合わせれば七体いる。最初に作られたのは、霧のニエブラ。次が、雹のグラード。それに続いて雨のブルー、青い髪と目をした給士服の」

「ああ、あの人が！」

そういえば、そんな人物と飛行艇内部で会った。彼女はルネにとつての命の恩人だ。ネジユの話を聞いていると、どうやら死んでしまったのだらうと推測できる。できれば彼女が生きているうちにもう一度会いたかったと、ルネは軽く唇を引き結ぶ。

そういえば、ブルーもルネが『ルーネ・ギルデン』であるという事に気付いていない様子だった。比較的最初に造られた彼女もルネのベルヴェルグの波動とやらを知らなかったという事が。

「次が、晴のパゴダ。それから、雷のグローム。次に、曇のヴェルト。最後に僕、雪のネジユ。この中行方不明になってるのが、霧のニエブラ。僕もグラ兄……グラード兄さんから聞いたただけから詳しくは知らないけど——」

ネジユが言葉を探すように、一旦、口をつぐむ。

「——不良品だったとか。完成した途端に消えてしまったらしい」

「……あの人」

何故、消えてしまったのか。そう問おうとしてルネは隣に行くネジユの顔を見上げたが、彼も口を閉ざしている事から知らないのだろうと察して、喉元まで出てきた不毛な質問を止める。

代わりに、努めて明るい声で質問の内容を切り替えた。

「あのさ、皆と会えるかな？」

ルネの問いに、ネジユが淡い微笑を浮かべる。

こるは彼をよく知る人が見れば、天変地異の前触れかとも思ってしまうくらいの大事ななのであるが、もちろん、ついさっき初めて会ったルネはそんな事は知らない。

「今すぐ会えるのは、グラ兄だけ。他の四人は、夏ぐらいまで待たないと無理かも」

「四人？」

「そう、四人」

その言葉に、ルネは指を折って人数を数える。パゴーダとグロームとヴェルト、これで三人。ネジユはもう会っているし、グレードはこらすぐに会えるという事なので除外。ニエブラは行方不明なので、元より選択肢には入っていない。となると、残りはブルーだけ。

「んんう？」

話が掴めない。ルネは首を傾げて唸った。

*

*

*

ブルーの残骸を全て回収し、グライドとリムはクレタへと戻る道を歩いていた。

グライドは手に持っていたものを、親指で弾いて真上へと飛ばす。やがて重力にしたがって落ちてきた『それ』を、横から拐うようにしてキャッチした。その行為を不思議そうに見つめてきたリムに、手の中にある『それ』を投げ渡す。

リムが長い袖の中から手を出して掴み取り、受け取った『それ』をまじまじと見つめてから苦笑した。

「なんじゃ、死人から決り取ってきたのか？ 親に似て、やる事が大胆だのう」

リムが人差し指と親指で『それ』を摘まんで、仮面に隠れていない右目を眇めて見つめ合う。

『それ』の正体とは、荒つぱく視神経の筆り取られた眼球だった。虹彩によく目立つ橙の色を持つ、目玉だった。

グライドは普段から浮かべている笑みの形を忌々しげに歪めて、全く別の場所で見えた覚えのある色彩を指差す。

「その目、クレタで同じような物を見たんだよ。彼奴は何？ 僕の知識の中にも、あんなのは存在しないんだけど」

クレタで遭遇した、鮮やかな橙色の髪と瞳を持つ少年。笑みを浮かべて眼球を眺めるリムを見ると、どうやら敵ではない様子なのだが、未知の存在と出会った感覚はどうにも気味が悪く、今もまだグライドの内に蟠っている。

しかし、今リムが持っているその目玉はクレタにいた少年からではなく、おどおどとした表情が似合いそうな、操縦士と思われる男の眼窩から決り出した物だった。更に言えば、その男の左目は橙色をしていたものの、右目は至って普通の青だった。

「さあ？ 本人に聞けばいいのではないか？ 儂も詳しくは知らないのう」

「……嘘」

飄々と囁くリムから目玉を取り返し、グラードはまた親指で弾いてはキャッチ、弾いてはキャッチを繰り返す。橙色が回転しながら上下に動く様を何の気なしに見つめていると、リムが肩を震わせて笑う。

「それは、フフッ、仕返しのもりか？」

「は？ 何の事？」

それでも目玉を弾くのを止めずに、グラードはリムに問いかける。しかし、リムは笑うばかりで何も答えてはくれなかった。

*

*

*

「ううう……うえ」

後片付けに追われている酒場店内で、セインは奇跡的に無事であったカウンターテーブルに突っ伏して頭を抱えていた。そうしてずっと低い音で唸り、時々、体を震わせる事を繰り返している。片付けに参加しないと言うよりも、参加できないのであった。

それに対して見るに見かねたユーグが、彼を就寝用の仮設テントに連れていこうと抱き上げる。珍しく文句の一つも言わず、されるが儘になっているセインの蒼白な顔を、流石に心配したルーファスが覗き込んできた。

「あんにやる……俺の目に何してくれやがる……うぎえ……」
「ああ、そういう事ですか。理解しましたよ」

食い縛った歯の間から押し出した言葉から、ルーファスが状況を的確に読み取って頷く。

ユーグの足元にいるアデラがセインに気の毒そうな視線を向けてくる。年下にまで心配される謂れはないと愚痴を言いかけたが、アデラの目に浮かんでいる情は本物だったので、寸での所でそれを飲み込む。

普段は罵りのような軽口を叩き合ってはいても、このギルドは一人でも欠ければ崩れてしまう。互いに互いを支え合うなどという生半可なものではなく、少しでもバランスが崩れてしまうと粉々に砕け散るほど依存してしまっているという、最悪の構図がこのギルドの中では出来ている。崩れ具合は、中心であるセインが抜けてしまえば悲惨なものとなるだろう。そうなるように差し向けたのも、セイン自身ではあるのだが。

トントンと規則的に背中を軽く叩いてくれるユーグの手が、今はとてもありがたい。子供扱いするな、などと言っている余裕はない。

「リムも……何が『詳しくは知らん』……だよ……てめえが一番、知ってるくせに……」

遙か遠くでされたばかりの会話に愚痴を垂れ、セインは目眩から逃れるために眉を顰めて目を閉じた。

*

*

*

――二週間前。

ルネは村中を走り回っていた、否、逃げ回っていた。正真正銘、命をかけた鬼ごっこ。逃げているのはバリアント。追いかけているのは村人。通常とは、立場が逆転した鬼ごっこ。

村人達は、全員が手に手に斧や鍬を持っていた。使い方次第では、農具のそれも頭をかち割る立派な武器になる。

村人は怖れを抱いていた。いつか竜が空腹と欲求を満たす為に、自分達を喰らってしまうのではないだろうか。

ルネも恐れを抱いていた。今までも冷たかったとはいえ、村人達が直接的な行動を起こすのは初めてだったから。

――互いに、正当防衛だったのだ。

――勝ったのは鬼。負けたのは人間。その結果が、この村で起こった事の全てだった。

脈々と受け継がれる血と命、そして力

シルヴィア・ギルデンの人生は、正に波瀾万丈と呼ぶべき物だった。そしてまた、多くの謎を残した。

始まりは、ルネを妊娠した頃からであろう。シルヴィアと竜の間にできた、ハーフの子供。いつ、どうやって出来たのかはテオファ―よりもリオネルも知らず、ただ、本人達しか知り得ない事である。人間とバリアント、二つの相対する存在。それでも、一人と一体の間には、確実に愛と呼べるものがあつた。

異端というのは、周りから忌み嫌われるものだ。彼女達もまた、例に漏れなかった。竜達はシルヴィアの夫を「裏切り者」と呼ばわり、ついにはテオファ―又とシルヴィアの夫を殺してしまうまでに憤った。死体は酷いものだった。二人とも「簡単には死なない体」だったため、何度も何度も傷つけられ、さまいにはシルヴィアにも判別が難しい肉塊となっていた。

シルヴィアはどうしようもなく深い悲しみにくれた。自分と腹の子を護ってくれる存在はもういないのだと、悟った。それどころか敵が増え、果ては奇妙な宗教団体まで腹の子を要求してくる始末。そしてシルヴィアは自分達を護る為に、天才と呼ばれる所以、比類なきサラブレッドとしての妖術師の力を余すところ無く発揮し、最高傑作達を造り出す。

それは、彼らの為の自我としてシルヴィア自身の命を分け与えた、擬人型達。

母と夫の死体が見つかったのは、深い深い霧のかかる朝だった。シルヴィアは、一体の少女の姿をした、対人を考慮した対バリアント用擬人型を造った。

一体目は、霧の二エブラ。

ただし、これはその名の通り、完成した途端に霧散して消えてし

まった。シルヴィアは、対人用と対バリアント用の二つの能力を組み込んだ事によって存在が不安定になったからだ、と判断した。

寒くなった大気を切り裂くように降ってくる氷の粒。墓に当たり、硬い音を響かせた。シルヴィアは、一体の青年の姿をした対バリアント用擬人型を造った。

二体目は、電のグラード。

温かくなり、氷は溶けて水に変わり、水滴へと変化した。それはまるで、追悼の涙のようであった。シルヴィアは、一体の女の姿をした対バリアント用擬人型を造った。

三体目は、雨のプルー。

温かくなっていたのは、漸く出てきた太陽のおかげだった。悲しみは晴れるのだろうか。シルヴィアは、一体の青年の姿をした対バリアント用擬人型を造った。

四体目は、晴のパゴダ。

晴れ間は何時まで続く訳ではない。重く天から響く光と音が、不吉を知らせる。人間の追っ手もバリアントの追っ手も、どんどん右肩上がりになっていった。シルヴィアは、一体の青年の姿をした対バリアント用擬人型を造った。

五体目は、雷のグローム。

雷がすぎ、後には厚く被さる暗雲。精神的に追い込まれ、夢だけでなく、幻覚として二人の姿を見てしまうようになった。シルヴィアは、一体の青年の姿をした対バリアント用擬人型を造った。

六体目は、曇のヴェルト。

気温が急に下がり、小さな氷の結晶が舞い始めた。白くちらつく

それに紛れ、青年の姿をした七体目を完成させたシルヴィアは、造った擬人型達にしめいだけを与えて、腹の子と共に姿を眩ました。七体目は、雪のネジユ。

シルヴィアと竜は、何故、愛し合うようになったのか。

ルネはどうやって出来たのか、何故、擬人型としてのベルヴェルグが半分だけあるのか。

シルヴィアは何故、ルネに「神秘^{ルネ}」という名を与えたのか。

ルネを狙った宗教団体は、何を目的としていたのか。

ニエブラは、何処に消えたのか。

シルヴィアは何処に消えたのか。

謎が、全て解ける時は来るのだろうか。

脈々と受け継がれる血と命、そして力（後書き）

あれ……ルネの出生がどこかに行っちゃいましたね……。

たぶん、次話が、またその次で出すと思います……たぶん。

二話

「実を言うと、僕は実はほんの少しだけ怖い」

リムの口から紡がれた言葉にグラードは何事かと思い、眼球を弄る手と歩く足を止め、そちらを見やる。

それに気付いたリムがグラードより僅かに歩を進め、やはり立ち止まる。リムの長い髪についた鈴が、彼の背中に当たって軽やかな音を奏でる。

「ルネの事についてな、少しばかり不安での」

「それは、どういう意味なのさ」

ルネを守る為に、グラード達擬人型が存在するのだ。例えば天変地異が起きようとも、天災地変が起きようとも、ルネだけは全力で守りきる自信がグラードにはあった。だというのに、何が不安なのかそれに、ルネ自身だって、並々ならぬ戦闘能力を持ち合わせている。何しろルネは、バリアント最強の種である竜と、人間との子なのだから。

リムの言葉は、確実にグラードの琴線に触れた。

「貴方は何を言うのさ！ ルーネについて心配する事なんて、何も

……」

「あの子は、」

堪えきれず声を荒げたグラードを、リムが静かに遮る。但しそれは、今にも決壊してしまいそうに弱々しく、リムらしからぬ声音だった。そして、グラードの方へ振り向く。

振り向いたリムは、悲痛げな笑みを浮かべていた。グラードには

虚勢を張っているだけにしか見えない笑顔を更に曇らせ、リムはか細い声で囁く。

「あの子は、ルネは不安定だから。竜と人間の二面性を持つ事ができるなんて、有り得ない事だ。本来ならば、存在ごとすぐに崩れ去っている筈なのに」

泣きそうな顔をしているのに、口元には無理をした微笑がある。その組み合わせが、かえって悲愴さを滲み出させている。

それに、いつの間にか口調も『リオネル・ギルデン』としての物に戻っていた。意識せずにそうなってしまう程、強く締め付けられているのだろう。

グレードは出かけていた罵詈雑言を、すんでのところで飲み込む。

「なのに、ルネは生きている。何故だと思う？」

「何故って……聞かれても」

リムが下唇を強く噛み締める。

仮面の奥の左目が、ちらりと見えたような気がした。

「——シルヴィアが、もう一つの面を与えたんだよ。擬人型としての面を、な」

息を呑んだ、否、息を止めた、否否、止まってしまった事にも気付かなかった。

擬人型と言えど、効率良く動くためのエネルギー源が必要だ。グレード達は、食事こそ摂らないが、人間と同じく酸素をエネルギーへと変換している。

グレードは、自身の体の動きが鈍っている事に気付き、そしてやっと、自分が息をしていなかった事を知覚した。

「体は人間のものと竜のものとの二つ、核は擬人型として二つ――

二つと一つで吊り合わずに不安定に揺れている。

そして、人間と竜と擬人型、心は果たしてどれを持っているのか

グラードは何となくリムの言いたい事が分かった。

不安定であるルネは、いつ内側から崩れていくやも知れないのだ。それは流石にグラード達でもどうしようもない。

グラードは青い空を見上げる。晴れ渡っている筈のそれが、渦巻いているように見えた。

*

*

*

「なあ、ユーグ。お前は、音声は絶対に必要なものだと思うか？」

寝室がわりのベッドの上で、セインは小さな声でユーグに問いかけた。

自ら言葉を発して他人に意思を伝える事が、出来ないユーグ。普段は筆談で会話をしたり、アデラが彼の言いたい事を汲み取って代弁したりしているが、その生活について不便だと感じた事が少なからずあるのではないだろうか。そんなユーグだからこそ、セインは自分の中の不安を遠回しに打ち明けたのだった。ストレートに聞くのも、自分の弱点を包み隠さず曝け出して何だか恥ずかしかった為、遠回しに、である。

見ているだけでは、歯痒い。声が聞こえなければ、もどかしい。セインの『能力』は剩りにも中途半端すぎて、逆に彼の精神に強い

揺さぶりをかけてきていた。

セインのベッドの横に設置してあるテーブルの、その上にある紙とペンに、ユーグが手を伸ばす。アデラは今、渋々ながらも酒場の片付けに戻っているため、筆談でセインと会話をするつもりなのだろう。

『必要。普段はアデラがいるから良い。でも、こんな時は欲しいと思う』

「ふうん……」

ユーグから渡された紙に目を走らせたセインは、吐息に近い相槌を打つ。

無駄なく、最低限の文字数で綴られた文。筆談は書き手の速度が求められる為、自然と余分な文字が淘汰された文章となる。短くなっている文は、嘘や慰めの言葉を織り混ぜる隙間がない。そのためユーグの心の底からの本音を聞いているようで、セインにとっては好ましかった。

筆致が流麗なのは、ユーグが普段から文字を書き慣れているだろう。因みにセインの字は、ミミズどころかウナギがのたくったような形をしている。

『でも、やっぱり要らない』
「は？」

続けて重ねられた紙を見て、セインは思わず腑抜けた声を上げてしまった。

一枚目『必要』と書き、二枚目は『要らない』と書く。これでは前後で言っている事がまるきり逆ではないか。セインはユーグの言いたい事が理解できなくて、拗ねた子供のように唇を尖らせる。

非難の意を込めてユーグを見上げたというのに、肝心のユーグは

朗らかな笑みを浮かべていた。

『聞きたい事が、本当は聞きたくない事なのかも』

『聞く』という単語。『言う』が出来ないユーグには、悩む必要のない言葉。

やはり、見抜かれていたらしい。結局、諭されてしまった。慰めではないからまだ良いのかもしれないが、負けた気がして少しだけ悔しい。

このギルドのメンバーはそれぞれがそれぞれに重いものを背負っているせい、他人の痛みを察する事に関しては人一倍、鋭い。マインスの方向への感情の機微には、驚くほど敏感なのだ。隠し通す事など、自分が思っているよりも不器用なセインにできるはずもない。

聞きたくない事なんて、存在するのだろうか。こちらは全てを聞きたくてうずうずしているというのに。

ユーグはそれについて、全ての解を持っているのだろうか。

「……っ！」

不意に、テントの入り口の布が歪む。歪みの部分の低さからすると、四足のものがテントの布を嗅ぐようにして顔を押し付けているのだろうと分かる。鼻先の大きさはそんなに大きくないから、ギルドが所有している運搬用の馬ではないだろう。あれらの顔は、想像するよりもずっと大きい。イナバにしては小さすぎるし、第一、ルネ達と共にクレタの外に出ているのだからこの場にいる訳がない。となると、残りは限られてくる。

体を起こす事さえも辛いセインの代わりに、ユーグが入り口の布を捲って、中に招き入れる。

「何だよ、驚かせるな」

のっそりと足を踏み入れてきたのは、ロード騎士団が使っているバリアントだった。リムに制御されている証である、首から下げたベルヴェルグが青く発光している。恐らくは、酒場での騒動の物音に驚いたか血が滾るかして、馬小屋から飛び出して来てしまったのだろう。どちらにしろ、今は落ち着いているようなので安心である。ユーグがテントから顔だけを出して、他のバリアントがいないかどうかを確かめている。

セインは自分の匂いを嗅ぎ回るバリアントの顔に両手を添え、そつと顔の前に誘導する。バリアントの大きな瞳には、セインの顔が写し込まれている。今にも泣き出しそうな顔をしていた。そして実際、泣きたい気分だった。

「なあ……お前の主は、どう思っているんだろうな」

当然、人の言葉など理解できないバリアントは、瞬きを繰り返すばかりで何の反応も示さない。

セインはじつとバリアントの瞳を覗き、重い溜息を吐く。

その瞳は、神秘的な青紫色だった。

*

*

*

積み重ねられていた村人達の死体は、思っていたより酷い有り様だった。腐敗が進み、元はどういう姿をしていたのか、想像もつかない。ぽっかりと空いた三つの穴のお陰で、辛うじて人間の顔だと認識できる。その穴には先程まで降っていた雪解け水が溜まり、濁った水面を揺らめかせている。

ルネが埋葬をしていた時よりも、蠅の量が尋常ではないくらいに増えて、当たり前前にそれと同調して蛆虫も増えている。蠢いているなどという表現では生ぬるい程の量だ。

場所を弾き出され餌を求めてこちらに這って来た蛆虫を、ネジユの足が容赦無く踏みつける。プチリ、と小気味良い音がして、蛆は粘性のある中身を晒け出した。蠅も、寄って来る。蠅は水分の多い粘膜を好むらしく、目の回りで煩く飛び回ったり、あげくの果てには眼球の上に止まろうとしてくる。こちらは空中を素早く飛び回るため、払っても払っても切りがない。

この場にいる全員が、この光景と、甘く漂ってくる腐臭に辟易していた。これを全て埋葬しようとするなど、不可能に近い。

「あー……」

時々、ネジユの様子を窺っていたフィルが、声をあげる。

イオリ、ストエカス、ウィンストンなどは特に疑問を発する事なく、ネジユの存在を有りの俤に受け止めていたが、フィルだけは少し納得しがたい様子だった。ルネが『ルーネ・ギルデン』だと知る前の殺気に溢れていたネジユの姿を見たフィルにとっては、ネジユが味方だという事が信じられないだろう。実質的にルネの『兄弟のような存在』という立場にあるし、ルネも文句を言わないので黙っているだけだろうが、少しでもネジユがルネの意に反するような真似をすれば、即座に殴りかかるに違いない。

「これって、一気に燃やした方が早いんじゃないのか？ どうだ、ルネ」

「ん、そうだよな。これじゃあ近づけないし」

フィルの提案に、ルネを含む全員が了解の意を見せる。

ルネも埋葬という行為に特に拘りは無かったので、より簡単だと

いう火葬という案を受け入れたのだった。埋葬していたのは、その方がそれらしいからというだけで、深い意味はない。

「イオリ、持ってたんだろ？　あるだけ出せ」

「追い剥ぎのような物言いだな。残りは三つしかないぞ」

「火起こしのベルヴェルグなら、私も幾つか持っているが？」

ウインストンが、矢筒の下に作られているポーチの中を探る。その中には六つのベルヴェルグが入っていて、イオリの分も合わせると、九つになる。火葬にするならば、例え火起こしのものでも十分な量となるだろう。ベルヴェルグは平らな石に刻み込まれており、ウインストンがその縁をなぞると、すぐに発光し点滅を始めた。それを屍の山に投げ込むと、そこを中心として三、四体が燃え上がる。その作業をしているウインストンの横で、頭を巡らせていたストエカスが退屈そうに溜息を吐いた。

「バリアント達が集まってくるかと思ってたんだけど……周りにいるのは、小物ばかりのようだね」

言われて、ルネは耳を澄ませる。火の爆ぜる音に混じって、バリアント達の交わす鳴き声が聞き取れた。声も小さいし、意味不明な言葉の羅列であるので、ストエカスの言うように、下位のものしか集まっていないのだろう。上位のバリアントになれば、人の言語を始め、あらゆる種族の言葉を操る。ルネは試した事はないが、その気になれば隣にいるイナバとだって、会話が成立するだろう。

「やっぱり、ルネの匂いが強いのかなあ。脳味噌の足りてない下位バリアントは危険度の判断がつかないから近づいてくるんだろけど、中位から上は故意に避けているようだね」

そう言つて、ストエカスがルネに視線を流す。

「え、……ごめん？」

「あつはは、謝る必要なんてないんだよ。後ろのネジユ君がキレそうだしね」

見ると、確かにネジユが静かに手を腰だめに構えて、何時でもストエカスへ攻撃を仕掛けられる体勢を整えていた。

ストエカス是有りの俣の状況をルネに解説していただけたというのに、それでも戦闘準備に入っていたネジユ。もしかしたら、他の擬人型達もそうなのだろうか。ルネにしてみれば、これでは少し過保護すぎるように思われる。

「とうかさ、君達、そろそろ着替えてきた方が良いんじゃない？
ルネの家、あるんだろう？」

そう言われて、ルネは村に着いてから初めて自分の格好を思い出す。未だにルネは、ネジユから借りたカッターシャツ一枚だった。ネジユにしても同じで、ルネにカッターシャツを貸している為、上半身は何も纏っていない。

「……忘れてた」

「だろうね。こっちは僕達でやってるから、ちょっと行つて着替え
てきなよ」

「お前は何もやってないだろうが！」

ひらひらと右手を振るストエカスに、フィルの尤もな突っ込みが入る。

もう既にベルヴェルグは全て発動されていて、後は火が燃え広がるのを待つのみだった。ルネ達にできる事は、何もない。

「じゃあ、ちょっと行ってくるね」

一言断りを入れ、ルネは自分の家へと向かう。その後ろを、ネジユが無言でついてきた。

村は決して広くない。元々小さかったというのもあるが、バリアントの襲撃を理由にして、クレタを始めとする大きな町に移住する者の数が少なくなかったからだ。今、考えてみれば、強大なバリアント達はどうセルネの匂いを嗅ぎ取って村に行こうとも思わないだろうし、下位の一匹程度なら村人達全員でかかれば何とかなっていただろう。だから、本当はバリアントが襲ってくる事を恐れていたのではなく、竜とのハーフであるルネの存在を恐れて逃げていったのかもしれない。そして、例えば道中バリアントに襲われる事になったとしても、ルネから逃げたい一心で町を目指していたのだろう。

この村を出ていった者達の、その選択は正解だったのかもしれない。残った村人達がルネを下手に刺激し、結果、皆殺しとなったのだから。

正当防衛とええど、浮かび上がった罪はもう決して揺るがない。村人達の全員を殺したという事実だけは、決して揺るがない。かつてナハトが言ったように、罪とは必ず成算される物であり、逃れられない現実なのだ。

ルネはらしくなく軽い溜息を吐く。後頭部に痛みを覚えていた。やはり、自分には考え事をしたり、怒りを感じたりするのは苦手なのかもしれない。怒りを感じるのが苦手、という表現は、やや違うのかもしれないが。不安定であるルネは怒りを抱いてはいけない。もし感じてしまえば、自分が自分の手に負えなくなってしまう――

「ここが、ルーネの家？」

「え？ …… あ、うん。そう、僕の家」

ネジユの声で漸く我に返る。これ以上考えていたら、思考が低回して戻れなくなっていた。頭痛も更に酷くなっていた事だろう。

本来は無口であると判明したネジユだが、もしかすると、ルネの苦悩に気付いて、その重い口を開いたのだろうか。ルネは口の中だけで、ありがとう、と呟く。これくらいの音量なら、耳の良いネジユには辛うじて聞き取れるだろう。

「結構、ボロボロになっちゃったかなあ」

家というのは、人が住まないとすぐに荒れ果ててしまうという。ほんの数日間の筈なのに、少しだけ寂れてしまった気がするのは、ルネの気のせいだろうか。扉を開けて中に入ると、埃っぽい臭いが鼻の奥に溜まった。足を進める度に埃が舞い上がって、戸口から差し込む陽光に光る。

ルネは箆笥を開けて、中を物色する。幸いにも、箆笥の中には埃はそれ程たまっていないようだった。手早く着替えを済ませ、物珍しそうに部屋の中を見回していたネジユに、脱いだカッターシャツを返す。本当はちゃんとした着替えを渡したかったのだが、ルネのサイズがネジユに合うわけがない。

返したカッターシャツに袖を通しながら、ネジユがぼつりと問う。

「必要な物を纏めたりとかしないの？」

「ん、忘れてた。そっか、そうしなくちゃね」

もう帰ってこないかもしれないし、とルネは付け足す。短い期間だったが、母と住んだこの家を捨てるとなると、少し寂しい気もする。ゆっくりしてきたいが、それでは騎士団のメンバーに迷惑をかけてしまう事になるだろう。急いだ方が良い。

「必要な物、かあ……」

思い付く限り、特には無かった。良家という訳ではないから家宝なんて無いし、ベルヴェルグだつて性能の悪い火起こしの物しかない。殆ど物々交換という原始的な方法で成り立っていたこの村では、金など持つていてもあまり意味がなかったから、持つていかなければならない程、所持していない。他に、何か必要な物。

かたん、と隣の部屋で音がした気がした。

「ああ、一つだけ、あつたよ」

指を鳴らしてルネは隣の部屋に入り、壁一面に設置されている本棚を見上げる。その一番上の段、そしてその一番右に、目当ての物があつた。取ろうとして手を伸ばそうとするが、届かない。見かねたネジユが、代わりにとつてくれた。

表面の埃を払い、ルネは大事そうにその本を抱き締める。

「それは、何？」

「母さんの日記だよ。毎日じゃないけど、何か出来事があると付けてたの」

その本は革張りのものではあつたが、背表紙にも表紙にも文字が押されていなかった。その代わり、中身は美麗な筆致でびっしりと埋まっている。これが、シルヴィアの文字。その文字の連なりが刻んでいるのは、彼女の生きた証。

ルネはシルヴィアの日記を抱き締めて、瞳を閉じる。

「僕ね、字が読めないんだ」

唐突な話題転換に付いてきてくれているだろうかと、ルネは目を

開けてネジユを見やる。

心配は無かったようで、ネジユは腕を組んで本棚に寄りかかり、こちらを見つめていた。

ルネも、その瞳を見つめ返す。

「でもね、母さんのこの日記は、自分で読みたいの。文字を覚えて、読まなきゃ駄目なの」

そう言つて、ルネは蕩けるような極上の笑みを浮かべる。

「戻ろつか！」

死体の山があつたところに戻ると、火の勢いがさつきとはまるで比べ物にならないくらいの大ささまでに育つていた。火が死体の山全体を包み、黒い煙を空に吐き出し続けている。フィル、イオリ、ウINSTONの三人の働きの賜物だろう。参加しなかったと思われるストエカスは、その光景を見て手を叩いて喜んでいた。

「はははー、ここまで豪快だと、清々しいね！ どうだい、ルネ？」
「何も手伝つてない奴が言つな」

フィルの台詞からすると、やはり参加していなかったらしい。それでも誰も強く責めないのは、ストエカスがこういう作業には向いている筈がないと、理解しているからだろう。

未練がましく周りを飛び交う蠅を手で払っていると、不意に騎士団のルネ以外の四人の左耳についている赤石のピアスが、明滅を始める。

『皆、聞こえてるあるか？』

『大事なお知らせあるよー』

通信の相手は、ヴォットとスピキオだった。まだ数時間しか経っていないというのに、妙に懐かしく感じられる。

全員が聞こえている、と返事をする。その中にはリムの飄々とした声も混ざっていた。リムはまだ、双子達とも別行動を取っているらしい。連れがいるのか、それともいないのか。

『全員、揃っているみたいだから、言うあるよ』

『ボスだったモーリア兄弟の背後関係が割れたある』

そういえば、戦闘要員ではない双子はそれぞれ、拷問吏と暗殺者という役どころを持っているのだった。恐らくは残党を拷問して聞き出した情報、もしくはセインの持っている情報なのだろう。そもそもルネ達は、敵の集団のボスがモーリア兄弟で、更にその背後に誰かがいるという事自体、知らなかった。

『背後にいて援助していたのは、南のエナサンにある組織、だと』

『下っ端構成員だったから、それ以上は知らなかったようあるが』

エナサンは南にある大きな町で、年中暑い気候と、風土にあった独特の文化が特徴である。南は大型のバリアントが多いというが、戦闘民族が数多く存在するため、バリアントによる被害は少ない。代わりに、戦闘民族による強奪が後を絶たないが。——と、ネジユが小声で解説してくれた。

『目的地が決まったのう』

どこか安心する声が、赤石のピアスを通して聞こえてくる。

『次は南じゃ。一旦クレタに戻ってから、セインと相談するとしよ』

う

ルネは自分の家の方向を見て目を細め、もう一度前に向き直る。自分がこの騎士団に身を置いている限り、二度と戻ってくる事はないだろう。

今は村に住んでいた時とは違い、自分の事を有りの俤に受け止めてくれる人達が沢山いる。漸く見つけたこの居場所の中で少しずつ、罪を清算し罰を受けていこうと、ルネは秘かに誓う。

黒い煙を吸い込む空は、爽やかな青空だった。

——春が、終わる。

二話（後書き）

なんだか、書きたい事が上手く表せませんでした……ただのダラダラトークになっちゃった……。

走る駆ける逃げる逃れる免れようと

そう、走っていたのだった。

ただひたすらに、一人の少女と二人の女が夜の道をただひたすらに走っている。

時々、後を気にしてチラリチラリと振り向いている。少女達は確かに、後から来る何かに、あるいは何か達に怯えて逃げ惑っているのだ。

「ひつ、ううう、な、んでなの。何でなの、よう、ふえ」

少女の方は滂沱と涙を流していた。しゃくりあげながらも前歯で下唇を噛締め、手の甲で強く目を擦って逃げ続ける。先刻から、逃走を始めた時からずっと同じ疑問を何度も口に出している。

少女の履物は、ろくに整備されていない足場の悪い砂道には向いていないだろうと思われる、足の先に引っ掛けるだけのサンダルだった。女達に至っては、何と裸足である。しかし、こちらは何の弊害も感じていない様子で弱音一つ吐いていないし、態度にも出していない。もしかしたら、体にダメージはあるものの、それを害だと感じていないのかもしれない。

少女は一際高く積みあがった砂に案の定足を取られ、疲れも溜っていたのか派手に倒れこむ。

「いいつつう、う、いた………いついたいよう、何でよう、何、でえええ」

「「姫様」」

左右の女達が同時に少女に声をかけ、傍らに膝を吐く。

転倒が今まで押し溜めていた何かの洪水のきっかけとなったのか、

少女の涙が大粒のそれへと変わる。

そんな少女を支えて立ち上がりさせてやりながら、女達が、来た道を強く睨みつける。微かではあるが、怒号が途切れ途切れに聞こえていた。

「姫様、急ぎましょう」

「姫様、おぶさって」

少女は震える膝を叱咤するようにペチペチと叩いてから、立ち上がる。そして、頼りない足取りでまた走り始める。両側からかけられる「負ぶさって下さい」という声に首を振り、少女は自分の足で前へと急ぐ。

少女は頬を濡らす涙を、赤くなる程、手の甲で強く擦り拭いた。

「だいじょうぶ、だいじょうぶなのよう」

少女はうわ言のようにその言葉を繰り返し始める。

「だいじょうぶなのよ。ぜったいにだいじょうぶ。きっと、こうしてがんばっていけば、すてきなだれかが助けてくれるの。お話のお姫さまみたいに、だれかが助けてくれるの。だから、心ばいすることない。わたしはお姫さま、わたしはお姫さま……」

「……………」

道の先は暗かった。

少女の言葉は昏かった。

また、人々が胸の内に抱える何かも——冥いのだ。

走る 駆ける 逃げる 逃れる 免れようと（後書き）

サマー編に入りました！やったー！

テスト勉強？ 何それ、おいしいの
↑

これから、よろしくお願いします。

解放された礼に、一生を捧げる決意

ある研究所では存在してはならない、言い換えれば存在する事を思われてさえない、そんな研究が行われていた。研究の成果は半分成功、そして半分失敗であった。研究、所の持ち主がたった一人で進めていた。未完成であつてもたった一人でこの研究を半分まで進める事ができたのは、偉業と呼んでも差し支えない事だろう。

だが、この研究が最後まで成し遂げられる事は、ない。

何故ならば、研究者は研究室の中心で赤黒い肉片へと果てているのだから。

こんな大量の血液が本当に人一人の体の中に収まっていたのかと疑わしくなる光景。端が乾き始めて赤黒くなつた水溜まりに肉と脂肪が浮かび、骨が頭を出している。辛うじて顔だけが原型を留めていて、しかしそれが逆に気味悪さに拍車をかけている。視神経ごと筆記取られた片目が、虚ろのように開けられた口腔内に放り込まれているのが、趣味の悪い冗句のようであつた。

この実験について知っているのは研究者と実験台、それから実験台に手を貸した者達のみである。そして、生き残つた者達はいずれもこの研究に手を出すつもりはなかつた。

両者とも、研究成果にはまるで興味を示さず。

実験台に手を貸した者達は、自分達の創り上げた肉片をただ見下ろして。

そして実験台は、研究室の端にいた。

実験台は二人、背の高い方はまだ二十歳にも満たないであろうという青年、背の低い方は十歳ぐらいの少年だつた。青年が頭を垂れ、少年はされるがままになっている。青年が恭しく口を開いた。

—— 助けていただき、ありがとうございます。

綺麗な響きで紡がれた言葉に、少年が戸惑いの声を上げる。

—— 俺は何もしていない。俺はただ、見てただけだ。

—— それでも、結果として。

青年が後を見やる。そこには、かつて研究者であった肉片と、それを作った者達の姿があった。

肉片を作ったのは、実験台の少年より幾らか年上だろうと思われる六人の少年達。そして彼等を統率しているのは、一人の男だった。青紫色の三つ編みを垂らした、男だった。少年達と男は、右上腕部に雀の刺繍がしてある藍色の軍服を着ている。

—— 結果として、私は解放されました。あなたのその、行動によって。

青年は顔を上げて、低いほうの目をまっすぐに見つめる。

—— だから、私はあなたに一生を捧げましょう。

口の開閉を繰り返し、出すべき言葉を捜し続ける少年。

青年には、一つまみほどの迷いもなかった。

冗談も誇張も一切抜きにして、青年は少年に一生ついていく覚悟を固めていたのだ。

—— あー、お二方。ちょっといいかのう？

そこに割り込んできたのは、外見の割りに年寄りじみた口調の、聞くだけで張り詰めていた気が緩んでしまう声。タイミングが良い

のか、悪いのか解らない。

言葉を発したのは、藍色の軍服集団を率いる青紫色の髪をした男だった。男の顔の左半分だけを覆った道化を模した仮面が、状況にそぐわないヘラリとした笑みを浮かべている。青紫色の髪をした男も、飄々とした態度で笑って見せた。

——行く宛はあるのか？ 無いんじゃない？ なら、どうじゃ。儂等と組まんかのう？

青紫色の髪をした男の唐突な提案に、実験台の少年だけでなく、今度ばかりは青年の方も度肝を抜かれた。助けられたとはいえ、こんなあからさまに怪しい男の率いる集団に、手を組めと誘われているのだ。驚くなど言う方が難しい。

しかし青紫色の髪をした男は彼等の表情に構わず、異様に長い袖をパフパフと左右に振る。

——なんにも、儂等の中に入れとは言つとらん。儂等と協定を組まんかと聞いておるのだ。

青紫色の髪をした男が、仮面に覆われていない方の瞳を細めて笑う。

その笑みを見て青年は、両目を合わせて見たくない、と思った。じつと見ていれば、引き込まれてしまう、言いなりになってしまいそうな静かな圧力がそこには存在していた。片目だけでも、気味が悪い。では、両目を合わせてしまえば、どうなるのか。考えたくも無かった。

——悪くない案であろつ。どうじゃ？

実験台だった青年は、同じく実験台だった少年を見上げる。

彼が一生の忠誠を誓った少年は、空気に吞まれかけたような重々しい動作で頷いた。つまりそれは、男の決断である事も意味している。

男はそつと目を閉じ、自分達二人が歩んでいくであろう未来について、思いを馳せた。

尤も、その未来がどこまで続いているのかは、解らなかったが。

解放された礼に、一生を捧げる決意（後書き）

疲れてるからかな……読み返してみたら、文章が酷くグデングデ
ンですね。

次から、ついにSummer編の本編に入りますよー！

二話

夏のある日、エナサンの前に堂々と海原の如く広がる砂漠の中心で、一つの騎士団と一つのギルドが困り果てて往生していた。

海原、とは言っても、本編の主人公であるルネは海など一度たりとも見た事がない。ついこの間の春先まで村の外へ一歩も踏み出した事が無かったという事実に加え、その村の内部で忌避され関わり合いを持たれなかった、世間知らずのルネにとって外の世界は全てが未知数であった。

金色がかった癖のある緑色をした髪。それよりも少々金色の強い、大きな瞳。鼻と口は小作りで目だけが大きいその顔は、童顔と形容すべき幼さを残している。

そして、その顔は。

今はしとどに濡れていた。

「本当に申し訳ありません。慣れていないこの体では、コントロールが難しくくて」

そう言って甲斐甲斐しくルネの髪を厚手のタオルで吹き続けているのは、五歳程の小さな少女だった。しかし、外見の割には態度が落ち着いているし、声こそは子供のそれであるものの口調も大人びている、どこまでも違和感を覚えさせる少女である。

服装も奇妙、といっても、少女のそれが果たして服と呼べるのかどうかは甚だ疑問ではあるのだが。少女は、シルヴィアの造りし擬人型の成功作品六体のうちの長男にあたるグラードのマフラーを、その幼い肢体に巻き付けているだけなのだから。際どい部分だけがマフラーで隠れている幼女の姿は、一部の特殊な性癖を持つ者には堪らないものがあるだろう。幸いな事に、このメンバーの中に口リコンはいない。

「兎に角、御迷惑を御掛けします、——ルーネ」

この世でルネの事を『ルーネ・ギルデン』の本名で呼ぶのは六体だけ、もしかしたら七体。

つまり、ルネの母にあたるシルヴィア・ギルデンが造った、戦闘用擬人型達である。

艶やかに青いショートヘアにした髪を、左側だけ耳にかけた凛々しささえ感じさせる髪型。深い池の水面を思い立たせる、同色の瞳。マフラーの間から覗く右太股には、S字を基本とした水滴を模したベルヴェルグ。

少女——雨のブルーは、少しはにかんだように笑った。

「これから、宜しくお願いしますね」

春先に給仕服を着た妙齡の女性だったはずのブルーが、何故、少女になっているのか。

そもそも、春先にロベール・モーリアに殺されたはずのブルーが、何故生きているのか。

彼女がルーネの前に春の飛行艇以来、再び姿を表したのはつい先程、およそ半刻前の事である。

* * *

「うーがー、あっちいよう」
「うん、そうだね。暑いよね」

自分の保護者的立場にあるフィル・カーソンの言葉に、ルネは相

手の言葉を反復するだけの適当な相槌を返す。

暑すぎて頭が回らないのか、ルネの適当さ加減に何の疑問も抱かなかったらしいフィルが「あちいー」と同じ言葉を繰り返す。先程から何回も同じ言葉を口に出している事から、無意識の境地に入り込んでしまっているのかもしれない。

フィルはメーディナ族である。彼ら一族の特徴は高い身長と、色素を持たない為に血色が透けて見える赤い瞳を、全員が例外無く持っている事である。また、男性であつても女性であつても、皆が怪力を持つている。人族と同じ筋肉の太さで見た目には、身長が高く瞳が赤いという事を除けば、大して変わらない。しかし、人族の三、四倍以上は力がある。筋肉がついているようには見えなくても、怪力が備わっている。それが彼らの、不思議な特徴の一つである。

といつても、見た目に分かるのは身長と赤目くらいなもので、人族にも近い容姿を持った者はいるだろう。

今のフィルは、その赤目を黒のサングラスで完全に覆っている。もちろんこれはただのカッコ付けではなく、色素を持たない故に紫外線に弱い瞳を保護する為のものである。そしてそのサングラスを外せば、見た者に鋭く衝かれた印象を与える瞳が現れるはずである。彼自身の特徴は、その鋭い目と短めの銀髪である。銀髪の方も、今は日除けとして被っているローダ騎士団指定の軍服と揃いの軍帽によつて、見えるのは前髪的一部分と後ろの下の方だけである。年齢は、二十代半ば程。

「あつちい……」

「さっきから五月蠅いねえ」

そう言つてフィルの背中を勢い良く叩いたのは、フィルと同じくメーディナ族であるポーレット・ラウランだった。彼女にかけているサングラスとフィルのにかけているサングラスのデザインは同一の物で、揃いのそれをかけて並び歩いている姿は仲睦まじく見える。

「だって、暑いモンは暑いんだよ。暑いと言って何が悪い」
「……ま、それもそうね」

艶かしいプロポーションの体の腰に手を当て、フィルの言葉に納得してふむふむと頷くポーレット。その顔は、サングラスを外していなくともかなりの美人だと窺い知る事が出来る。赤い髪は無造作に背中に垂らしバンダナを巻いた頭と、腹や腕や胸元を中心として大胆に露出した服装は彼女の奔放さをよく表しているとも言える。ポーレットは行商人ギルド・ヴォーリヤの食品全般を扱っている。

「コラ、ポーレット。納得すんじゃねえ。暑いって言ったら、余計に暑くなるような気がすんだろうが！」

この猛暑の中それなりに元気そうに怒鳴ったのは、行商人ギルド・ヴォーリヤを率いるセイン・ウスタスである。実質十九歳でギルド一つを纏め上げる手腕は、素晴らしいの一言に尽きる。そもそも行商人ギルドという組合自体が珍しく、まともに活動しているのはこのヴォーリヤくらいのものである。行商は大陸の各地を旅して回らなければならず、常にバリアントの襲撃という危険と隣り合わせだからだ。それでもヴォーリヤが無事なのは、ローダ騎士団と協定を結んでいる為である。ローダ騎士団行商人ギルド・ヴォーリヤを行商の道中護衛し、行商人ギルド・ヴォーリヤはローダ騎士団に無料で物資を回すという契約があるのだ。

「『暑い』の代わりに『涼しい』って言ってる！」
「えー……セイン、何か変だよ？」

滅茶苦茶な要求をしている事に、セインは気付いているのだろうか。ルネは思わず声を上げる。

遠くからでも目立つ、肩に触れるか触れないかの長さの橙色の髪と、同色の瞳。

彼はギルドの団長以外に、情報屋という副業を持っている。速さ、正確さ、量の全てが一級品の情報屋であり、常連の客も多い。ただし彼は、自分の仲間や信頼する知人の話は絶対に売らない。幾ら金を積んでもそれは同じ事である。

「セイン、ルネの言う通りです。自分が訳の分からない事を言っていると、理解していますか？」

「ううっ……」

まだ未成年で未熟なセインの保護者であるルーファス・ノジャンにたしなめられて、セインが口ごもる。ルーファスには、中々頭が上がないらしい。副団長という立場もあるのだろう。

ルーファスは先の尖った耳と華奢な体つきから見ての通り、エフェル族である。セインよりも長い金髪は癖がなく清流のように背中に垂れている。右目は思慮深そうな青、左目は片眼鏡に隠れていてよく見えない。

彼の属するエフェル族は、美しいモノを徹底的に好む。しかしやはり、同じエフェル族でも個人の感性は違う。理解できないモノを好む輩だって、中にはいる。

その筆頭が、少し前を歩くウィンストン・マーシュだった。

「んー、こんなに暑かったら、バリアントもろくにいないのかなあ？」

「そんな事はないはずだが？ 砂漠にだって、生息している個体がいる」

落ち着いた声で返答をした方が、ウィンストンである。淡い水色の髪は彼の美貌で良く合い、互いに引き立てあっている。前髪と耳

の間の一部分、つまりもみあげにあたる場所は、他の部分よりも伸ばされていて歩く度に揺れている。ウィンストンは、隣を歩くストエカス・デュオの闘争時の血塗れの姿を好むという、麗々しい外見からは想像できないとんでもない美観の持ち主である。

そして、ストエカスは狩りを得意とするアーバン族の出である。彼の闘争本能の強さは、その血から来ているものなのだろう。些か強すぎる事は、否めないが。赤茶色の髪と、同色の瞳。それから、猫のような獣耳と尻尾。その色はルネにいつも、乾きこびりついた血を連想させる。そのストエカスの髪は下段を残し上段の髪を後ろで丁寧に結われているが、これは彼が自分でやっているのではなく、ウィンストンに毎朝やつてもらっているのだ。

二人共に、ローダ騎士団の戦力である。

「ねえ、ルネ。バリアントをモサーツと呼んだりとかできないのかい？」

「モサーツ？ 出来ない事もないと思うよ」

この暑さを全く気にしていないのか、ストエカスがルネの肩に腕を回してくる。

少々と言わず特殊な体の仕組みを持っているルネだが、この暑さの中で密着されると流石に鬱陶しい。

言う通りにすれば離れてくれるだろうという結論を出し、ルネがもう一つ持っている姿に変化する時に破いてしまわぬよう服を脱ごうとした、その時。

「わー！ ちょっと、何してるの、ルネ！？ こんなところで脱いだら、日光で火傷するって」

突然、膝の裏に来た衝撃に崩れそうになった体を、並外れた身体能力を活用してなんとか持ち直したルネ。

斜め下後方を振り向くと、そこにはルネの足にがつしりとしがみついたネルス族の男、ライリー・エディツサがいた。

男と言っても、幼児のようなその体躯は少年と形容すべき姿である。というのも、ネルス族の特徴は全員が幼児のような可愛らしい姿をしている事であるからだ。ただし彼らの平均寿命は短く、男性で四十九、女性は五十五程である。その代わり、成年と見なされる年が十六と早い。ライリーは今年で二十歳だからもうとつくの昔に成人 していて、セインには「もうそろそろ、結婚とか考えたらどうだ？」と言われている。

「えーと……バリエントを呼ぼうと思って」

「余計に駄目だよ」

外見には全く関係なく、内面は立派な大人である。そして、更に大人達の中でも数少ない常識人と言えよう。

茶髪は後ろで団子にして、石工兼宝石職人である彼の作業に邪魔にならないように、一つに纏めてある。少しくすんだ色合いをした緑色の瞳が、怒りの色を湛えていた。

「何故、大人しく歩けないのかな？」

「ひゃっひゃ、我等が大人しくなんて、無理あるよ！」

「鼻と口を塞いで座ってる、と言われるのと同じある！」

不安定な馬車の上で、それでも落ちずに腹を抱えて転げ回っているのは、ヴォット・ザクとスピキオ・ザクの双子だった。

髪型は二人とも短髪で、顔立ちもそっくりである。声も動作も何もかもが似ていて、一つだけ相違点があるとすれば、それは髪の色と瞳の色ぐらいだ。兄のヴォットは栗色で、弟のスピキオは亜麻色。そして強いて上げるとするならば、襟足から一房だけ伸びている赤髪が右の肩に流されているか、左の肩に流されているかという点だ

ろうか。しかしこれは風が吹いてきた時に左右が逆になる時もあるため、あまり有効な見分け方ではない。

二人の顔立ちが西の方の人々に近いのに、なまりが東のある地域のものであるのは、彼等が西の人と東の人とのハーフだからである。

「ちゃんと大人しく歩いている人はいるんじゃないの。ほら、イオリとか」

「あれは違うあるよ。イオリは大人しいんじゃないある」

「大人しいんじゃないくて、ただ無関心なだけあるよ」

双子が揃ってセインに反論する。拗ねたようなその顔に、ポーレツトがくすりと笑った。

話に上げられた当人はちらりとこちらを一瞥しただけで、何も言わずまた前を向いてしまった。双子の言う通り、彼は何に関しても無関心を貫き通している。

イオリ・ナガサワ。極東に位置する地域の出で、黒髪黒瞳を持つ。西の人にはない艶やかさとしなやかさを持ったその黒髪は、後頭部で赤い組紐を使って一つに纏められている。位置的には彼の目と同じくらいの高さで結われているのだが、側頭部の髪を緩く持ち上げているため、下に凸状を描いている。イオリはルネのナイフの師でもある、ルネはその事をイオリが引き受けてくれた事にとっても感謝している。

「ナハトを上げるならまだしも、って感じだな」

フィルがライリーの頭の上に手を置く。子供扱いを酷く嫌がるライリーは、首を左右に激しく振ってその手を払った。

一方で名前を上げられた本人、ナハト・ブロワはイオリとは違い笑顔で歩いてくる。

「私は皆が騒いでいるのを見るのが好きなのだ。私自身にはそんな元氣などはないのだよ」

「相変わらず話が早いねえ、ナハトは。遠くにいたのに俺達が話してた内容を知ってるんだもん。にやあっはは！ 説明のし甲斐ってモンがないよ？」

「お前は説明なんて面倒な事をする気はないだろう」

ナハトの背中を平手でバンバンと叩くストエカスを、ウインストンが軽くたしなめる。

ストエカスの言葉に、ナハトは肩を竦めただけだった。

ナハトは妖術師で、その中でも珍しい先見のベルヴェルグを扱える者である。ギルド・ヴォーリヤでは占い師をやっており、彼の占いは良く当たると有名だ。それもそのはず、ナハトは将来が見えるのだから。そこらにいるような尤もらしい事を言って金を取る者共とは格や存在している世界からして違うのだ。

黒髪黒瞳、褐色の肌を持った彼の容姿は長い巻き毛と目元辺りまでを覆うベール、瘦躯のせいもあってか女性的に見える。

「……ああ、そういえば」

砂漠に入ってから大人しくしている者があと二体と一人いた。それから、大人しくせざるを得ない状況にある者も二人いる。

二体と二人が一緒の馬車の中に入り、残りの二人は自分の馬車に籠ってしまっている。

少しでも様子を見ておいた方が良いという判断を下し、ルネは自分の馬車の中を空いた窓から覗いてみる。

「ねえ、大丈夫？ 何か、足りない物とかない？」

「きやはっ！ ルネ！ あたしとユーグは全然大丈夫だよ。うん、こっちの二人はあれだけど」

ぶつからんばかりの勢いで窓枠に飛び付いたのは、十歳にしてギルド・ヴォーリヤで踊り子を務める、アデラ・カノルザだった。目に鮮やかな長い金髪を左右の高い位置でツインテールにしている、アデラが動き回る度に揺れている。濃い青をした瞳は大きく、悪戯めいた光を浮かべていて可愛らしい。ひらひらとそよぐ衣装を纏っていて、布の面積が大きい割りに露出が多い。体型は年齢に相応して幼い物ではあるが、アデラの天真爛漫さは人気がある。

そしてその後ろで微笑みを浮かべているのは、アデラの相棒のユーグ・バルバロサである。彼はアデラが踊る時の曲を奏でる楽士をしており、いつも弦楽器のリユートが傍らに置かれている。年は二十歳前半だろうか。アーバン族である彼の、猫のような獣耳と尾は髪と同じ漆黑である。長い髪は右肩の辺りで金属の髪飾りを使い緩く束ねられており、その髪の間から覗く端正な顔はいつも静かに口を閉ざしている。言葉を操れないユーグの心情を口よりもよく表すのは目で、その金瞳はアーバン族の例に漏れず瞳孔が針のように細い。こちらも鮮やかな布を多用した衣装を着ているが、アデラとは違って露出が少ない。

この二人は客に娯楽を売る者達であり、舞台に出るのだから下手な日焼けをされては困ると、セインによってルネの馬車に押し込まれたのだった。

それから、アデラとユーグの二人が、自分達の馬車ではなくルネの馬車にいる理由。

「確かに。グラード、ネジユ、死にそうな顔になってるけど？」

「……うん？ ルーネ……？」

「……………」

本が一冊と着替えの何着か以外に殆どの私物がないガランとした馬車の中心に、二体は横たえられていた。

ルネの問いに僅かながらも反応してうつすらと目を開いたのは、電のグライド。ルネの母であるシルヴィアが造った、自らの意思を持つ戦闘用擬人型の一体で、彼は二番目に造られた個体、現存してあると考えられている中では一番目で長男にあたる。冷たい蒼氷わ思い浮かばせる薄水色の髪と同色の瞳。夏の昼間なのに、しかも砂漠の中心だというのに、冬用の厚手のロングコートとマフラーを着用している。夜になれば冷えるとはいえ、まだ昼間なのにその格好はかなり暑いだろう。

対してピクリとも反応しなかったのは、雪のネジユ。こちらもしルヴィアの戦闘用擬人型で、一番最後に造られた個体、四男にあたる。真っ白な髪と、それよりも僅かに灰色がかった瞳は、色が抜け落ちたというよりも白い色を被せたという印象を受ける。着用しているのは襟や袖に小さなベルトが付けられたカッターシャツと灰色の長ズボン、膝下まであるブーツで、右手首には小さく細いベルトを腕輪代わりに巻き、左手はハーフフィンガーグローブを付けている。

「二人共、暑いなら服を脱げば良いのに」

その言葉にグライドが自分の首の後ろ、うなじの部分を目指し、今度はちゃんと反応を返したネジユが自分の鳩尾の辺りを示した。そこには、擬人型の印であるベルヴェルグが刻まれている。できるだけそのベルヴェルグを人目に晒したくないという意思表示だろう。ルネも納得して頷く。

二体の力はその名にもついている通り冬にこそ本領発揮されるものであって、夏、しかもこんな暑い土地では一割どころか微塵も使えない。体調にも来るかしく夏に入ってから元気が無さそうにしていたのを、砂漠地域に入った途端に倒れてしまい、この有り様である。まさかこんなに弱っている二体を放置していく訳にも行かず、こうして家族のような関係にあるルネの馬車で寝かされている。そ

して、アデラとユーグはこの二体の世話の為にルネの馬車に乗り込んでいたのだった。

「もう！ そんな事を気にする人なんて、この中にはいないのに！」
「……………」

アデラが、二体を出来るだけ涼しく楽にしてやる為に使っていた扇子を放り出して、憤る。無口、というより言葉を失っているユーグも、頷いて眉をしかめ、同意を示していた。

それでもグロード達はグロード達なりの拘泥する事があるのだろう、決して動こうとはしなかった。単に辛くて動けないだけなのかもしれないが。

「ん、まあ、こっちはアデラとユーグがついてるから、安心かな」
「えへへ」

アデラが照れ臭そうに笑う。この二人に限らず、ギルド・ヴォーリヤのメンバーもロード騎士団の団員も全員、なんだかんだで面倒見が良いから安心だろう。

ルネはアデラとユーグに軽く手を振り、残りの一人が乗っているはずの馬車へと足を向ける。ルネのものもそうだが、ロード騎士団のものはギルド・ヴォーリヤのそれとは違い、馬ではなくベルヴェルグによって制御されたバリアントが引いているのだが、当てはめるべき妥当な言葉が無いため一括して馬車と呼ばれている。

「ねえ、リム？ リームー？ リムってば！」

窓が閉められた馬車の中は、光の関係で明るいこちらからはよく見えない。何回もノックして名前を呼び様子を伺ってみるものの、一向に馬車の主は顔を出さない。

この馬車主はリム・レムといい、ローダ騎士団の副団長である。聞いた話によると、このローダ騎士団の団長はルネの祖母であるテオファーヌ・ギルデンであるらしいのだが、リムとテオファーヌの詳しい関係はルネも良く知らない。第一、テオファーヌはもう死んでいる。死者を団長に仕立てるといふ事にどんな意味があるのか、ルネには分からなかった。

一本の長い三つ編みにし、鈴で留めた青紫色の髪。顔の左半分を覆う、道化のように派手派手しい原色を使った面。外見の割りに、年寄りじみた口調。全てが謎に包まれた人物である。ルネをローダ騎士団に入れると言い出したのも、リムだ。

「中で倒れてたりするんじゃないあるか？」

「暑さで脱水症状起こして、ばったりと」

ヴォットとスピキオの言葉が、ルネのリムに対する心配を募らせていく。完全に閉め切っているから、熱中症になっていたとしてもおかしくはない。

あとで怒られても構わないからこの窓を突き破ってしまおうかと考えた、その時。

ベチャ、と何かが窓にぶつかる音がした。

「——ッ!」

とつさに飛びのくルネ。反射的に、腰の重厚な造りのナイフに手が伸びる。

リムが改良した、巨大で人の四肢を持つ兎のイナバが、喉の奥から低い唸り声を発する。

双子もそう悠長に笑っていらなくなったらしく、馬車から飛び降りる。

非常事態を心の底から楽しむストエカスと、ウィンストーンが駆け

寄ってくる。

フィルが、セイン、ルーファス、ポーレット、ライリー、ナハトの非戦闘員を背後に庇う。

イオリが、アデラ、ユーク、グラード、ネジユが乗るルネの馬車の前に立つ。

そして。

「う、わっ!!」

窓に罅が入り白くなり、見る見るうちに広がっていく。それが四散するまで然程の時間も掛からず、飛んできたガラスから顔も守るために全員が腕を掲げる。

窓を突き破り怒涛の勢いで溢れ出して来たのは、清浄な水だった。それから、水に押される形で中から飛び出てきた人影が一体。

「——はえっ!?!」

それは、一糸纏わぬ姿をした、青いショートヘアの五歳程の少女だった——。

*

*

*

「皆、何故、儂に変態を見るような目を向けるのか」

「十分、変態だよ。このロリコンペド野郎」

「儂は何も疚しい事はしていないぞ?」

心の底から不思議がっているリムを、グラードが低い声で切り捨てる。

グライドは馬車の中から出てきているものの、それは妹であるブルーが心配だっただけで体調はまだ優れないらしく、馬車に背中を預けて座り込んでいる。絶対に外さないと態度であれだけ示していたマフラーをブルーの体を隠す為にあっさりと渡した事から、彼等擬人型達の互いに対する愛情の深さが窺える。因みに、最初はロングコートの方を着せようとしていたのだが、長すぎて裾を引きずる為、却下された。

ネジュの体調はグライドよりも更に酷いらしく、馬車の窓の中からダラリと上半身を投げ出したまま身じろぎもしない。

「ネジュが『姉さんを殺した』とか言って、凄く怒ってたから……もう会えないかと思ってたよ」

「大丈夫ですよ。私達はベルヴェルグを完全に破壊されない限りは、何度でも修復可能ですから」

へえ、と感心して目を丸くしたルネに、ブルーが影のある笑みを浮かべる。

「それでも、修復された私達が、壊れる前と全く同じとは限りません」

ブルーが眉尻を下げて困った様な表情を作ってから、口端だけを上にも動かして笑う。何かを諦めてしまったかのような、諦観したような微笑だった。春先の妙齢の女性の姿をしていたブルーならいざ知らず、元気に満ちているはずの子供の顔がその表情を作ると、見る側に大きな違和感を抱かせる。端的に言えば、似合わない。

ブルーはその幼い自分の顔に同様に幼い両手を当てて、変わってしまった体を示すようにその手を下に降ろしていく。

「ほら、この体のように。いえ、体ならばまだ良いのかもしれない」

ん。もし、」

ブルーがそこで、一呼吸置く。

子供らしい血色の良い手が、グラードのマフラーを縋るように握り締める。

顎を引いて瞳を閉じ、何か込み上げてくるものに必死で耐えている様子だった。

「もし、人格や記憶に障害が出てこればと思うと、怖い」

擬人型達は人間が死を恐れるのと同様に、自分達の存在が壊れてしまふのを心の底から恐れているに違いなかった。その欠陥した部分は、二度と戻らないかもしれない。その恐怖が、彼女達の根底にとぐろを巻いて居座っているのだらう。もしかしたら、過去に彼女達の誰かが元の人格や記憶を失ってしまったのかもしれない。

一方のルネは何かを言おうとして口を開き、それから閉じた。さつきから、口の開閉を繰り返している。出そうとしたのは慰めの言葉ではない。感情の機微に疎いルネはそんなに気が利く性格ではない。もっと、直接的な言葉だった。口を閉じたのは、単に口に出す前に言おうとしていた事を忘れたからである。何時ものルネらしい、間抜けさだった。ルネは思い出そうと、顎に手を添えて首を傾げる。

「リムは、私を修復してくれていたのです。障害が出たのが体だけで……良かった……」

「そうだ！ それだよ！」

ブルーのしみじみとした言葉にルネが大声で反応し、両手でブルーの両肩を掴む。いきなりの事に、ブルーは目を白黒させていた。ルネは、どこまでも空気が読めない。

ブルーの両肩をしつかりと掴んだまま、ルネは彼女の背後を見や

る。

「ね、リム。何でブルーを元のブルーも戻してあげないの？」

「戻すとは……そう簡単に言うてない。出来るならば、そうしておくわ」

ルネの問いに渋い表情で答えたのは、折角の長い三つ編みを解いてタオルで水気を拭き取っているリムだった。実際、一番被害にあったのはブルーと共に馬車の中にいたリムであり、馬車から出てきた時は気管にも水が入ったらしく酷く咽ていた。

着ていた軍服は馬車の中に干してある。外に干すと乾くのは早い。が、湿った布に砂が付いて大変な事になるからだ。今は、軍服に変わりに私服を着ていた。リムの私服は軍服と対して変わらず、やはり袖口が長く広がったものである。

「しないのではなく、できないのじゃ。ブルー達の創造主はシルヴィアであって、僕ではない」

言ってから、リムが自分の言葉を反芻するように顎に袖の中にある手を当て、ゆっくりと首を横に振る。

「いや、それはこの場合、関係ないのか。ないのう。ルネ、ブルーがその姿であるのには確固とした理由がある」

三つ編みは解いても、道化じみた仮面は決して外さない。その仮面には、この男なりのかかづらいが存在するらしい。面は、その下の素顔を隠す。何か覆い尽くしてしまいたいものが、右の顔面にはあるのだろうか。ただし、リムの仮面は口のあたりが割られている。つまり、隠したいものは右の目にあたり限定される。

リムは露わになって左目を細め、口元を引き締める。

「ベルヴェルグの力を培養していた器が割れ、力が外に漏れ出ていたのじゃ。何とか器を直したのは良いが、一度流れ出た力は戻らぬ残った僅かなベルヴェルグの力でその体を動かすには、小さなほうが力の消費が少なくて良い」

と、リムが身振り手振り交えながら話すのだが、袖がパタパタとひらめきすぎる上に手が袖から出てないので、どの動きがどの科白に対応しているのかいまいち良く分からない。

だがそれは、ルネが図説付きなら話を理解し得る事を前提とした話である。実際にはそのジェスチャーが見えていたとしても、五歳児レベルの脳を持ったルネにはちんぷんかんぷんだ。ジェスチャーが見えていたと仮定しても駄目なのだから、今のリムの話などは論外である。単語そのものの意味は分かるものの、それを繋ぎ合わせて文章とした物の意味は解らず、事物として捉えられない。取り合えず、フンフンと適当な相槌を打つ。

リムはタオルで頭をやや乱暴に拭きながら、話を続ける。

「心配する必要はない。新しく儂が造った器の中でプルーのベルヴェルグの力が培養されれば、体もそれに合わせて元の姿に戻るだろう」

「へえ……やるね……」

グラードが喘ぎ喘ぎ、言葉を搾り出す。妹が助かったという事実、心の底から感動しているのだろう。苦しいだろうに態々声を発したのは、感謝の意を示したかったからに違いない。挑発するような言葉になってしまっているのは、照れを隠す為だと思われる。

そんなグラードの真意を読み取ったのか「もつと褒めるが良い」などとリムが胸を張っている。

「リムの自慢はどうでも良いけどさあ……あ、プルーちゃんが悪いなんて一言も言っていないけどよ」

セインが仏頂面で口を挟む。

「早くしないと、っていうかただでさえ遅れてたんだ。エナサンと契約した日に間に合わないんだけど」

路に市を開くのはただではない。その地域と契約し、場所代を払う必要がある。余計な金を払わなくても済むように、出来るだけ早くエナサンに到着したいというのがセインの本音なのだろう。

セインのその言葉に、全員が重い腰を上げる。

「よし、では出発するかろう」

「……なーに仕切ってるのさ……ロリコンペド野郎」

グラードがぼそりと呟いた言葉に、誰からとも無く笑声が零れた。

二話（後書き）

ふわあああ！

遅くなつてごめんなさい！

速さだけが取り得だったのに……

しかも、今回はほとんどが人物紹介です。
読みづらいにも程がある。

色々、失礼しました……

三話

鮮やかに黄色い翼を持つ鳥が、悠々と空を旋回している。丸くキヨロキヨロとよく動く目が一つの廃屋を発見し、固定れた。見つけた、とても言うかのように、鳥は甲高くしゃがれた一声を上げる。丸みを帯びた嘴の中で、他の種と比べると厚めの舌が踊る。厚い舌は人の言葉を真似する事ができる。鳥は少しずつ羽ばたきを弱め、滑らかな円を描きながら滑空を始めた。廃屋の屋根のごく近くまで降りてくると、入り口を探して暫くその周りを飛ぶ。一つだけ、周りの景色を写さない窓があった。つまりは、そこにはガラスが詰められていないという事だ。鳥はそこから廃屋に飛び込む。

「おおう、久しぶりじゃんよ。相変わらず色が俺様に似ていて気に食わねえ」

「はっははあ！ インクをぶっかけようなんて、考えちゃ駄目だぞ。あ、ここにインクは無いか」

「……気に入らないなら、殺す方が手っ取り早いんだし……」

廃屋の中には、三体の人影がある。全てが男のものであった。

彼らは鳥が入ってくるなり気配を素早く察知して、それぞれ三様の態度を示した。

物騒な言葉の欠片を投げつけられても、鳥は恐れて逃げ出す事をしない。殺気は向けられても、彼らはそれなりの分別を持っているという事を理解している鳥は、逃げる必要がない。それにもしここで逃げてしまったとすれば、後でそれよりも更に恐ろしい罰が待っている。これは鳥の低い知能にも強烈に刻み込まれる事実であった。

「ぶっかける、か。それは良い案だぜ。インクの代わりに血なんてどうよ？ 真っ赤だぜ」

そう言っただけで笑ったのは、シルヴィア・ギルデンが造った対バリアント用戦闘擬人型の一体、五体目に造られ、現存する擬人型の中では三男にあたる、雷のグローム。

鳥よりも一段と鮮やかな黄色の短髪を持ち、同色の瞳には剣呑な光を湛えている。白い犬歯を覗かせて、獰猛な笑みを浮かべて見せる。白いワイシャツの上から、黄色く長いボアのようなものをストールを羽織るように肩にかけている。その長さは異様に長く両端ともグロームの膝まで届いているから、三メートルほどはあるだろう。グロームが笑う度に肩が揺れて、ずり落ちたボアが肘のあたりで引っ掛かった。

「ははっ、確かに血ならこの部屋には余る程あるな！　だが、赤は俺と被るから止めてくれ」

軽い調子で肩をすくめるのは、同じくシルヴィア・ギルデンが造った対バリアント用戦闘擬人型の一体、四体目に造られ、現存する擬人型の中では次男にあたる、晴のパゴダ。

原色である赤を宿した髪はオールバックと言うには無造作で、後ろに上げられているのは前髪のみである。それも、目尻からはもう前に垂れている。同色の瞳には無邪気な光が入っていた。

カーキ色のタクティカルベストの下には黒の टीーシャツを着ているが、左袖だけ肩口で切り取られている。代わりに左上腕部には黒の布が巻かれ、その上から細いベルト二本で固定されていた。軍用の武骨なデザインのブーツを履いている。

二体の言う通り、部屋は血と肉片で溢れかえっていた。むせかえるような香しい血の臭気が充満している。又ラリと光を反射する内蔵の欠片が壁にへばりつき、床は乾いた血と乾いていない血とで赤黒い色に埋め尽くされている。引きずり出された腸や肝臓は元々はその肉体に収納されていたのかも分からなくなり、頭を破裂させら

れた死体が脳しようと血液で大きく華やかな花卉を作り出している。肉片に混ざって、黒い布切れが血に濡れて落ちていた。黒い色のせいか、濡れたように見えるだけであまり血に染まっているようには見えないが、強く漂ってくる血臭がそれを裏切っている。全身黒で統一した衣服を着た集団。春先のローダ騎士団との殺し合いを生き延びた、ロベール・モーリアの部下達だった。今この瞬間、彼らは対バリアント用戦闘擬人型の兄弟によって完全に殲滅されたことになる。

未だ乾いていない血溜まりの表面が、三体の顔を写し出す。

「……殺せば……皆、殺しちゃえば良いのに。嗚呼……生き物を感じる。気持ち悪い……」

最後の一体が、呟いて自分の体を抱く。彼もやはり、シルヴィア・ギルデンが造った対バリアント用戦闘擬人型である。六体目に造られ、現存する中では四男にあたる、曇のヴェルト。

僅かに青みがかった灰色の滑らかな長髪を、うなじの辺りで黒いリボンを用いて一つに纏めている。同色の瞳は深く澱んでいて気味が悪い。血色の悪い肌は青白く、病的に感じられる。

灰色のタートルネックシャツの上には裾の短いデザインの長袖の上着を羽織り、胴の部分には通常の五倍の長さはあるつかというヴェルトが幾重にも巻き付けられている。

ヴェルトの青く薄い唇が憎々しげに歪められる。

「嗚呼……本当に有り得ない……こんなに醜くて矮小な存在が、此処まで惨めにも行き長らえて来た事が……信じられないよ」

しゃがみこんだヴェルトの前には、舌を小さな針で串刺しにされて地面に縫い付けられた鼠の姿があった。鼠は四肢を千切り取られて、最期の痙攣を繰り返している。まるで、痙攣を起こした子供の

仕業のようだった。力任せに千切られた手足の断面は、どこが皮でどこが肉でどこが骨なのか汚すぎて見分けられない。刃物で切り取るよりも、よほど残酷な仕打ちだった。

パゴーダがそれを、ヴェルトの背後から覗き込む。

「おや、鼠さんだな」

「鼠さんって何だよ。『さん』付けかよ」

グロームが露骨に嫌そうな表情を浮かべた。んべー、と赤い舌を突き出す。

「鼠『さん』は放っておいてよお、この幸せの黄色い鳥『さん』が何を伝えに来たのか、聞こうじゃねえの」

キヒヒ、とグロームが白い歯を剥き出して笑う。

パゴーダが体を起こし、首筋に手を当てて鳥に目をやる。

ヴェルトが澱みの渦巻く暗い瞳を、鼠から鳥へと移す。

鳥は全員の視線を受けて、大きな翼を広げた。

「グラード、伝言。プルー、蘇生」

三体の間に、安堵の空気が流れる。姉の無事に、三体が三体とも胸を撫で下ろしたのが窺えた。やはり、戦闘用擬人型達の結束力は硬いらしい。

グラードからの伝言はまだある。鳥は再び口を開く。

「ルーネ、発見」

「おいおい！ それはびつくりだな！」

パゴーダが身を乗り出して手を叩いて喜ぶ。十数年の間、探し続

けた存在をやつと見つけたのだから、嬉しいに決まっている。

グロームも信じられないという顔をして、自分の頬をつねって引っ張っていた。夢ではないのか、確かめているらしい。擬人型が夢を見るのか、その点は些か疑問ではあるのだが。

「グラード、ネジュ、合流。目的地、エナサン」

それを聞いたヴェルトが、不意に立ち上がる。

「ヴェルト？ どうしたんだよ」

珍しく、自ら殺戮以外の行為をしたヴェルトを疑問に思い、グロームが訝しげに声をかける。

問いかけられたヴェルトは、血色の悪い薄い唇に笑みを浮かべる。ヴェルトのその反応に、表情には出さないもののパゴダとグロームは驚いていた。

ヴェルトはネジュほど感情が剥落していないが、普段は喜怒哀楽のうち怒と哀しか示さない。喜と楽を表すのはいつも、目の前の生き物を全て死滅させた時だけだった。ヴェルトは殺戮が好きなのではない。生きているモノを憎悪しているのだ。例外は自分を含めて七体だけ。グラード、ブルー、パゴダ、グローム、ヴェルト、ネジュ、そしてルーネだけなのだ。

だからこそヴェルトが殺戮以外で笑った事に、二体の兄は驚愕していた。

「ルーネの所に行く……今すぐに。当たり前じゃない……」

そう告げてヴェルトは兄達に背を向け、開いた窓から飛び降りる。

「あーあ、ヴェルト。柄にもなく、興奮しているぞ」

パゴダは別の窓を開き、ヴェルトが地面に身軽に着地するのを見ていた。まだ室内で鳥を突つき回しているグロームを振り返り、ハッハッハと肩を揺らして笑う。

そのグロームが、ふと鳥を突く手を止めて首を傾げる。

「おい、そっぴや今つて夏だよなあ。グラードの兄貴とネジュはこんな時季にそんなクソ暑い所に行つて、大丈夫か？　くたばつてたら、どうしようなあ」

グロームが溢した言葉に、にわかにパゴダが笑いを止める。笑顔が引き吊つて、指先が少し震えていた。

パゴダとグロームは暫し見つめ合い、無言。

パゴダが顎に右手を当てて、反対の左手を窓枠にかける。

「それって、急いで向かつた方が良さうな気がするぞ」

「俺もそう思う」

「……やばいぞ」

二体は確認するように言葉を交わし、慌ててヴェルトの後を追つて窓から飛び降りる。

そんな擬人型達を、鳥はよく動く丸い大きな瞳で見送つた。

いつの間にか、四肢をもぎ取られた憐れな鼠『さん』は息絶えていた。

*

*

*

エナサンの宿で、ルネは開いた小さな窓からぼんやりと、宿に面

した道の様子を眺める。

その道では店を出して営業を開始する為に、行商人ギルド・ヴォーリヤの面々が暑い中で忙しそうに立ち回っていた。

「果物の店はそこだ！ 需要があるから、一番大きなヤツにしろ！」

セインの指示が飛ぶ。

それを聞いてルネは、やはりセインはギルド・ヴォーリヤの団長なのだな、と感心した。

実を言えば、ルネの部屋は四階にあり、道も往来する人々で非常に賑やかになっている為、セインの声を正確に聞き取る事は難しい。それを可能にしているのが、ルネの人並み外れた身体能力からなる聴力である。

「了解。これで良いんだよね？」

セインの指示に従って、組み立てていない露店のセットを持ち上げたのはフィルだった。流石、メイディナ族という生まれに加え、ベルヴェルグによる肉体強化を施しているだけあって、相当な重さだろうと思われる金属の支柱の複数本を軽々と持ち上げてしまう。人手が足りないという事があり、ロード騎士団のメンバーまでもが駆り出されている。リムは分からないが、フィルの他にも確実にイオリ、ストエカス、ウインストン、ヴォットとスピキオの双子はセインにこき使われているだろう。

「んん、皆、頑張ってるなあ……」

ルネは下の光景から視線を剥がし、室内へと向ける。太陽が強く照っている外から薄暗い室内へと急に目を移した為、実際よりも部屋が暗く感じられた。だがルネの瞳は一秒にも満たないうちに暗順

応を起こし、慣れた視界にルネは大きな金緑の瞳を瞬かせる。

ルネが下でギルド・ヴォーリヤの手伝いをせずに宿の部屋にいるのには、ちゃんとした理由があった。それはエナサンに入ってから目を覚まさない、グラードとネジユの世話である。セインとリムからの指示だ。

二体はエナサンに無事についた事に安心したのか、深い眠りに落ちたのだ。ブルーによれば、これは睡眠というよりも仮死状態に近いらしい。ずっと稼働していればベルヴェルグの力を無駄に消耗してしまうから、力が使えないのならいっそ、稼働を止めてしまうという訳だ。

「でも……」

ルネには、自分がこの場にはあまり必要ではなかったような気がする。この状態ならば、下でセインの手伝いをした方が全体的に効率が良いように感じられる。しかし下に行ってもセインにすぐ追いつ返されるので、しかたなくここにいるのだった。だが、ルネの仕事はここにはない。

なぜなら。

「……………」

「ねえねえ、ブルー。グラードとネジユが寝てる間に、服、ぬがせちゃってもいいかなあ？」

「それは何故？」

グラードとネジユの二体には、アデラとユーク、そしてブルーが張り付いているからであった。この二人と一体が何でもこなしてしまふ為、ルネの出番は全くと言っていいほど無い。

問われたアデラが顎に人差し指を添えて、斜め上に視線を固定する。

「ええつとね？ 仮死状態でも、涼しくしてた方がいいんじゃないかと思って。起きた時に体があつたまつてたら、いやでしょ？」
「成る程ね。それならば二人も納得してくれるんじゃないかしら」

ブルーが敬語を使うのはルネとリムだけで、それ以外の人間や兄弟達には割りとフランクな口調で話している様子だった。ルネは自分には気軽な口調で話すよう言ったのだが「めっそもありません」という一言であっさりと却下されていた。

ブルーからのゴーサインを受け取ったアデラが早速二体の服を脱がせにかかる。

それに、慌てたブルーが止めに入る。

「ちよつ、何してるの！？ 女の子なのに！ 私がやるから」

「ふっふっふ。気にしない気にしない」

「……………」

アデラはグラードとネジュから剥ぎ取った服を、ユーグにぽいぽいと放っていく。

受け取った服をユーグが丁寧に畳み、グラードのもの、ネジュのものと分けて積んでいた。

ブルーとルネの介入する余地など無い。

「あ、服」

思い出して、ルネはぼつりと呟く。

その呟きに反応して、二人と一体の視線がルネに集まった。

同時に、アデラとユーグの作業も一時停止する。

「ブルーの服、まだ揃えてなかったよね」

「ああ……そういえば」

たった今、気付いた、というようにブルーが自分の体を見下ろす。他ならぬブルー自身も忘れていたらしいが、彼女の格好はまだ、グラードのマフラー一枚を局所に巻いただけという状態だ。このままの服装でブルーを他人の目に晒せばどうなることか。ルネ達に変態のレッテルを貼られ、ブルー自身にも要らぬ被害が及ぶだろう。余計な騒ぎは極力、起こさない方がよい。

「ねえ。今、買いに行かない？」

何より、ルネは暇である。ブルーの服を買うためなのだから、少しばかり言いつけを破ったとしても、責められる事はないだろう。それに、ユークとアデラがいるから、グラードとネジユの世話については安心である。

ルネの言葉に、ブルーが頷きを返す。

「そうですね、ありがとうございます」

言ってから、ブルーは少しばかり迷うような仕草を見せた。

「しかし、私はどのような物が良いのか分からないから……アデラ、悪いけど付き合ってくれないかしら？」

「え？ あたし？」

ブルーに指名されたアデラは青い大きな目をそれ以上に大きく見開き、次いで両手を自身の前でわたわたと振った。

その様子は、何かに慌てているようでもある。

「あ、あたしもそーゆーの苦手だし……ポーレットにたのんだ方が

絶対にいいよ！」

ブルーにはアデラの慌てる理由が分からなくて、小首を傾げる。

「でも、ポーレットさんは忙しいみたいだもの……」

「いや、ポーレットと一緒に来てもらおう」

泣きそうな顔のアデラに、ルネは助け船を出す。

というのも、ユーグが目線で訴えかけてきたからであった。

どこでどのような発言をすれば良いのか分からないルネは、アデラとブルーの会話に傍観を決め込んでいたのだが、声を出せないユーグの訴えにより口を開いたのだった。

たとえどんな言葉であったとしても、ルネに忠実なブルーならばその言に従うだろう。

「はい……解りました」

事実、ルネが口を挟むとブルーはあっさりと引き下がった。しかしまだ、納得の行かない顔をしている。当たり前だ、ろくになんの説明もされていないのに、アデラと共に買い物に行く事を諦めねばならないのだから。自分だけが知らない、輪から外れているのだという疎外感。それを彼女は感じているのだろう。

「じゃあ、ポーレットに声をかけて行こうか」

その容姿に影響されて、町で見た親子連れのように、ルネはブルーの小さな手を掴み、繋ぐ。

小さい頃にルネもシルヴィアにそんなことをされていたような気もするが、何せ幼少時の記憶であるためはつきりとはしていない。

ブルーはしかし、子供扱いという事については何も言わず、ただ、

ぎゅっとその手を握り返してきた。

「……いつてらっしゃい」

心の底から申し訳ないと思っているのだろう。眉尻を下げたアラが、口の中でもごもごと呟いた。

それによって、悪意はないのだと理解したブルーが微笑みを浮かべる。

「いつてきます」

ルネとブルーは部屋を出て、店へと向かうために一階へと続く階段を降りる。

手は繋いだままであった。そして互いに、それを振りほどこうとはしない。

一つの階を下るには、二つの階段を降りる必要がある。五つ目の階段、つまり二階と一階の間を降りている時、ブルーが躊躇うようにしながらも口を開いた。

「あの……ポーレットさん、忙しそうだったのですが。連れ出してもよろしいのでしょうか」

「うん。良いんじゃないかな」

ルネは頷いてほけほけと笑う。

ブルーが「そんな適当な」と言っただけで呆れた表情を浮かべた。

「きっとフィルが二人分やってくれるよ。フィルは何だかんだで優しいから」

「成る程。使いやすい人なんですね」

二人は、本人が聞けば怒ろうか喜ぼうか判断に迷うであろう品評をしながら、ようやく一階の宿の入り口に辿り着いた。今のブルーの体だと歩幅が小さく、彼女のペースに合わせると必然的に歩く速さがゆっくりになる。

「ところで……」

「なあに？」

ブルーが少しだけ緊張した面持ちで切り出す。本題を口にしようとしているのだろう。

「何故、アデラは私と買い物に行く事を拒んだのですか？」

そう言つて痛切な瞳をしてルネを見上げてくる。アデラに突き放されたようで寂しかったに違いない。

アデラに深く関わるような者には隠すような事ではなく、ブルーはすでにアデラと友情という関係を築いている。

とは言つものの、ルネにはそれを隠さなければならないという思ひは皆無であり、むしろそれに気付いている事が当たり前だと認識していた。

「だって、男の子が女の子の着替えを見るなんて恥ずかしいでしょう？ アデラの場合は特に意識しちゃう年齢だし。僕は別に無いけれどね」

「え？」

ルネの言葉をよく理解できなかったらしいブルーが、目を見開いて問い返してきた。言葉の意味を推し量ろうと眉を顰めたり、瞬きをしたりしている。

「どういつ……事ですか？」

「どうも……」

ルネは戸惑いを隠せない様子であるブルーの青い瞳を見返す。

「——アデラは男の（・）子だから、女の子のブルーの着替えを見ちゃうのは悪いと思ってるんだよ」

三話（後書き）

『羅生門』に出てくるきりぎりすのように、時間の流れを感じさせる表現を使いたかったんですが……

……あ、鼠さんのことです。

あまり、うまくいかないものですね。

母親に否定された男児

——あなたが女の子だったなら良かったのに。

一体、何度その言葉を聞かされたらだろうか。

そしてその度に少年は、母親から見えないところでこっそりと涙を流した。

出来る事ならば、今すぐにも母親の望み通り女子として生まれ変わりたい。そうすれば、母の最大級の愛をこの身に受ける事が出来る。

しかしそれは叶わぬ願いであり、少年は、母も自身も望まぬ性別を抱え生きていかねばならなかった。

母が少年に重ねているのは、幼い頃にバリエーションに襲われて命を落とした、彼女の双子の妹。死んだ彼女の半身の面影を、少年に見ているのであった。

もしも、自分が女の子だったら。そんな幻想を心の中に思い描いていた。

幻想に、少しでも近づきたい。ほんの束の間でも良い、たった一人の肉親であり母の愛が欲しい。

ただその一心で、少年は女子の『真似^{ふり}』を始めた。フワフワとしたレースやリボンがあしらわれたスカート。長く伸ばした、指通りの良い金髪。女の子らしい仕草、挙動、言葉遣い。

少年は母にとって、妹に似た人形だった。人形として可愛がられる時だけ、少年は母の愛を貰えた。

——何かが違う。

少年の心はそう悲鳴を上げていた。ここまで自分を押さえつけても、少年は母の「最愛」にはなれない。

少年の実父は、彼が幼い頃にバリエーションに喰われ他界している。

見目の良かった少年の母は、夫の葬儀が済んで間もなく、恋人が出来た。死別した夫の形見である少年になど、目もくれない。

偽物の父親。汚らしい、知らない男。母の「最愛」はその男だった。

男は、母のいない時を見計らい、少年に暴行を加えた。服に隠れて見えないところに念入りに念入りに煙草の火を押し付ける事もあれば、無言で只ひたすらに殴り続ける時もあった。

—— 前の男の子供など要らない。女の格好をした恥知らず。

そう罵倒されることも少なくなかった。

—— あの人があたしを打つ。要らない子だって言うんだよ。

母に訴えても、笑い飛ばされるだけで相手にもしてくれなかった。ここにいても、自分が愛されることはない。少年は唐突に思った。養父に与えられるのは痛みだけだし、母にも「我が子」として愛されていない。人形ではいたくない。心もあつて意志もある。

考えていく程に、少年には母と養父の二人が、どうしようもなく下らない存在に思えた。

—— あなたが女の子だったら良かったのに。

幾度目なのか、もう数える事も飽きてしまった言葉が再び女の口から放たれた時、少年は衝動の赴く俣に家を飛び出していた。

必死で走る少年の背後から、男の声が追いかけてくる。少年と成人男性の体力では大きく差がある。

彼らはどうあっても、少年という人形が必要であるらしかった。その少年がこれほどまでの拒絶の意を示しているにも関わらず。

もう無理だ。諦めようか。少年がちらりと思った時、前方に人影が見えた。

その人物は逃げる少女と、それを追いかける男という状況にどう対処すれば良いのか分からないようで、ただ瞠目していた。

—— お願い、助けて！

少年は藁にもすがる様な思いで叫んだ。

—— あたしをここから連れ出して！！

求める声は、少年自身が思っていた以上に、案外すんなりと出た。黒髪金眼という出で立ちのアーバン族が広げた腕に、少年は些かの迷いもなく転がり込んだ。

アーバン族の彼の胸は温かく、少年は今まで感じたことの無かったそれに涙を溢した。

少年が見も知らぬ彼の腕の中に飛び込んだ理由は単純だった。彼の金眼は、少年が今まで出会ったどの大人よりも綺麗で透明で、彼ならば自分を裏表なく愛してくれるのだらうと、そう感じたから。自分は言いなりの人形ではないのだと、認識してくれるであろう初めての人だったから。

連れ出してと願った少年の叫びを聞いてくれた彼ならば。

少年は希望を抱きながら、優しくあやしてくれる彼の腕の中で暫く泣いていた。

母親に否定された男児（後書き）

アホかってぐらい久しぶりの更新（汗）

諸事情あって、ネットから遠ざかっていました

まあ、その理由に興味がある人は、私の活動報告を見てください
興味無い人は見なくてもいいけどね

停滞してた分、頑張りたいなあ……なんて
あくまでも願望です

とにかくひっそりと生存していたので、これからよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6813/>

“ Variant ”

2011年3月30日00時15分発行